

おお つか こ ふん ぐん  
**大塚古墳群**  
(B区)

平成26年7月

宇都宮市教育委員会

## 序

宇都宮市の市街地から約3kmほど北西に位置する上戸祭付近は、釜川によって開けた低地と宇都宮丘陵の南端に位置する丘陵地帯からなり、近年、宅地化の進行や宇都宮北道路の完成等によって、その姿を大きく変えつつあります。

今回発行となった大塚古墳群は、県指定史跡の大塚古墳と隣接した西側に位置します。オフィス永瀬有限会社の宅地造成に先立ち、埋蔵文化財の取扱いについて、事業者と協議をいたしました。その結果、記録保存を目的とした発掘調査を実施しました。

本報告書は、発掘調査で得られた成果をまとめたものであり、多くの方々が多方面におかれまして、広く活用していただけますことを期待するものであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました関係各位、関係機関並びに終始ご協力いただきました地元関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成26年7月31日

宇都宮市教育委員会

教育長 水 越 久 夫

## 例 言

1. 本書は、栃木県宇都宮市上戸野町大字塚に所在する「大塚古墳群（B区）」の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、オフィス永瀬有限公司による宅地開発計画に伴うもので、同社の依頼により宇都宮市教育委員会を調査主体者とし、調査実務は株式会社日本産業史研究所がこれにあたった。
3. 調査は、平成25年9月10日～26日まで野外調査を実施し、その後同年7月31日まで整理・報告書作成作業を行った。
4. 野外調査は水野順敏、柏崎広伸があたり、整理・報告書作成作業は両名の他に新井 潔・鈴木智子の協力を得た。本書の執筆はI-1を石川和弘、I-2～4、II-3～7、III-1を水野、II-1・2、III-2・3を柏崎、遺構・遺物の挿図及び遺物の実測・写真撮影、複製表作成は新井が担当し、編集作業は鈴木との協力を得た。写真図版の図版1～2は高橋 純氏（J・T空襲）、図版8・9は大門直樹氏（国士館大学文学部技術職員）、図版3～7、10～20は水野、図版21～25は新井の撮影である。

### 5. 調査組織

調査主体者・宇都宮市教育委員会

調査実務者・株式会社日本産業史研究所

水越 久夫 教育長

菅間裕二 代表取締役

赤石 亮 文化課長

水野順敏 調査担当者（日本考古学協会々員）

富川 努 文化課文化財保護グループ係長（前任）

柏崎広伸 調 査 員（栃木県考古学会々員）

今平 利幸 文化課文化財保護グループ係長（後任）

新井 潔 整理担当者（日本考古学協会々員）

石川 和弘 文化課文化財保護グループ

6. 調査記録及び出土遺物は宇都宮市教育委員会が保管する。

7. 野外調査から整理・報告書作成作業において下記の機関及び各位よりご協力とご指導を賜った。ご芳名を記して謝意を表する。

オフィス永瀬前、栃木県総合コンサルタント事務所、栃木県教育委員会事務局文化財課、駒塚田土建、樋山真司土地家屋調査士事務所、J・T空襲、棟ダイショウ、秋元陽光、石川義夫、石川幸代、市橋一郎、上野とも子、内山敏行、大澤伸啓、賀来孝代、奥野喜宣、小森牧人、須田浩太郎、大門直樹、高橋史朗、竹部 謙、長井正欣、中島正雄、中村亨史、南川欣幸、橋本澄朗、  
頃 静夫

（敬称略、順不同）

### 8. 調査参加者

天羽隆廣、石川義夫、入江春江、入江通子、郷間久男、篠原信子、塩沢寿男、諏訪白虎、鈴木一男、鈴木 博、菅野 繁、住谷 昭、長島 諒、長谷川健二、日高澄子、渡辺重夫

（敬称略、順不同）

## 凡 例

1. 本遺跡名の略号は、U（宇都宮）-OTK（大塚古墳群）で、各遺構の略号はSZ（古墳）、SK（竪穴・土坑）、SS（集石）、SX（不明遺構）で示す。

なお、1号墓は当初SZ-6としたが古墳では無いことが判明し変更した。

2. 第2図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「大谷」「宝蔵寺」「宇都宮西部」「宇都宮東部」を部分複製し加筆した。第3図は宇都宮市都市計画図2千5百分の1地形図「IX-IE 80-2」を部分複製し加筆した。第1表は宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第77集「八幡山古墳群1号墳・大塚古墳群」の第1表を転用加筆した。

3. 遺構図面上の北の方位は、産標北を示す。土層図、断面図の水準線の数値は、海抜標高を示す。

4. 挿図の遺物番号は本文中及び写真図版の番号と合致する。写真図版は○-□の前の挿図番号、後の遺物番号である。

# 目 次

序	
I はしがき	
1. 調査に至る経緯	9
2. 遺跡の位置と環境	12
(1) 地理的環境	12
(2) 歴史的環境	12
3. 調査概要と経過	13
4. 調査の方法と基本層序	15
(1) 調査の方法	15
(2) 基本層序	16
II 遺構と遺物	
1. 3号墳 (位置・外部施設、土器集中区、埋葬主体部、出土遺物)	19
2. 4号墳 (位置・外部施設、埋葬主体部、出土遺物)	21
3. 5号墳 (位置・外部施設、埋葬主体部、出土遺物)	34
4. 1号墓 (位置・外部施設、付属施設、出土遺物)	41
5. 塚穴	46
6. その他の遺構	54
7. その他の出土遺物	60
III 総括	
1. 土地利用の変遷	63
2. 古墳群・古墳について	64
3. 1号墓及び塚穴群について	66

## 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	第7表	墳穴・1号墓出土遺物観察表
第2表	3号墳出土遺物観察表	第8表	その他の出土土器（縄文）観察表
第3表	3号墳土器集中区出土遺物観察表	第9表	その他の出土遺物（石器）観察表
第4表	4号墳出土遺物観察表	第10表	その他の出土遺物（土師器・須恵器・瓦） 観察表
第5表	5号墳出土遺物観察表		
第6表	5号墳周溝内出土土器観察表		

## 挿 図 目 次

第1図	試掘調査図	第21図	4号墳出土遺物
第2図	遺跡付近地形図	第22図	5号墳現況図
第3図	遺跡の位置と周辺遺跡	第23図	5号墳墳丘図
第4図	基本層序	第24図	5号墳墳丘土層図
第5図	調査区現況図	第25図	5号墳周溝土層図
第6図	遺構配置図（1）古墳時代以降	第26図	5号墳周溝南東部土器出土状態
第7図	3号墳現況図	第27図	5号墳石室図（1）
第8図	3号墳墳丘図	第28図	5号墳石室図（2）
第9図	3号墳墳丘・周溝土層図	第29図	5号墳出土遺物（1）墳丘・墓道
第10図	3号墳土器集中区土器出土状態	第30図	5号墳出土遺物（2）周溝南東部
第11図	3号墳出土遺物（1）墳丘・周溝	第31図	1号墓・出土遺物
第12図	3号墳出土遺物（2）土器集中区-1	第32図	墳穴（1）SK-02・03、05～10
第13図	3号墳出土遺物（3）土器集中区-2	第33図	墳穴（2）SK-11～14、18～21
第14図	4号墳現況図	第34図	墳穴出土遺物
第15図	4号墳墳丘図	第35図	遺構配置図（2）古墳時代以前
第16図	4号墳墳丘・周溝土層図	第36図	その他の遺構（1）SK-04、15～17、22～ 24、SS-01
第17図	4号墳墳丘土器出土状態	第37図	その他の遺構（2）SX-01・02
第18図	4号墳石室図（1）	第38図	その他の遺物（1）縄文時代
第19図	4号墳石室図（2）	第39図	その他の遺物（2）古墳時代以降
第20図	4号墳石室天井石と旧地表面の掘り込み		

## 図 版 目 次

- 図版 1 A. 調査区全景 (北空中より) B. 調査区全景 (真上空中より)
- 図版 2 A. 3号墳全景 (東空中より) B. 4号墳全景 (南空中より) C. 5号墳全景 (南空中より)  
D. 1号墓全景 (西空中より)
- 図版 3 A. 調査前遠景 (南東より) B. 調査前全景 (北東より) C. 調査区遠景 (南東より) D. 調査区近景 (南より)
- 図版 4 A. 3号墳調査前全景 (東より) B. 同前全景 (北東より) C. 同前周溝南 (北東より)  
D. 同前周溝北 (東より) E. 同前北周溝西土層 (東より) F. 同前周溝東土層 (南より)  
G. 同前周溝内土器 (北より) H. 同前近接 (南より)
- 図版 5 A. 3号墳封土東西土層 (南より) B. 同前墳丘東封土中の土器群 (東より) C. 同前 (東より)  
D. 同前 (北より) E. 同前土器群下層土層 (東より) F. 同前旧地表面 (東より) G. 同前縄文時代 確認面 (西より) H. 同前墳丘下出土遺物 (北より)
- 図版 6 A. 4号墳調査前全景 (南東より) B. 同前全景 (南より) C. 同前周溝北土層 (東より)  
D. 同前周溝東土層 (南より) E. 同前周溝北東土層 (北西より) F. 同前周溝南土層 (東より)  
G. 同前周溝南 耳環出土状態 (南より) H. 同前南側土器出土状態
- 図版 7 A. 4号墳墓道北土層 (南西より) B. 同前石室外側の閉塞状況 (南より) C. 同前内側の閉塞状況 (南より) D. 同前 (西より) E. 同前羨門東脇の刀子出土状態 (南より) F. 同前 (南西より) G. 同前墓道の耳環出土状態 (南より) H. 同前墓道西上部の耳環出土状態
- 図版 8 A. 4号墳石室近景 (南東より) B. 同前石室北半部 (南より) C. 同前西壁 (南東より)  
D. 同前東壁 (南西より) E. 同前石室南半部 (北より) F. 同前 (北東より) G. 同前 (北より) H. 同前天井石 (北下方より)
- 図版 9 A. 4号墳石室羨門 (南より) B. 同前石室北半部 (南より) C. 同前奥壁 (南より) D. 同前天井石 (南下方より) E. 同前天井・奥壁 (南下方より) F. 同前奥壁 (南より) G. 同前南半部 (北下方より) H. 同前天井石 (北下方より)
- 図版 10 A. 4号墳墳丘東西封土土層 (南より) B. 同前中央部土層 (南東より) C. 同前封土南北土層 (南西より) D. 同前封土東西土層 (南東より) E. 同前封土南北土層北半部 (東より) F. 同前石室天井石と旧地表面の掘込 (北より) G. 同前封土除去後の石室 (南より) H. 同前 (東より)
- 図版 11 A. 4号墳石室羨道東壁 (西より) B. 同前石室羨道西壁 (東より) C. 同前玄門 (南より)  
D. 同前玄門 横断面 (南より) E. 同前石室根石 (南より) F. 同前玄室横断面 (南西より)  
G. 同前石室根石 (北より) H. 同前玄室 横断面 (南より)
- 図版 12 A. 4号墳石室掘方 (南より) B. 同前 (北より) C. 同前東壁北半の扶込み (西より)  
D. 同前石室天井石上部の加工痕 (西より) E. 同前天井石の加工痕 (東より) F. 同前近接 (東より) G. 同前石室上部の裏込め (東より) H. 同前 (南より)
- 図版 13 A. 5号墳調査前全景 (南より) B. 同前全景 (南より) C. 同前周溝南側土層 (西より)  
D. 同前周溝北側土層 (東より) E. 同前周溝南東部土器出土状態 (1) (東より) F. 同前周溝南東部土器出土状態 (2) (南東より) G. 同前石室南側の河原石出土状態 (南より) H. 同前石室確認状況 (南より)

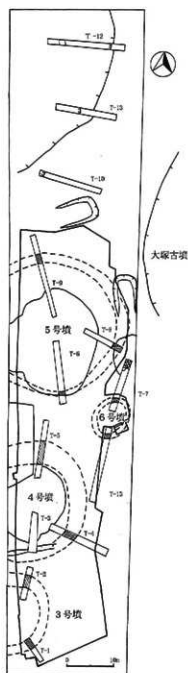
- 図版14 A. 5号墳石室全景(南より) B. 同前(北より) C. 同前閉塞(南より) D. 同前玄門部(北より) E. 同前石室(北東より) F. 同前玄門部(北より) G. 同前羨道東壁(西より)  
H. 同前羨道西壁(東より)
- 図版15 A. 5号墳羨道追葬時床面(南より) B. 同前羨道追葬時床面(南面) C. 同前羨道部掘方底面(南より) D. 同前玄門部断面(南より) E. 同前奥壁(南より) F. 同前玄室 横断面(南より)  
G. 同前墳丘封土東側土層(南より) H. 同前墳丘封土北側土層(東より)
- 図版16 A. 5号墳石室根石(南より) B. 同前石室根石(北より) C. 同前石室奥壁(南より)  
D. 同前二次加工痕(南より) E. 同前石室奥壁縦断面(西より) F. 同前石室掘方(南より)  
G. 同前石室掘方(北より) H. 同前東壁の扶込み(北西より)
- 図版17 A. 1号墓全景(南より) B. 同前西側の土壌完掘(南より) C. 同前土壌北端の炭化物(南東より) D. 4号墳北東の土壌群(南西より) E. SK-02完掘(南より) F. SK-03完掘(南より)  
G. SK-05完掘(東より) H. SK-06完掘(南西より)
- 図版18 A. SK-06手前のローム土中土器出土状態(東より) B. SK-07完掘(南より) C. SK-08-09完掘(南東より) D. SK-10完掘(南より) E. 同前手前の土器出土状態(南より) F. SK-11完掘(南より) G. SK-12完掘(南より) H. SK-13完掘(南西より)
- 図版19 A. SK-14完掘(南より) B. SK-18完掘(西より) C. SK-19完掘(南西より) D. SK-20完掘(南より) E. SK-21完掘(南東より) F. 4号墳丘下の遺構(南東より) G. SK-04完掘(南東より) H. SK-15完掘(南より)
- 図版20 A. SK-16完掘(南西より) B. SK-17完掘(南より) C. SK-22完掘(西より) D. SK-23完掘(東より) E. SK-24完掘(東より) F. SS-1完掘(南より) G. SX-01完掘(東より)  
H. SX-02完掘(西より)
- 図版21 3~5号墳、1号墓、SK-06・10・18出土遺物
- 図版22 3号墳土器集中区出土土器(1)
- 図版23 3号墳土器集中区出土土器(2)
- 図版24 5号墳周溝南東部出土土器
- 図版25 その他の出土遺物(縄文土器、石器、瓦)

# I はしがき

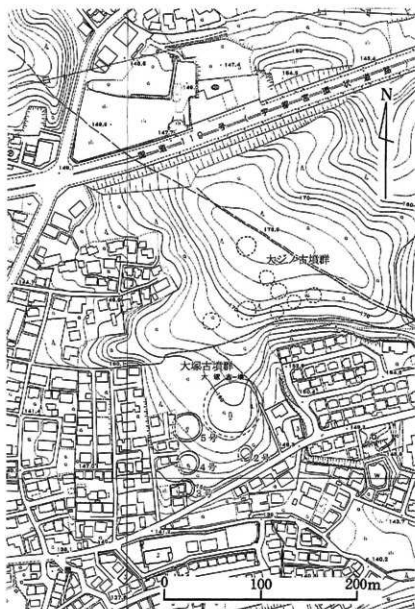
## 1. 調査に至る経緯

宇都宮市上戸祭 2989-4 に所在する個人所有地 (約 4,000 m<sup>2</sup>) に対して宅地造成が計画された。当該地は、大塚古墳群 (県遺跡番 2359) と呼ばれる周知の遺跡である。なお、東側に隣接する大塚古墳は、昭和 32 年 8 月 27 日に指定された県指定の史跡である。

平成 24 年 2 月 21 日・22 日・24 日に市教委が確認調査を行った。調査の結果、古墳が 4 基確認された。3 号墳は墳丘径約 12 m (周溝を含めた直径は約 17 m) で、墳丘が半分残っているが、石室は既に削平され



第1図 試掘調査図



第2図 遺跡付近地形図



ていると考えられる。4号墳は墳丘径約19m（周溝を含めた直径は約26m）で、西側1/3が削平されている。T-3、T-4のトレンチ内で凝灰岩の破片が見られることから南側に開口する横穴式石室が存在するものと考えられる。5号墳は墳丘径約28m（周溝を含めた直径は約31m）で、西側1/5が削平されている。T-6のトレンチ内で凝灰岩が見られることから南側に開口する横穴式石室が存在するものと考えられる。6号墳は現状では削平された古墳で、T-7、T-13で周溝が確認された。墳丘径約6m（周溝を含めた直径は約8m）の小規模なもので、埋葬施設はすでに削平されているものと考えられる。

T-10～T-12では、現地形でみられる自然の谷地形の状況が確認された。T-10・T-11では遺構は確認されなかったが、T-12の深さ1.5mの谷部で直径約1mの円形の土坑が1基確認された。

この調査成果をもとに、事業者である オフィス永瀬有限会社と協議した結果、発掘調査が必要となり、市教委を調査主体者とし、調査実務は事業者の依頼を受けた 株式会社日本竊染史研究所がこれにあたることとなった。

発掘調査の対象面積は約1,900㎡で、調査期間は平成25年9月10日～平成26年1月25日である。この間、1月9日・17日・23日に、市教委による立会いを受け、1月25日には野外調査をすべて終了した。

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	時代と種別	備考
1	大塚古墳群	宇都宮市戸祭町	古墳時代の古墳	県指定史跡、円墳5基
	北山古墳群	宇都宮市瓦谷町	古墳時代の古墳	前方後円墳3基、円墳9基、（現存5基）
2	宮下古墳			墳長43mの前方後円墳
	雷電山古墳			墳長40mの前方後円墳
	椋栗山古墳			墳長40mの前方後円墳
3	上の台遺跡	宇都宮市瓦谷町	古墳時代の集落跡	
4	曾理部庭遺跡	宇都宮市瓦谷町	縄文・古墳時代の集落跡	
5	欠の上遺跡	宇都宮市瓦谷町	縄文・古墳時代の集落跡 古代の須恵器窯跡	
6	広袋窯跡	宇都宮市瓦谷町	古代の須恵器窯跡	
7	椋畑遺跡	宇都宮市瓦谷町	縄文・弥生の集落跡	
8	野沢石塚遺跡	宇都宮市野沢町	縄文・弥生の集落跡	
9	園敷土用遺跡	宇都宮市園堀町	古墳時代の集落跡	
10	瓦塚日清遺跡	宇都宮市瓦谷町	縄文・古墳時代の集落跡	
11	瓦塚古墳群	宇都宮市長岡町	古墳時代の古墳	市指定史跡、墳長約50mの前方後円墳、円墳41基
12	谷口山古墳群	宇都宮市長岡町	古墳時代の古墳	市指定史跡、円墳5基
13	長岡百穴古墳	宇都宮市長岡町	古墳時代の古墳	県指定史跡、横穴墓52基
14	百穴塚遺跡	宇都宮市長岡町	縄文・古墳時代の集落跡	
15	淨ノ森古墳	宇都宮市上戸祭町	古墳時代の古墳	前方後円墳？
16	北原遺跡	宇都宮市上戸祭町	縄文・古墳～平安時代の集落跡	
17	上戸祭中ノ島遺跡	宇都宮市上戸祭町	縄文・古墳時代の集落跡	
18	大ジノ古墳群	宇都宮市上戸祭町	古墳時代の古墳	円墳8基
19	上戸祭大塚塚跡	宇都宮市上戸祭町	古代の瓦窯跡	
20	松ヶ丘遺跡	宇都宮市上戸祭町	縄文・古墳時代の集落跡	
21	北の前遺跡	宇都宮市上戸祭町	縄文～中世の集落跡	
22	前田遺跡	宇都宮市上戸祭町	古墳～平安時代の集落跡	
23	田向遺跡	宇都宮市長岡町	縄文・古墳時代の集落跡	
24	根原原遺跡	宇都宮市上戸祭町	古代の瓦窯跡	
25	水道山園跡	宇都宮市中戸祭町	古代の瓦窯跡	
26	山本山古墳群	宇都宮市山本町	古墳時代の古墳	円墳2基
27	戸祭兜塚古墳群	宇都宮市戸祭町	古墳時代の古墳	円墳6基
28	戸祭兔田遺跡	宇都宮市戸祭町	古墳時代の散布地	
29	笹雲寺境内古墳群	宇都宮市戸祭町	古墳時代の古墳	墳長40mの前方後円墳
30	八幡山古墳群	宇都宮市塩田町	古墳時代の古墳	
31	鎌蔵山古墳	宇都宮市塩田町	古墳時代の古墳	墳長40mの前方後円墳
32	入畑窯跡群	宇都宮市山本町	江戸～明治の窯跡	



第3図 遺跡の位置と周辺遺跡 ●古墳 ■集落 ▲窯跡

## 2. 遺跡の位置と環境

### (1) 地理的環境 (第2図)

大塚古墳群は、栃木県宇都宮市上戸祭町大塚 2989-4 に所在し、市街地の中心部から北方約 3 km の丘陵部の雑木林に立地する。しかし近年は宇都宮市の「山の手」として急激に宅地化が進み、今次調査の要因もその一環である。なお、調査区の北方約 250 m を宇都宮環状線が通り、南方約 0.8 km を日光街道が東西に延びるなど自動車交通の要衝である。

宇都宮市は関東平野の北端に位置する栃木県のほぼ中央部に所在し、日光山地を源とする鬼怒川・大谷川・黒川などが形成する複合扇状地の扇端に立地している。この為、山地から平野部への転換点にあたり、市域の北側には丘陵が見られるが、南側では平野が広がっている。

市内は南流する鬼怒川・田川・姿川などによって、岡本台地・田原台地・宝木台地等が形成されている。

さらに、旧上河内町の高館山を北端とする宇都宮丘陵(標高 150 ~ 200 m)が市内中心部の八幡山公園に向って南北に延びており、今次調査区はこの丘陵頂部南縁から南斜面(標高 150 ~ 155 m)に立地している。

この宇都宮丘陵は市内瓦谷町付近で一時的に東流する田川によって北部と南部に分断されており、丘陵東側は急峻な崖面や開析谷が多く見られるのに対し、西側は比較的緩やかな斜面となっている。宇都宮丘陵南部は東側を田川が、西側を釜川が南流しており、丘陵の裾部には両者によって形成された田川低地が広がっている。この丘陵の基盤は第三紀中新世の凝灰岩や砂岩から成り、丘陵上にはローム層が堆積している。

基盤の凝灰岩は比較的柔らかく、この付近では長岡石と呼ばれ、かつては建築材として採掘されたこともある。また、各所に露頭が見られ、調査地の北東方約 800 m の露頭地には県指定史跡長岡百穴古墳があり、52 基に及ぶ横穴墓が存在する。さらに、近隣の古代の集落跡では堅穴住居跡のカマドの用材として使用されており、本遺跡と同様に周辺の古墳の石室用材としても多用されている。

### (2) 歴史的環境 (第2・3図)

第3図、第1表に示す通り、本古墳群の周辺には縄文時代より中・近世にわたる多数の遺跡が存在する。

このうち、古墳(古墳群)に目を向けると本古墳群の北に隣接する同一丘陵上には大ジノ古墳群(18)が存在し、現在8基の円墳の存在が知られるものの、盗掘によって石室の露出したものが散見される。別の名称が付されているが、立地から同一の古墳群と考えられる。したがって合計13基の円墳のうち最大の古墳が大塚古墳(1号墳)で、県指定史跡となっている。本古墳群が立地する宇都宮丘陵上には多数の古墳群が存在するが、そのほとんどが後期の古墳と見られる。丘陵の南側を見るとこれらの中で最も古いと考えられる御蔵山古墳(31)が南端に位置する。全長62mの前方後円墳で、埋葬施設は不明なものの出土した埴輪から6世紀前半と考えられている。この北側に多数の円墳から成る八幡山古墳群(30)が存在し、祥雲寺境内古墳(29)と呼ばれる全長40mの前方後円墳も存在する。さらに戸祭塚古墳群(27)、山本山古墳群(26)など5~6基の円墳で構成される古墳群が釜川に面する丘陵上に点在している。

また、丘陵の北側に目を転じると、北東方約1.5kmに瓦塚古墳群(11)が存在する。市内でも最大級の古墳群で、全長50m程の前方後円墳の瓦塚古墳を主墳とし30基程の円墳群によって構成されている。この東方には谷口山古墳を中心とする谷口山古墳群(12)がある。さらに、北東方約3kmに北山古墳群(2)が存在する。この古墳群は権現山古墳、宮下古墳、雷電山古墳の3基の前方後円墳と円墳群から成り、権現山古墳は石室形態から初期の横穴式石室と考えられている。

また、北東方約0.8kmには前述の長岡百穴古墳(13)があり52基の横穴墓が所在する。数少ない内陸部の横穴墓の例として興味深い。

次に集落跡を見ると、各所に点在するが、本古墳群の西方約400mの前田遺跡(22)、同500～600mの北の前遺跡などで6世紀末葉から10世紀にわたる集落跡が調査されており、本古墳群との関係が推察された。

また、本古墳群の東側隣接地で上戸祭大塚窯跡(19)が、個人住宅建設に伴い確認された。ここで焼かれた瓦が前述の前田遺跡から多数出土しており両者の関係も興味深い。さらに、北西約2.3～2.6kmの釜川沿いに次の上・広表(5・6)の須恵器窯跡、南方0.7～0.8kmの水道山・根瓦窯跡(25・26)の瓦窯跡、近世～近代の所産と推定される入畑窯跡群など各種の窯跡が所在するのも当地の特徴であろう。

なお、本古墳群のA区2号墳やB区(今次調査)5号墳は石室が破壊され、天井や奥壁の石材が持ち出されていた。今次調査区ではその時期を特定し得る遺物の出土は無かったがA区2号墳からは、かわらけや北宋銭などが出土し該期の行為と推考される。前述の北の前遺跡では溝に囲まれた有力者の屋敷跡と見られる施設が調査されており、その関係が推察される。

### 3. 調査概要と経過

調査区は東西20～25m、南北約100mの細長い形状であり、丘陵南斜面に立地することから、南北の高低差は10m程である。北東には本古墳群の盟主的存在である大塚古墳(1号墳)が所在する。径53.4m、高さ6.2mの2段築成の大型円墳で県指定史跡となっている。その南下方には近年個人住宅の建設に伴い調査された2号墳が所在した。

前記の試掘調査によって調査区内には3～6号の計4基の古墳存在が推定された。調査の進捗に伴い6号墳は古墳では無く古代の墓所と推察されたことから1号墓と名称を改めた。

斜面の南西下方に位置する3号墳は既に宅地開発によって中央から西側が削平されていた。この為、石室は遺存せず、墳丘の東側3分の1程を調査し得たに過ぎないが、径18m程の円墳と推定される。しかし、調査の過程において墳丘封土を除去すると、旧地表面に近い封土中より約80個体の土師器坏がまとまって出土した。

斜面の中位西寄りに位置する4号墳も西側の3分の1程が既に削平されていた。径約19mの円墳で本跡は試掘において墳頂部に乱れが無いことから石室は天井部まで遺存すると推測された。調査の結果、石室は南に向けて開口する横穴式石室で、天井石や閉塞部も遺存したが、羨道上部に穿たれた盗掘坑によって数次の盗掘にあったと推察され、副葬品は極僅かであった。石室は凝灰岩の割石(削石)積みで、奥壁は1石、天井石は5石であったが、羨道の1石は危険な為調査途中で除去した。なお、調査の進捗に伴い墳丘の封土を除去すると、旧地表面に不規則に掘り込まれた溝状の痕跡が認められた。当初は動物の巢穴かと思われたが、埋積土の締りが強く、石室を囲むように見られることから、墳丘の構築に伴う何らかの行為と判断した。

遺物は石室の攪乱土より耳環1点の他は、周溝・墓道などから耳環4点、刀子1点、石室と盗掘坑の攪乱土中よりガラス小玉5点、墳丘南西より土師器高坏、坏などが出土した。

今次調査区の最上位に位置する5号墳は、西端の一部が調査区外に延びて削平され、東端はかろうじて調査区内に所在した。東に隣接する大塚古墳とは周溝外壁どうしの間隔が2～3mと近接していた。径約27.5mの円墳である。近隣の盗掘を受けた古墳の多くは石室が露出したり、墳頂部が陥没している例が多いことから、試掘調査時には石室は天井部まで遺存すると推測された。しかし、調査の結果南に向けて開口

する横穴式石室で、石室の掘方に匹敵するような大型の穴が掘り込まれていることが判明した。石室は凝灰岩の割石（削石）積みで、内部には石材や土砂が充満し、玄室の天井石が1石原位置を離れた状態で遺存したが他の天井石や奥壁の上半部が持ち出されており、石材目的の盗掘と推察された。また、その後埋戻しが行われていたが、石室内から副葬品の出土は皆無であった。墳丘・墓道より土師器、須恵器が少量出土し、周溝南東からは30個体の土師器坏がまとまって出土している。

前述の6号墳改め1号墓としたものは、幅60～90cmの溝が径6m程の不整形円形に廻り、その西端に0.9×2mの長方形の土坑が付随する。土坑（塚）内には炭化材が遺存し、壁面に火熱で赤化した部分も見られたことから火葬墓・火葬跡の可能性を想定して慎重に調査を進めたが一片の火葬骨片も見出できなかった。土坑内より出土の土師器坏から奈良時代の所産と推定される。

また、古墳の周溝内やその周辺より墳穴と見られる土坑（塚）が10数基確認された。その多くは所謂「側壁扶込土坑」であり、内部より遺物の出土は無いが、周溝内に設けられたSK-06・10・18では開口部の手前より土師器坏、甕、須恵器蓋・坏などが出土し、古墳時代後期～奈良時代にわたるものと推察された。

さらに、試掘調査に際して縄文土器の出土や土坑の確認があり該期の遺構の調査が必要とされた。今次調査でも周溝内・外で土坑が確認され、少量ながら土器片なども出土した。この為、各古墳の調査が終了後墳丘下の旧表土を除去してローム漸移層もしくはローム層上面において該期の遺構の調査を行った。その結果、数基の土坑と集石遺構、性格不明遺構を調査し、縄文時代前期～後期の土器や石器が少量出土した。

調査は平成25年9月10日より準備に入り、繁茂する雑草や伐採木を処理し、現況写真の撮影や現況測量を行った。9月27日より重機を使用し表土の掘削を行い、10月1日から人力による本格的調査に入った。3・4・5号墳と順次調査を進め、全体の周溝を掘り上げ、5号墳の石室を掘り終えた11月23日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。この間10月22日～11月8日にかけて地元上戸祭小学校の児童の見学、11月15日に市文化財調査員等の視察があった。空中写真の撮影を終えて、順次封土の除去、さらにはその下層の調査に移行していった。

また、3号墳の封土中の土器群を調査中の11月27日、前の県考古学会々長 塚静夫氏、文化財保護グループ 富川努係長の来跡、12月3日には市文化財審議委員の竹澤謙、橋本澄朗両氏の視察があり、3号墳封土中の土器群について埋設用の掘り込みの追求、6号墳の1号墓への名称変更等の指導があった。

石室内部の実測を終えた4号墳は天井石を撤去して解体作業に入る予定であったが旧表土層に掘り込まれた溝状の遺構の掘り下げ及び記録の終了まで延期した。これと並行して5号墳の石室の記録を行い、残土運搬の通路下にあった同墳周溝の東端部分の調査、3号墳墳丘下の縄文時代の調査を行った。

その後、1月11日に5号墳の石室を人力で解体に着手、4号墳は1月15日に重機による天井石の撤去を行い、石室の構築状態を調査した。さらに、5号墳は1月17日より、4号墳は同月20日より縄文時代の面の調査に取りかかる。5号墳ではほとんど遺構は認められなかったが、4号墳は土坑、不明遺構、集石遺構などを確認した。

1月9・17・23日市教委文化課による終了確認、翌24日には事業主のオフィス永源庵による立ち会いを受けた。今回は埋戻しを行わない為、1月25日に器材の撤収と近隣挨拶を行い全ての野外調査を終了した。遺物整理は、現地調査と一部並行して実施し、整理・報告書作成作業は平成26年7月31日まで行った。

## 4. 調査の方法と基本層序

### (1) 調査の方法

調査区内は、平成24年の試掘調査以前は広葉樹の大木が茂る雑木林で、調査着手時の平成25年には調査区内に伐採木が山積みされ、雑草が人の背丈程に繁茂していた。先ず雑草を人力で処理し、重機で伐採木を移動して現況写真の撮影及び現況測量(縮尺100分の1、25cmコンター)を行った。測量にあたっては公共座標(世界測地系)を使用した。調査区南西隅に原点をおき、X軸をローマ数字、Y軸をアルファベットで表し、原点の1Aの座標値はX=65,470m、Y=3,550mを示す。標高は海拔標高による。

その後、重機による表土除去作業に入るが、樹木の根はすべて残し、必要に応じて適宜人力で除去した。

また、表土等の置場については開発区域北寄りの谷部があてられ、調査区東端の古墳の調査に影響が出ない部分を重機の通路とした。さらに、前述の如く調査区は南と北で高低差が10m程もあり、人力で100m以上先の土置場へ運ぶのは効率的で無い為、この部分を人力掘削土の仮置場とし、適宜重機で移動した。

調査の進捗に伴い、墳丘の確認、周溝の埋積土を除去し、写真撮影と墳丘測量(縮尺100分の1、25cmコンター)を行った。周溝の土層の記録は適所で行い、周溝内埋葬と見られる土壌の部分では慎重に対応した。埋葬主体部の調査は、4号墳は石室が完存の為墓道より閉塞を確認し、調査を進めた。5号墳も天井部が遺存すると思われた為墓道側より調査を進めたが、その後石室上部に大規模な空掘坑を確認し、相方からの調査に切り替えた。石室内にはいずれも土砂が堆積していた為、有効と思われる土砂はフルイ掛けした後に水洗いを行い遺物の見出しにつとめたが、その結果は4号墳のガラス小玉5点に留まった。石室内の調査・記録の終了後、墳丘の封土を記録しながら除去して旧地表面の確認を行った。その結果、4号墳では細い溝状の掘り込みが多数認められ、これを調査・記録の後石室の解体・記録に入った。石室の解体にあたっては、4号墳の天井石は重機を使用した。他は、軟質の凝灰岩であったことから全て人力で行った。

いずれの古墳も旧表土層を除去して、ローム漸移層もしくはローム層上面まで掘り下げて縄文時代の遺構の調査を行った。

調査の記録は、石室、墳丘土層、周溝土層の他、土坑類、性格不明遺構なども縮尺20分の1で統一した。なお、3号墳封土中の土器群、4号墳墳丘上の土器、5号墳周溝内の土器群、1号墓の土坑内の炭化材、集石遺構などは縮尺10分の1で実測した。

写真記録は35mm版のモノクロ、カラーリバーサルフィルムを使用し、デジタルカメラで補足した。撮影にあたってはデータを記した黒板を写し込み、三脚及び大形脚立を使用した。遠景は対岸の丘陵より撮影し、ラジコンヘリによる空中写真も撮影した。

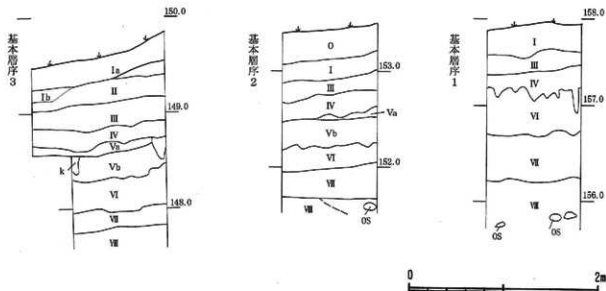
調査の公開については、駐車場の問題等から公式の現地説明会は実施し得なかったが、地元小学校の児童の見学、近隣住民の方々や古墳研究者への対応は適宜行った。

工事の関係上、埋戻し作業は行わず、野外作業を終了した。

整理・報告書作成作業及び、遺物整理は野外調査と一部並行して実施し、その後継続して作業を行い平成26年7月末日まで行った。

## (2) 基本層序

今次調査区は丘陵斜面に立地することから部分的に堆積の相違が見られた。第4図に斜面上方、同中位、同下方の3か所の柱状図を示した。自然流出か古墳築造に伴う土木工事によるものか判然としませんが、第II層が失われた所や、自然の作用と見られるIP・SPの純層が認められない部分があった。平面的な調査においても、IP・SPの堆積は3・4号墳の西寄りと5号墳の南東部に限定して見られた。



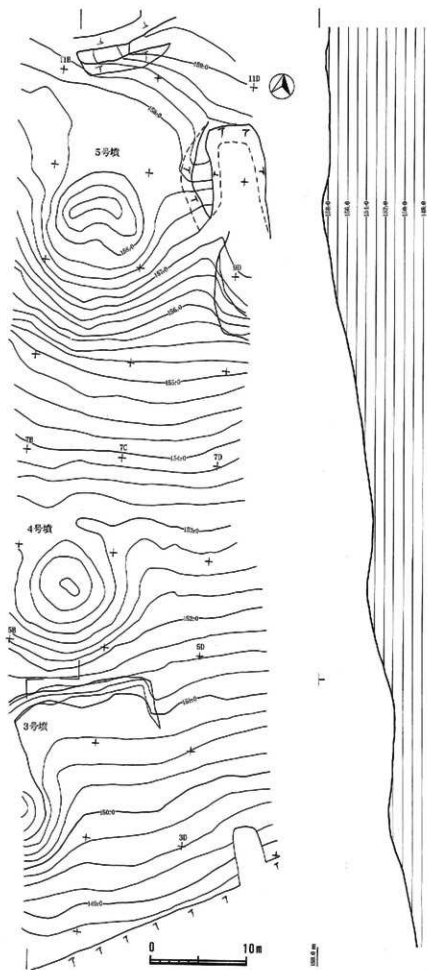
第4図 基本層序

### 基本層序

- 0. 現代整地層
- I. 表土層 黒褐色土(10YR3/1), 暗褐色土(10YR3/3)20%含む, 植物の根多く締り弱い。
- II. 暗褐色土(10YR3/3), にぶい黄褐色土(10YR5/4), SPB小, IPを少量含む, 締りあり。
- III. 黒褐色土(10YR3/2), LR・IPを少量, SP微量含む, 締り強い。
- IV. 暗褐色土(10YR3/3), LRを少量, IP・SPを微量含む, V層とは不整合に堆積。
- Va. 七本椏パミス(SP)純層。
- Vb. 今市パミス(IP)層純層。
- VI. 明黄褐色土(10YR6/6), IP・SPを少量, 青灰色R, 黒色岩片Rを微量含む, 締り強い。
- VII. 明黄褐色土(10YR6/6), 赤褐色Rを微量含む, 締り強い。
- VIII. 明黄褐色土(10YR6/6), 夾雑物をほとんど含まず締りやや弱い, 部分的にOSB中が認められる, KP層と不整合に堆積。

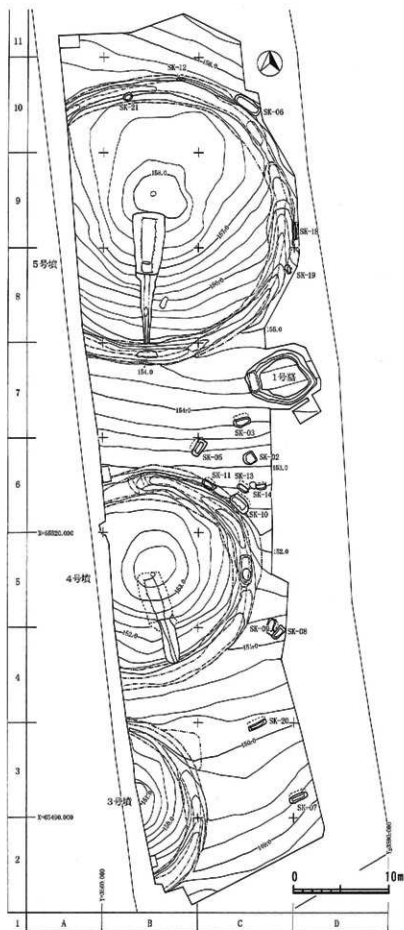
### ○土層注記の略号

- ローム粒=L.R(1~10mm)
- ローム塊=L.B(10mm以上)
- R(1~10mm), B小(11~30mm), B中(31~60mm), B大(60mm以上)
- 今市パミス=IP
- 七本椏パミス=SP
- 鹿沼パミス=KP
- 小川スリア=OS
- 含む量=微量(2%以下), 少量(3~10%), 中量(11~30%), 多量(31%以上), 主体(50%以上)



第5図 調査区現況図





第6図 遺構配置図(1)古墳時代以降

## II 遺構と遺物

今次調査では3～5号墳の円墳3基、奈良時代の墓所と推察される1号墓、古墳時代後期～奈良時代と推定される墳穴16基の他、その他の遺構として縄文時代の土坑7基、集石遺構1基、性格不明遺構2基などを調査した。

出土遺物は、古墳時代の土師器が大部分を占めるが、須恵器、耳環、刀子、ガラス小玉の他、奈良時代の須恵器、土師器、古瓦、縄文時代前期～後期の土器、石器などが出土した。

### 1. 3号墳

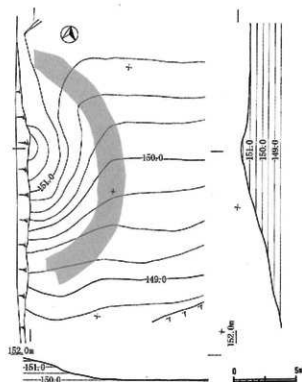
位置・外部施設（第7～10図、図版4～5）

調査区の南西端、2B・3BGrに所在する。北約3mに4号墳が隣接し、南は市道に切られ、東側に古墳は認められなかった。さらに、西側は既に宅地化され、墳丘の中央～西寄りが削平されており、東側の3分の1程が遺存したに過ぎない。したがって埋葬主体部は遺存しなかった。

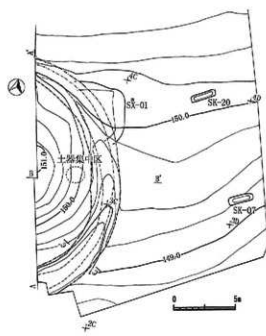
調査前は径13m程の地ぶくれが見られ、現存の墳頂部との比高は南が約2m、北が0.6mと山寄式の形態をとる。現存南北長は周溝内側の立ち上がり部分で約16m、周溝を含めた同長が約18m、本来は径18m程の円墳と推定される。現墳頂と周溝底面との比高は南が約2m、北が約0.9m。周溝は幅2～2.4m、深さ0.5～0.6mで、埋積土は2～4層に分類される。

墳丘の封土は最も遺存状態の良い部分で厚さ0.75m、最下層はローム土主体の層でその上に暗褐色土、黒褐色土等を盛り上げているが樹木の根の影響と、裾部にも近い為かあまり明瞭でなかった。

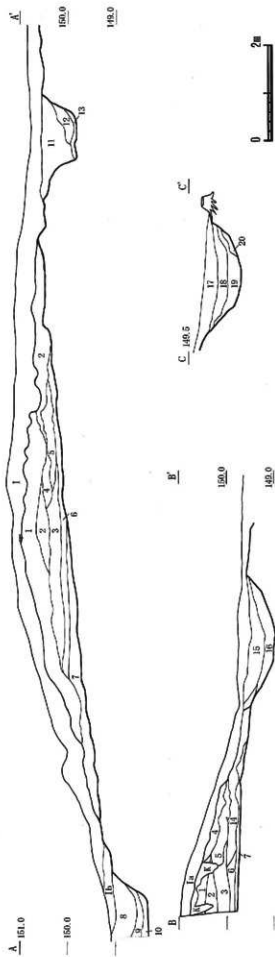
また、本墳は墓石や埴輪の樹立は無かったと判断される。



第7図 3号墳現況図



第8図 3号墳墳丘図



- A-A', B-B', C-C'**
- 1a. 表土 褐色土(0078/1)  
 1b. 表土 褐色土(0078/2)  
 1c. 表土 褐色土(0078/3)
1. 河原色土(0076/3), 1.5%含有  
 2. 河原色土(0076/2), 1.5%含有  
 3. 河原色土(0076/1), 1.5%含有  
 4. 河原色土(0076/4), 1.5%含有  
 5. 河原色土(0076/5), 1.5%含有  
 6. 河原色土(0076/6), 1.5%含有  
 7. 河原色土(0076/7), 1.5%含有  
 8. 河原色土(0076/8), 1.5%含有  
 9. 河原色土(0076/9), 1.5%含有  
 10. 河原色土(0076/10), 1.5%含有
11. 河原色土(0076/11), 1.5%含有  
 12. 河原色土(0076/12), 1.5%含有  
 13. 河原色土(0076/13), 1.5%含有  
 14. 河原色土(0076/14), 1.5%含有  
 15. 河原色土(0076/15), 1.5%含有  
 16. 河原色土(0076/16), 1.5%含有  
 17. 河原色土(0076/17), 1.5%含有  
 18. 河原色土(0076/18), 1.5%含有  
 19. 河原色土(0076/19), 1.5%含有  
 20. 河原色土(0076/20), 1.5%含有
10. 河原色土(0076/1), 1.5%含有  
 11. 河原色土(0076/2), 1.5%含有  
 12. 河原色土(0076/3), 1.5%含有  
 13. 河原色土(0076/4), 1.5%含有  
 14. 河原色土(0076/5), 1.5%含有  
 15. 河原色土(0076/6), 1.5%含有  
 16. 河原色土(0076/7), 1.5%含有  
 17. 河原色土(0076/8), 1.5%含有  
 18. 河原色土(0076/9), 1.5%含有  
 19. 河原色土(0076/10), 1.5%含有  
 20. 河原色土(0076/11), 1.5%含有

第9図 3号墳墳丘・周溝土層阿

## 土器集中区（第10図、図版5）

なお、調査の進捗に伴い封土を除去したところ、墳丘東端部の封土最下層付近で、多量の土師器が集中する箇所を確認した。これらは一部の例外もあるが径約1.5mの範囲にまとまって出土しており、完形に近い個体が多いことから一括廃棄ではなく、一括して埋納されたと推察される。そこで、これらの土器群を取り上げた後、掘り込み等の施設の有無について精査したが、その存在は明確にし得なかった。封土の観察から、南に向かって緩やかに下降する旧地表面を平坦に整地した後の行為と推察され、石室（推定）などの完成に近い段階に行われた何らかの儀礼に使用された土器群が一括埋納されたと考えられる。一部に2～3個体が入子状に重なったものも見られたが、全体としては大まかに平らに並べられた上に封土が盛られたと考えられる。

### 埋葬主体部

前述の如く既に削平されていて、痕跡すら確認できなかった。調査中に現場を訪れた、生家が直ぐ近くという40代の女性は「自分が小学校高学年のころにこの古墳が削られたが、大谷石のような石が転がっていて、人骨のようなものもあった」との談であった。したがって、埋葬主体部は4・5号墳と同様に凝灰岩積み横穴式石室であったと推定される。

### 出土遺物（第11～13図、図版21～23、第2・3表）

墳丘上及び周溝内より土師器、須恵器、壺、甕などが出土した。須恵器は墳丘上や周溝内の埋積土上より出土し、いずれも同一個体と見られることから墳頂部に置かれたものが飛び散ったものと考えられる。

墳丘東端の封土の下位（土器集中区）より一括出土した土師器は、図示したものは59点であるが破片類を含めると計80個体程と推察される。口径10.6～13.6cm、器高4.4～6.7cmで、口辺が広がるもの、直立するもの、内湾するもの、底部が丸底風のもの、平底のものなど細部ではバリエーションが見られるものの、概して壺形で、須恵器模倣は含まれない。

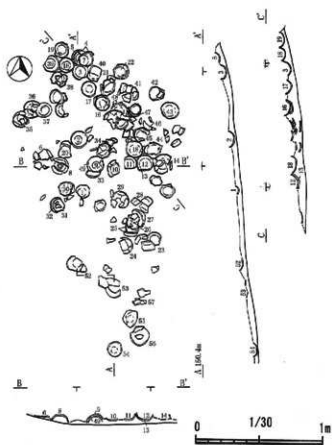
また、一部にミガキを施したものも認められるが一般集落跡から出土のものに比べてやや粗製に見え、外面に粘土紐の痕跡が目立つものが多い。単に焼成時の特徴によるものか判断し難いが色調が褐色のものが多く中に約20%程黒色のものが含まれる。これらは内面にミガキを施すものが多く、用途の違いを意図した可能性も否めない。

## 2. 4号墳

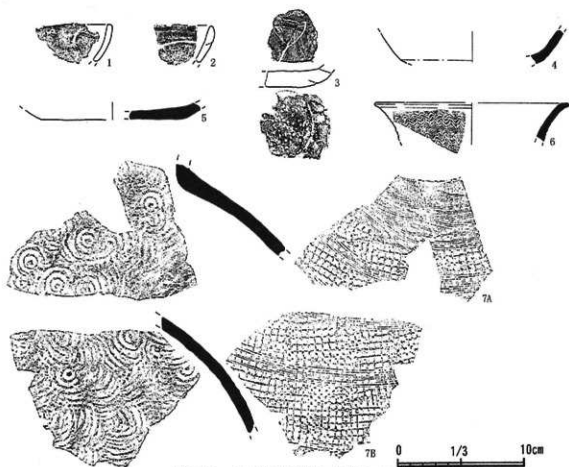
### 位置・外部施設（第14～17図、図版6・7）

調査区の中央やや西寄り、4～6B、4～6Cgに所在する。南約3mに3号墳、北約10.5mに5号墳が隣接し、東側に古墳は認められなかった。西側は既に宅地化され、墳丘の西寄り3分の1程は削平されていた。調査前は径16m程の地ぶくれが認められ、現存墳頂部との比高は南が2m、北が0.75mと山寄りの形態を取る。周溝内側の立ち上がり部分での径は約19m、周溝を含めた径は約23mであった。現存墳頂部と周溝底面の比高は南が2.5m、北は1.25mであった。周溝は幅2.5～3m、深さは0.5～1.2mと所により差が大きい。北東部が比較的しっかりしており、大塚古墳との関係を意識したものか、単に地形を意識したものかは判然としない。埋積土は3～4層に分類されるが、埋没途中に抉り込みの横穴が設けられた北東部は中程にローム土主体の層があり、複雑な堆積を示す。南西の墳丘上で、土師器高坏4点、坏3点がまとまって出土している。

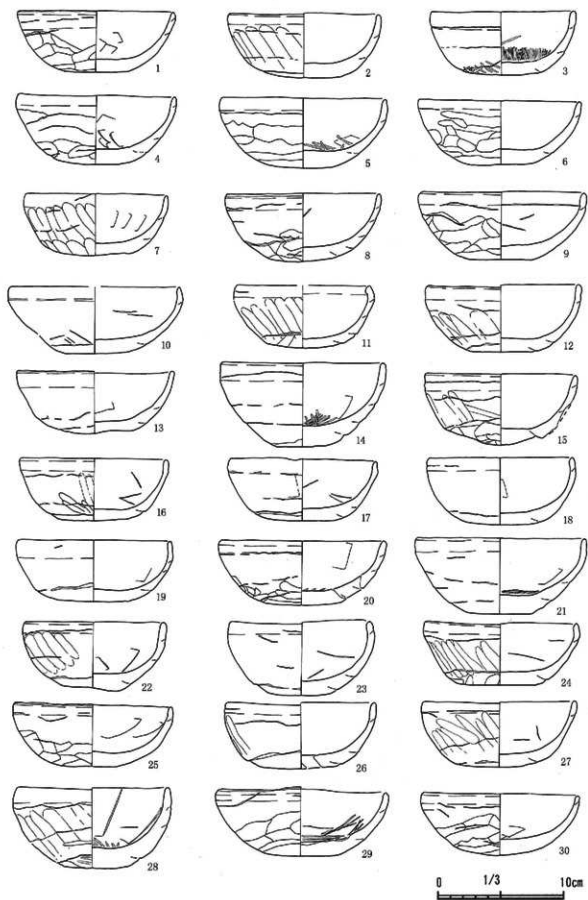
墳丘の封土は中央で厚さ約1m、ローム土を多く含む土と暗褐色土・黒褐色土が細かく盛り上げられている。本墳は墓石や埴輪の樹立は無かったと判断される。



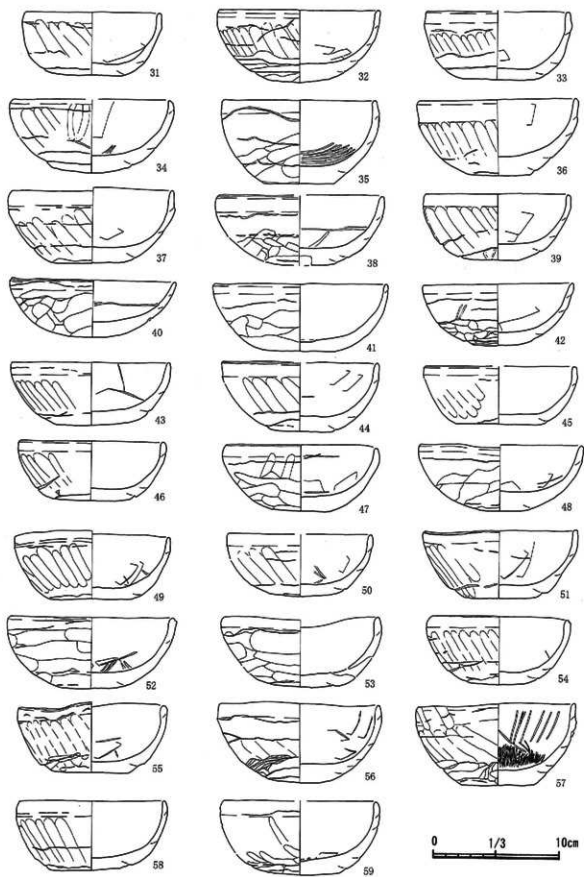
第10图 3号墳土器集中区土器出土状態



第11图 3号墳出土遺物(1) 墳丘・周溝



第12图 3号墳出土遺物(2)土器集中区-1



第13图 3号出土文物(3) 土器集中区-2

第2表 3号墳出土遺物観察表

( ) 推定値 [ ] 現存数

No.	瓶型		遺存状況	形状・手段等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
	口徑・高さ・底徑	大きさ (cm)				
1	土師器	口徑 —	断片	紐づくり、内外面ナデ	胎土 砂状胎 焼成 良 色調 内 黒色、外 浅黄褐色	墳丘灰土
	器高 —					
	底徑 —					
2	土師器	口徑 —	断片	紐づくり、内外面ナデ	胎土 砂状胎 焼成 良 色調 内 灰白色	墳丘灰土
	器高 —					
	底徑 —					
3	土師器	口徑 —	断片	紐づくり、底部外面削り、内面ナデ後ミガキ、内面黒色地塗	胎土 白色胎 焼成 良 色調 内 黒色、外 にぶい黄褐色・黒褐色	高瀬灰土 外面黄褐色
	器高 —					
	底徑 —					
4	瓶蓋器	口徑 —	断片	コテコ態形	胎土 熟砂状胎 焼成 良 色調 内外 灰白色	南東灰土
	器高 —					
	底徑 —					
5	瓶蓋器	口徑 —	断片	コテコ態形、外外面削り	胎土 熟砂胎 焼成 良 色調 内外 灰白色	南東灰土
	器高 —					
	底徑 (11.4)					
6	瓶蓋器	口徑 (13.8)	断片	コテコ態形、外部に1厚板5条のクシによる放射状2段、内面黄褐色	胎土 粗砂状胎 焼成 良 色調 内外 灰褐色	高瀬北東灰土
	器高 —					
	底徑 —					
7A-B	瓶蓋器	口徑 —	大型断片	外面磨子目肌を施すキヨ、内面同心円文の当具肌	胎土 熟砂胎 焼成 良 色調 内 黄褐色、外 灰青色	高瀬北東灰土
	器高 —					
	底徑 —					

第3表 3号墳土器集中区出土遺物観察表

( ) 推定値 [ ] 現存数

No.	瓶型		遺存状況	形状・手段等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
	口徑・高さ・底徑	大きさ (cm)				
1	土師器	口徑 12.4	80%	紐づくり、口辺部内外面削ナデ、体落外面削り、内面ナデ、底部外面削り	胎土 砂状胎 焼成 良 色調 内外 灰白色	封土中
	器高 4.8					
	底徑 5.0					
2	土師器	口徑 12.0	完好	紐づくり、口辺部内外面削ナデ、体落内外面ナデ、底部外面削り	胎土 砂状胎 焼成 良 色調 内外 明黄褐色・浅黄褐色	封土中
	器高 5.0					
	底徑 5.0					
3	土師器	口徑 11.5	80%	紐づくり、口辺部内外面削ナデ、体落外面ナデ、内面ナデ後ミガキ、底部外面削り後ミガキ	胎土 砂状胎 焼成 良 色調 内外 灰白色・浅黄褐色	封土中
	器高 5.0					
	底徑 5.8					
4	土師器	口徑 12.6	80%	紐づくり、口辺部内外面削ナデ、体落内外面ナデ、底部外面削り	胎土 砂状胎 焼成 良 色調 内外 黒褐色・黄褐色	封土中
	器高 5.5					
	底徑 5.8					
5	土師器	口徑 13.1	70%	紐づくり、口辺部内外面削ナデ、体落外面削り、内面ナデ後ミガキ、底部外面削り	胎土 粗砂状胎 焼成 良 色調 内 黒褐色、外 灰白色・黒褐色	封土中
	器高 5.5					
	底徑 6.1					
6	土師器	口徑 12.8	60%	紐づくり、口辺部内外面削ナデ、体落外面削り、内面ナデ、底部外面削り	胎土 砂状胎 焼成 良 色調 内 黄褐色、外 灰白色	封土中
	器高 5.0					
	底徑 3.9					
7	土師器	口徑 11.2	80%	紐づくり、口辺部内外面削ナデ、体落内外面ナデ	胎土 砂状胎 焼成 良 色調 内 灰白色、外 灰白色・褐色	封土中
	器高 4.9					
	底徑 6.1					
8	土師器	口徑 12.3	90%	紐づくり、口辺部内外面削ナデ、体落外面削り、内面ナデ、底部外面削り	胎土 砂状胎 焼成 良 色調 内外 灰白色	封土中
	器高 5.4					
	底徑 5.6					
9	土師器	口徑 13.2	100%	紐づくり、口辺部内外面削ナデ、体落外面削り、内面ナデ、底部外面削り	胎土 砂状胎 焼成 良 色調 内外 灰白色	封土中
	器高 5.4					
	底徑 5.3					
10	土師器	口徑 (13.4)	80%	紐づくり、口辺部内外面削ナデ、体落内外面ナデ	胎土 砂状胎 焼成 良 色調 内外 黒褐色・黄褐色	封土中
	器高 5.3					
	底徑 5.3					
11	土師器	口徑 (16.0)	80%	紐づくり、口辺部内外面削ナデ、体落内外面ナデ	胎土 砂状胎 焼成 良 色調 内 黒褐色、外 黄褐色	封土中
	器高 5.0					
	底徑 6.0					
12	土師器	口徑 12.2	70%	紐づくり、口辺部内外面削ナデ、体落内外面ナデ	胎土 砂状胎 焼成 良 色調 内外 浅黄褐色	封土中
	器高 5.3					
	底徑 5.6					
13	土師器	口徑 12.5	80%	紐づくり、口辺部内外面削ナデ、体落内外面ナデ、底部外面削り	胎土 粗砂状胎 焼成 良 色調 内外 浅黄褐色	封土中
	器高 4.9					
	底徑 6.5					
14	土師器	口徑 12.9	70%	紐づくり、口辺部内外面削ナデ、体落外面ナデ、内面ナデ後一部ミガキ、底部外面削り	胎土 砂状胎 焼成 良 色調 内外 灰白色、外 黒褐色・灰白色	封土中
	器高 4.7					
	底徑 5.9					
15	土師器	口徑 12.1	90%	紐づくり、口辺部内外面削ナデ、体落内外面ナデ、底部外面削り	胎土 砂状胎 焼成 良 色調 内外 黄褐色、外 黄褐色・黄褐色	封土中
	器高 5.4					
	底徑 7.8					
16	土師器	口徑 11.4	100%	紐づくり、口辺部内外面削ナデ、体落内外面ナデ	胎土 砂状胎 焼成 良 色調 内外 黄褐色	封土中
	器高 4.9					
	底徑 5.8					
17	土師器	口徑 11.4	90%	紐づくり、口辺部内外面削ナデ、体落内外面ナデ、底部外面削り	胎土 砂状胎 焼成 良 色調 内外 灰白色	封土中
	器高 4.9					
	底徑 6.5					



第3表 3号墳土器集中区出土遺物観察表

( ) 推定値 [ ] 推定形

No.	輪郭 形種	大きさ (cm)		取付成	形状・季節帯	胎土・施色・色調		土位階・備考
		口徑	高さ・底径			胎土	施色	
18	土師器 杯	口徑 11.4 胎高 5.8 底径 6.2	90S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部から底面内外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 黄褐色・灰白色		封土中	
19	土師器 杯	口徑 12.1 胎高 4.9 底径 5.2	70S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部から底面内外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 黄褐色・灰白色		封土中	
20	土師器 杯	口徑 13.1 胎高 5.1 底径 6.2	60S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部内外面ナデ後一部ミガキ、底部外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 灰白色・黒褐色		封土中	
21	土師器 杯	口徑 13.6 胎高 6.0 底径 5.4	80S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部内外面ナデ後一部ミガキ、底部外面ナデ後一部ミガキ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 灰白色		封土中	
22	土師器 杯	口徑 11.1 胎高 3.2 底径 4.4	80S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部から底面内外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 灰白色		封土中	
23	土師器 杯	口徑 11.2 胎高 3.8 底径 3.4	100S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部から底面内外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 灰白色		封土中	
24	土師器 杯	口徑 12.1 胎高 5.0 底径 6.5	80S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部内外面ナデ、底部外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 黄褐色・灰白色		封土中	
25	土師器 杯	口徑 12.5 胎高 4.9 底径 4.3	80S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部外面ナデ、内面ナデ、底部外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 黄褐色		封土中	
26	土師器 杯	口徑 11.7 胎高 5.2 底径 6.3	70S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部内外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 灰色		封土中	
27	土師器 杯	口徑 12.1 胎高 6.1 底径 8.1	100S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部内外面ナデ、底部外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 黄褐色		封土中	
28	土師器 杯	口徑 12.1 胎高 6.3 底径 5.0	90S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部内外面ナデ、下半部ミガキ、内面ナデ後一部ミガキ、底部外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 灰色・灰白色、外 灰褐色		封土中	
29	土師器 杯	口徑 13.4 胎高 8.1 底径 8.6	80S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部外面ナデ、内面ナデ後一部ミガキ、底部外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 黄褐色・灰白色、黒褐色		封土中	
30	土師器 杯	口徑 12.2 胎高 4.9 底径 —	90S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部外面ナデ、内面ナデ、底部外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 黄褐色		封土中	
31	土師器 杯	口徑 10.7 胎高 5.0 底径 6.7	80S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部内外面ナデ、底部外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 灰白色・黒褐色		封土中	
32	土師器 杯	口徑 12.6 胎高 5.7 底径 4.7	90S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部外面ナデ、内面ナデ、底部外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 灰白色		封土中	
33	土師器 杯	口徑 (11.4) 胎高 5.3 底径 5.7	60S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部内外面ナデ、底部外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 灰白色・外 黄褐色・黒褐色		封土中	
34	土師器 杯	口徑 (12.4) 胎高 5.8 底径 6.1	60S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部内外面ナデ、内面ナデ後一部ミガキ、底部外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 灰色・灰白色		封土中	
35	土師器 杯	口徑 12.0 胎高 6.7 底径 5.5	80S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部外面ナデ、内面ナデ後一部ミガキ、底部外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 灰白色・黒褐色		封土中	
36	土師器 杯	口徑 12.6 胎高 5.9 底径 4.9	80S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部内外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 灰白色		封土中	
37	土師器 杯	口徑 12.8 胎高 5.8 底径 5.8	90S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部内外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 黄褐色		封土中	
38	土師器 杯	口徑 (13.0) 胎高 5.5 底径 (5.7)	60S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部外面ナデ、内面ナデ後一部ミガキ、底部外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 灰白色		封土中	
39	土師器 杯	口徑 11.6 胎高 5.2 底径 4.5	80S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部内外面ナデ、底部外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 黄褐色		封土中	
40	土師器 杯	口徑 13.0 胎高 4.5 底径 —	60S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部外面ナデ、内面ナデ後一部ミガキ、底部外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 灰白色		封土中	
41	土師器 杯	口徑 13.6 胎高 5.3 底径 5.6	70S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部外面ナデ、内面ナデ、底部外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 黄褐色		封土中	
42	土師器 杯	口徑 12.0 胎高 4.9 底径 4.8	70S	縁づくり。口辺部内外面横ナデ、底部外面ナデ、内面ナデ、底部外面ナデ	胎土 砂粒質 良 色調 内外 灰白色・黒褐色		封土中	

第3表 3号墳土器集中区出土土物観察表

( ) 検定記 ( ) 保存記

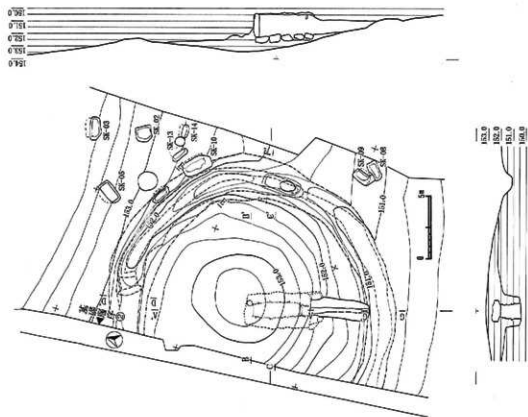
No.	種類 器種	大きさ (cm)		遺存度	製作・手跡等	胎土・施成・色調		出土位置・備考
		口徑・高さ	底徑			胎土	色調	
43	土埴器 杯	口徑 12.5 器高 5.9 底徑 5.7		80%	紐づくり、口辺部内外面嵌ナゲ、体部から底部内外面ナゲ	胎土 粗砂較硬 施成 良 色調 内外 浅黄褐色		封土中
44	土埴器 杯	口徑 12.2 器高 5.4 底徑 5.9		80%	紐づくり、口辺部内外面嵌ナゲ、体部から底部内外面ナゲ	胎土 粗砂較硬 施成 良 色調 内外 黄褐色		封土中
45	土埴器 杯	口徑 (12.0) 器高 (4.5) 底徑 8.8		60%	紐づくり、口辺部内外面嵌ナゲ、体部から底部内外面ナゲ	胎土 粗砂較硬 施成 良 色調 内外 黄褐色・浅黄褐色		封土中
46	土埴器 杯	口徑 11.4 器高 4.7 底徑 5.7		60%	紐づくり、口辺部内外面嵌ナゲ、体部から底部内外面ナゲ	胎土 粗砂較硬 施成 良 色調 内外 黄褐色・浅黄褐色		封土中
47	土埴器 杯	口徑 12.1 器高 5.2 底徑 4.6		80%	紐づくり、口辺部内外面嵌ナゲ、体部外面磨り、内面ナゲ、底部外面ナゲ	胎土 粗砂較硬 施成 良 色調 内外 浅黄褐色		封土中
48	土埴器 杯	口徑 13.9 器高 5.2 底徑 3.4		80%	紐づくり、口辺部内外面嵌ナゲ、体部外面磨り、内面ナゲ、底部外面ナゲ	胎土 粗砂較硬 施成 良 色調 内外 黄褐色・浅黄褐色		封土中
49	土埴器 杯	口徑 12.1 器高 4.9 底徑 6.3		90%	紐づくり、口辺部内外面嵌ナゲ、体部から底部内外面ナゲ	胎土 粗砂較硬 施成 良 色調 内外 浅黄褐色		封土中
50	土埴器 杯	口徑 (11.3) 器高 (4.9) 底徑 5.2		60%	紐づくり、口辺部内外面嵌ナゲ、体部内外面ナゲ、底部外面磨り	胎土 粗砂較硬 施成 良 色調 内外 黄褐色		封土中
51	土埴器 杯	口徑 12.1 器高 5.3 底徑 5.5		70%	紐づくり、口辺部内外面嵌ナゲ、体部から底部内外面ナゲ	胎土 粗砂較硬 施成 良 色調 内外 浅黄褐色		封土中
52	土埴器 杯	口徑 13.9 器高 5.4 底徑 3.6		70%	紐づくり、口辺部内外面嵌ナゲ、体部外面磨り、内面ナゲ後一割ミガキ、底部外面磨り	胎土 粗砂較硬 施成 良 色調 内外 浅黄褐色		封土中
53	土埴器 杯	口徑 12.3 器高 5.5 底徑 5.5		90%	紐づくり、口辺部内外面嵌ナゲ、体部外面磨り、内面ナゲ、底部外面ナゲ	胎土 粗砂較硬 施成 良 色調 内外 黄褐色・浅黄褐色		封土中
54	土埴器 杯	口徑 10.8 器高 5.4 底徑 4.6		90%	紐づくり、口辺部内外面嵌ナゲ、体部から底部内外面ナゲ	胎土 粗砂・粗砂較硬 施成 やや良 色調 内外 濃い黄褐色		封土中
55	土埴器 杯	口徑 11.5 器高 5.2 底徑 6.0		90%	紐づくり、口辺部内外面嵌ナゲ、体部から底部内外面ナゲ	胎土 粗砂較硬 施成 良 色調 内外 黄褐色・浅黄褐色		封土中
56	土埴器 杯	口徑 12.6 器高 6.3 底徑 4.9		100%	紐づくり、口辺部内外面嵌ナゲ、体部外面ナゲ後半一割ミガキ、内面ナゲ、底部外面磨り	胎土 粗砂較硬 施成 良 色調 内外 灰白色		封土中
57	土埴器 杯	口徑 12.5 器高 6.4 底徑 5.3		70%	紐づくり、口辺部内外面嵌ナゲ、体部外面磨り、内面ナゲ後一割ミガキ、底部外面磨り	胎土 粗砂較硬 施成 良 色調 内外 黄褐色・灰白色		封土中
58	土埴器 杯	口徑 11.5 器高 5.4 底徑 5.8		70%	紐づくり、口辺部内外面嵌ナゲ、体部から底部内外面ナゲ	胎土 粗砂較硬 施成 良 色調 内外 浅黄褐色		封土中一添
59	土埴器 杯	口徑 (12.2) 器高 5.9 底徑 5.1		80%	紐づくり、口辺部内外面嵌ナゲ、体部外面磨り、内面ナゲ後一割ミガキ、底部外面磨り	胎土 粗砂較硬 施成 良 色調 内外 黄褐色・浅黄褐色		封土中一添

また、石室の上部では純層に近いローム土が天井石を覆うように 10 cm 以下の厚さで数次にわたって盛られていた。石室の水漏れを防ぐ為か丁寧な作業を行っており、各層の間には水分によるものか薄い赤化した層が認められたことから水を用いて貼り付けて叩き締めた可能性が高い。

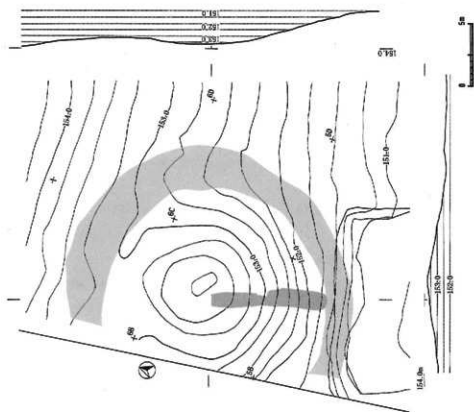
なお、本墳では封土を除去した結果旧地表面に掘り込まれた幅 30 ~ 50 cm、深さ 10 ~ 30 cm 程の溝状の遺構を確認した。一見不規則な配置に見えるが、石室を囲むように認められた。また、封土の土層観察によれば、これらの一部は旧地表面に近い最下層の封土を切り込んで設けられているものもあることから、墳丘構築・封土盛り上げに関わる何らかの行為による所産と考えられる。

#### 埋葬主体部 (第 18 ~ 20 図、図版 7 ~ 12)

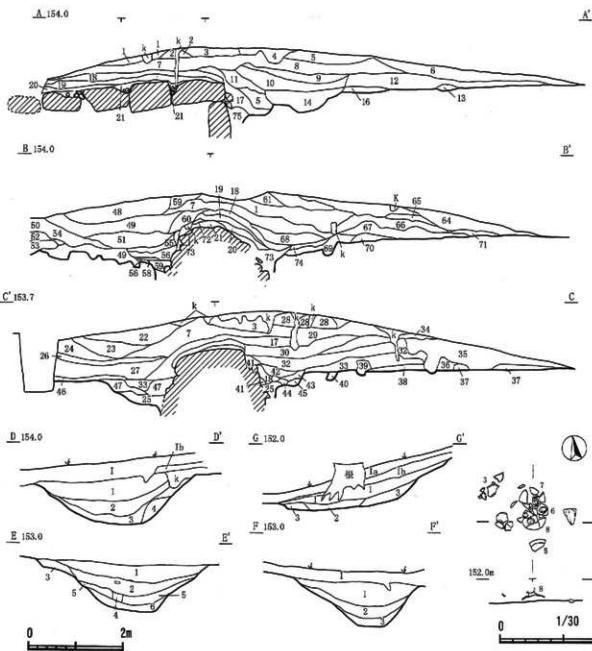
埋葬主体部は墳丘のほぼ中央から南に向けて開口する横穴式石室で主軸方位は N-18°-W を示す。石室は旧地表面より掘り込まれた掘方内に築かれた半地下式である。



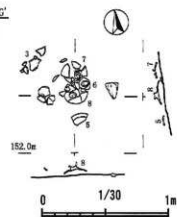
第 15 图 4 号墳横切図



第 14 图 4 号墳现状図



第16図 4号墳丘・周溝土層図



第17図 4号墳丘土器出土状態

A-A', B-B', C-C'

1. 暗褐色土(10YR3/4), LR-LB(1~50mm)20%, 灰~黄褐色土(10YR6/3)15%, IP-SP(1~10mm)数量含む
2. 暗褐色土(10YR3/4), LR-LB(1~30mm)25%, 褐色土(10YR4/4)R-LB(1~20mm)10%, IP-SP(1~5mm)数量含む
3. 褐色土(10YR4/3), LR-LB(1~50mm)30%, IP-SP(1~10mm)少量含む
4. 褐色土(10YR3/1), L25%, IP-SP(1~5mm)数量含む
5. 褐色土(10YR3/2), LR-LB(1~100mm)10%, IP-SP(1~10mm)少量含む
6. 褐色土(10YR3/2), LR-LB(1~30mm)5%, IP-SP(1~3mm)数量含む
7. 褐色土(10YR3/1), LR-LB(1~40mm)15%, IP(1~10mm)少量含む
8. 暗褐色土(10YR2/3), LR-LB(1~150mm)35%, IP-SP(1~20mm)少量含む
9. 暗褐色土(10YR2/3), LR-LB(1~250mm)20%, IP-SP(1~15mm)数量含む
10. 暗褐色土(10YR2/3), LR-LB(1~150mm)40%, IP-SP少量含む
11. 灰褐色土(10YR4/2), LR-LB(1~100mm)主体, 暗褐色土(10YR2/2)30%含む
12. 暗褐色土(10YR2/1), LR(1~5mm)3%, IP-SP(1~10mm)数量含む
13. 暗褐色土(10YR2/3), LR-LB(1~30mm)30%含む
14. 灰褐色土(10YR4/2), LR-LB(1~150mm)主体, 暗褐色土(10YR2/1)20%, IP-SP(1~5mm)数量含む
15. 暗褐色土(10YR2/4), LR-LB(1~40mm)25%, 黒色土(10YR2/1)15%含む
16. 明暗褐色土(10YR6/6), LR-LB(1~40mm)主体, 灰色土(10YR2/1)上:下1/2~3mmの層をなす
17. 灰褐色土(10YR5/2), LR-LB(3~20mm)主体, 暗褐色土(10YR2/2)20%含む
18. 明暗褐色土(10YR6/6), 灰~黄褐色土(10YR7/3)R-LB(1~30mm)10%, 暗褐色土(10YR5/1)R-LB(1~30mm)10%含む

19. 灰~黄褐色土(10YR5/3), 明暗褐色土(10YR6/6)R-LB(1~30mm)15%含む
20. 明暗褐色土(10YR6/6), 灰~黄褐色土(10YR7/3)R-LB(1~30mm)20%含む
21. 灰~黄褐色土(10YR5/3), 灰~黄褐色土(10YR7/3)R-LB(1~40mm)20%含む
22. 灰~黄褐色土(10YR4/3), LR-LB(1~150mm)30%, IP-SP(1~15mm)少量含む
23. 灰~黄褐色土(10YR4/3), LR-LB(1~200mm)15%, IP-SP(1~10mm)少量含む
24. 灰~黄褐色土(10YR4/3), LR-LB(1~150mm)20%, IP-SP(1~15mm)少量含む
25. 暗褐色土(10YR3/3), LR-LB(1~30mm)20%, 暗褐色土(1~5mm)少量含む
26. 暗褐色土(10YR3/3), LR(1~5mm), IP(1~10mm), 暗褐色土(1~10mm)数量含む
27. 暗褐色土(10YR2/3), 暗褐色土(10YR3/1)少量, LR(1~5mm), IP(1~10mm), SP(2~3mm), 磁器
28. 褐色土(10YR4/4), LR-LB(1~50mm)35%, 暗褐色土(10YR2/1), IP-SP(1~10mm), 磁器片(1~5mm)少量含む
29. 暗褐色土(10YR3/3), LR-LB(1~30mm)少量, IP-SP(1~3mm), 磁器片(1~5mm)数量含む
30. 暗褐色土(10YR3/3), LR(1~3mm), IP(1~50mm), SP(2~10mm), 磁器片(3~10mm)少量含む
31. 黒褐色土(10YR2/3), LR-LB(1~30mm)少量, IP-SP(1~3mm), 磁器片(1~5mm)数量含む
32. 暗褐色土(10YR2/3), LR-LB(1~70mm)少量, IP-SP(1~5mm), 磁器片(1~10mm)数量含む
33. 赤黄褐色土(10YR6/8), ロームとIPの混合土(7:3), 磁器片(1~100mm)10%含む
34. 暗褐色土(10YR2/3), LR(1~3mm)少量含む

掘方は、長さ 5.1 m、幅 2.5 ～ 2.6 m の隅丸長方形で、深さ 1.5 m。底面は凝灰石層中にあり、壁はほぼ直立するが、上部はやや外反し、側壁部の壁面には壁材もしくは裏込めの石材を納める為の挟り込みが多数認められた。玄室、羨道とも一体の掘方内に築かれており、底面には根石を据えた痕跡が残る。

石室は全長 4.35 m、玄室は長さ 3.65 m、幅は奥が 0.95 m、中央で 1.25 m、玄門側が 1 m の僅かに膨張り形の両袖式であった。本墳の石室は試掘調査時の想定通り、閉塞部から天井石までほぼ完存するが、羨道西側壁の上部に盗掘坑が穿たれていた。奥壁は凝灰岩の 1 枚石で、長さ 1.82 m、幅 0.55 ～ 1 m、厚さ 30 ～ 45 cm で、内面は平らに加工されていた。側壁は加工度の高い軟質の凝灰岩の割石（削石）積みで、僅かに河原石の使用が見られる。上部は直方体の石材を小口積みするが、中・下位は横置きにしたものもあり西壁の腰部に用いられた大型の石材の場合は平面を内側に向けて据え、裏込め材で安定させていた。これら大型の石材は加工度が低い、他は石材の硬度の差によるものか、数種の加工痕跡が見られた。

#### A-A', B-B', C-C' 継ぎ

35. 暗褐色土 (09B3/2), LK, 凝灰岩 (1～5mm) 30%, IP (1～5mm) 散乱含む
36. 黒褐色土 (09B3/2), LK, 凝灰岩 (1～5mm) 20%, IP (1～5mm) 散乱含む
37. 黒褐色土 (09B2/2), LK (1～3mm) 少量含む
38. 黒褐色土 (09B2/2), LK (1～2mm) 散乱含む
39. 暗褐色土 (09B3/2), LK (1～5mm), 凝灰岩 (1～5mm) 少量含む
40. 黒褐色土 (09B2/2), LK-LB (1～40mm), 凝灰岩 (1～30mm) 少量混入
41. 暗褐色土 (09B3/2), LK-LB (1～50mm) 25%, IP-LB (1～15mm), SP (3～7mm) 少量含む
42. 暗褐色土 (09B3/2), 黒褐色土 (09B2/2), 凝灰岩 (1～10mm) 少量, IP-LB (1～40mm), SP (1～7mm) 散乱含む
43. 暗褐色土 (09B3/2), LK, 凝灰岩 (1～2mm) 少量含む
44. 暗褐色土 (09B2/2), LK-LB (1～30mm), 凝灰岩 (1～3mm) 少量含む
45. 黒褐色土 (09B2/2), LK-LB (1～30mm), IP, 凝灰岩 (1～3mm) 散乱含む
46. 黒褐色土 (09B2/2), LK-LB (1～30mm), IP, 凝灰岩 (1～10mm) 少量含む
47. 暗褐色土 (09B3/2), LK (1～5mm), 凝灰岩 (1～30mm) 少量含む
48. 黒褐色土 (09B2/2), LK-LB (1～150mm) 10%, IP-SP (1～10mm) 少量含む
49. 黒褐色土 (09B2/2), LK, IP-SP (1～10mm) 少量含む
50. 黒褐色土 (09B2/2), LK-LB (1～40mm) 少量, 凝灰岩 (1～10mm) 少量含む
51. 暗褐色土 (09B2/2), 灰褐色土 (10B4/1), 粗末, LK-LB (1～8mm), IP-SP, 凝灰岩 (1～10mm) 少量含む
52. 黒褐色土 (09B6/2), ローム主体, 赤褐色土 (09B3/2) 25% 含む
53. 黒褐色土 (09B3/2), IP-SP, 凝灰岩 (1～6mm) 少量含む
54. 暗褐色土 (09B3/2), LK-LB (1～60mm) 5%, 砂石 (3～150mm) 5%, IP-SP, 凝灰岩 (1～5mm) 散乱含む
55. 黒褐色土 (09B2/2), LK-LB (1～60mm) 8% 含む
56. 暗褐色土 (09B6/2), LK-LB (1～100mm) 主体, 凝灰岩 (5～60mm) 83%, 暗褐色土 (09B3/2) 10%, IP-SP (1～10mm) 散乱含む
57. 暗褐色土 (09B2/2), LK-LB (1～20mm) 10%, 凝灰岩 (1～20mm) 散乱含む
58. 暗褐色土 (09B3/2), LK, IP, 凝灰岩 (1～10mm) 15% 含む
59. 暗褐色土 (09B4/2), LK-LB (1～30mm) 20%, IP-SP (1～10mm) 少量含む
60. 暗褐色土 (09B3/2), 暗褐色土 (10B5/1) R-LB (1～40mm) 20%, LK, IP-SP (1～10mm) 少量含む
61. 暗褐色土 (09B2/2), LK, 暗褐色土 (09B3/2) R-LB (1～30mm) 10% 含む
62. 暗褐色土 (09B4/2), LK, IP-SP (1～10mm) 散乱含む
63. 暗褐色土 (09B2/2), LK, IP-SP (1～5mm) 散乱含む
64. 暗褐色土 (09B3/2), LK (1～6mm) 5%, 暗褐色土 (09B4/2) 10% 含む
65. 暗褐色土 (09B3/2), LK, 暗褐色土 (10B5/2) 20% 含む
66. 暗褐色土 (09B7/0), LK-LB (1～200mm) 主体, 暗褐色土 (10B3/3) 20%, 暗褐色土 (10B3/2) 10%, IP-SP (1～10mm) 少量, 凝灰岩 (1～10mm) 少量含む
67. 暗褐色土 (09B3/2), 暗褐色土 (10B5/2) R-LB (5～30mm) 20%, LK 少量, IP-SP 少量, 凝灰岩 (1～20mm) 散乱含む
68. 暗褐色土 (09B4/2), LK-LB (1～30mm) 10%, IP-SP (1～5mm) 少量含む
69. 暗褐色土 (09B2/2), LK-LB (1～20mm) 3%, IP-SP (1～5mm) 散乱含む
70. 暗褐色土 (09B2/2), 暗褐色土 (10B5/2) R-LB (1～40mm) 20% 含む
71. 暗褐色土 (09B2/2), 暗褐色土 (10B5/2) R-LB (1～40mm) 20% 含む
72. 暗褐色土 (09B6/0), 暗褐色土 (09B6/2) R-LB (5～20mm) 20% 含む
73. 暗褐色土 (09B6/2), LK-LB (1～40mm) 10%, 暗褐色土 (09B2/2) 10% 含む
74. 暗褐色土 (09B3/2), 上部に LK (3～4cm) の厚さで密に入る, 凝灰岩 (1～30mm) 少量含む, 28 の延長か?
75. 暗褐色土 (09B3/2), LK, IP, 凝灰岩 (1～30mm) 20% 含む (通込 46/6)

#### D-D'

##### 1. 黄土

##### 2b. 黄褐色土

1. 黒褐色土 (09B1/1), にぶい黄褐色土 (10B6/0) R-LB (10～50mm) 20%, 砂片 (3～8mm), IP-SP (1～5mm) 散乱含む
2. 暗褐色土 (09B1/2), にぶい黄褐色土 (10B6/0) R-LB (5～20mm) 10%, LK (1～5mm) 少量, 砂片 R, IP-SP (1～8mm) 散乱含む
3. 暗褐色土 (09B4/2), LK-LB (1～40mm) 25%, IP-SP (1～5mm) 散乱含む
4. 暗褐色土 (09B4/2), LK-LB (1～50mm) 35% 含む

#### E-E'

1. 黒褐色土 (09B1/1), にぶい黄褐色土 (10B6/0) R-LB (10～30mm) 10%, 砂片 (3～15mm) 散乱含む
2. 暗褐色土 (09B1/2), LK-LB (1～30mm) 20%, 暗褐色土 (10B5/2) 15%, IP-SP (3～5mm) 散乱含む
3. 暗褐色土 (09B1/2), LK-LB (1～30mm) 10%, 暗褐色土 (10B5/2) 10%, IP-SP (2～5mm) 散乱含む
4. 暗褐色土 (10B5/1), LK 20% 含む
5. 暗褐色土 (09B2/2), LK-LB (1～20mm) 5%, 砂片 (3～10mm), IP-SP (2～5mm) 散乱含む
6. 暗褐色土 (10B6/2), LK-LB (1～30mm) 30%, 暗褐色土 (10B7/1) 15%, IP 散乱含む

#### F-F'

##### 1. 暗褐色土 (09B4/2) 表土

1. 暗褐色土 (09B1/1), にぶい黄褐色土 (10B6/0) R-LB (1～110mm) 30%, 砂片 (3～15mm), IP-SP (2～8mm) 散乱含む
2. 暗褐色土 (09B2/2), にぶい黄褐色土 (10B6/0) R-LB (10～30mm) 8%, 砂片 (3～8mm), IP-SP (3～5mm) 散乱含む
3. 暗褐色土 (09B4/2), LK-LB (1～40mm) 35%, IP (3～10mm) 少量, SP (1～3mm) 散乱含む

#### G-G'

##### 1a. 黄褐色土

##### 1b. 暗褐色土

1. 暗褐色土 (09B2/1), 暗褐色土 (10B5/2) R-LB (5～20mm) 20%, IP-SP (1～3mm) 散乱含む
2. 暗褐色土 (10B2/2), 暗褐色土 (10B5/2) R-LB (5～40mm) 30%, IP (1～10mm), SP (1～3mm) 散乱含む
3. 暗褐色土 (10B2/2), 暗褐色土 (10B4/2) R-LB (10～50mm) 20%, IP-SP (1～10mm) 少量含む

側壁の石材の積み方は掘方の壁面と石材の間隔による制約で異なると考えられる。

また、内面のみならず、6面全てもしくは4～5面加工されていることから、加工した後に積み上げたことが判る。

玄門部は柱状の石材を使用するが、長さ0.8～1mと短く、上部までは至らない。両門柱石の間隔は65～75cmで、間には幅75cm、高さ35cm、厚さ10cmの長方形の間仕切石（闕石）を据えていた。この石は非常に加工度が高く切石状であった。玄門の上部に櫛石は設けられていなかった。

床面（埋葬面）は径4～15cmの礫が敷詰められており、凝灰岩片も一定程度混じる。残存した礫の総数は1、221個、うち凝灰岩は331個で、河原石は890個のうち790個が径10cm以下であった。調査着手時には盗掘坑より流入した土砂が0.7～0.9mの厚さで堆積し、流入土が人為的に移動された痕跡が見られたことから盗掘は数次にわたると推察された。

天井石は4石より成り、長さ1.5～1.7m、幅0.8～1.1m、厚さ40～60cmで、石材と石材の接点や外面上部には明確な加工痕を残す。外面上部の高さをそろえてローム土による水漏れ防止の作業を容易にたと考えられる。床面からの高さは1.6～1.75mであった。

羨道は長さ0.6m、幅1.07m、床面は墓道底面より約40cm低い。側壁は加工度の高い凝灰岩の割石（削石）積みで、河原石が僅かに混じる。玄室に比べやや小振りの石材を用いる。

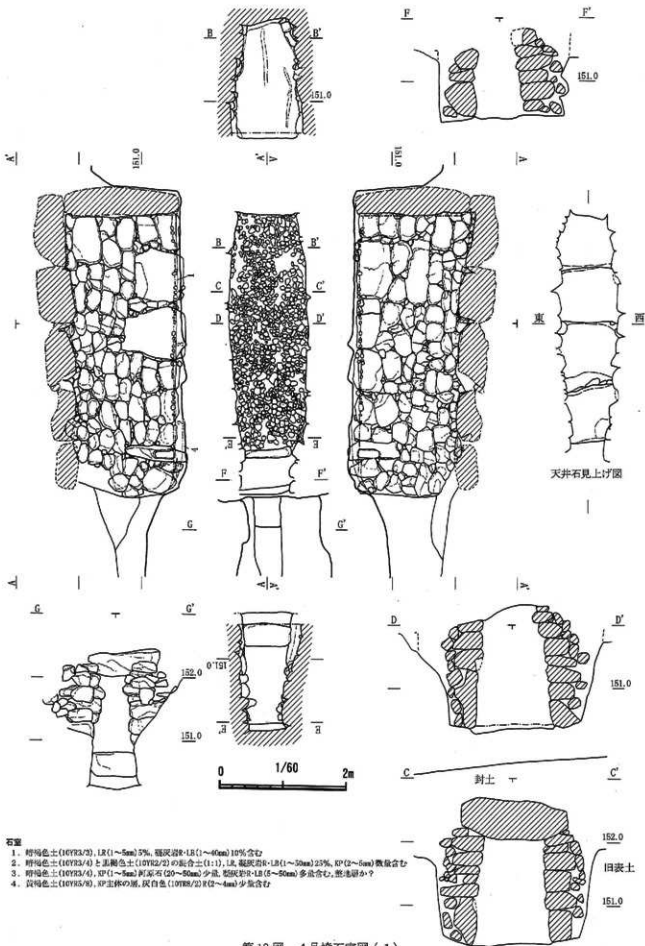
前述の如く西側壁は羨門寄りの上部が盗掘によって壊されていた。この為、天井石が1石遺存したものの、流入土と閉塞を除去した際に危険と判断された為除去した。石材は玄室と同様に板状では無く、長さ1.5m、幅0.6～0.75m、厚さ35cmと細長いものであった。天井の高さは1.5m程である。

閉塞は数次の追葬によるものか、内・外の二重になっていた。外側は羨門部外で1.10×0.55m、厚さ40cm程のやや丸みをもった凝灰岩を据えて、その周囲に人頭大の河原石を積み上げていた。内側の閉塞は羨道内で、河原石のみを積み上げていたが、上部は追葬時に除かれたものか2分の1程が失われていた。

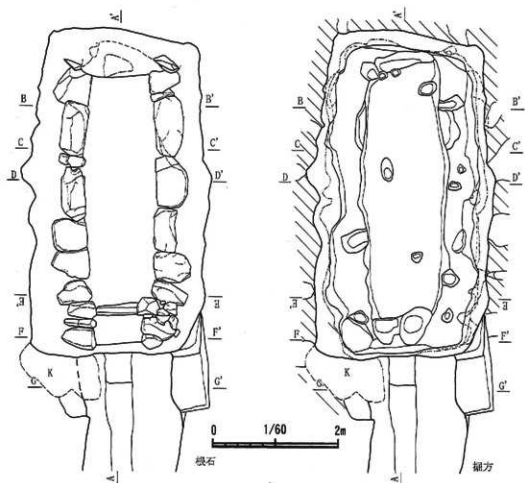
本墳の石室は深い掘方内に築かれているが、斜面地の為南側は浅くなっており、長さ4.8m、幅1.5～1.6mの墓道が周溝南側に向かって延びる。墓道の深さは北で1.4m、南は30cm程であった。なお、追葬との関係で考慮しなければならないが、石室内からの副葬品は攪乱土中の耳環1点とガラス小玉3点に留まる（他2点は盗掘坑）。この他には、墓道西脇の周溝内1、墓道内2、墓道西上部1の計4の耳環、墓道東上部より刀子1点が出土している。これらは盗掘というよりも追葬時に外に出されたものと考えたい。

#### 出土遺物（第21図、図版21、第4表）

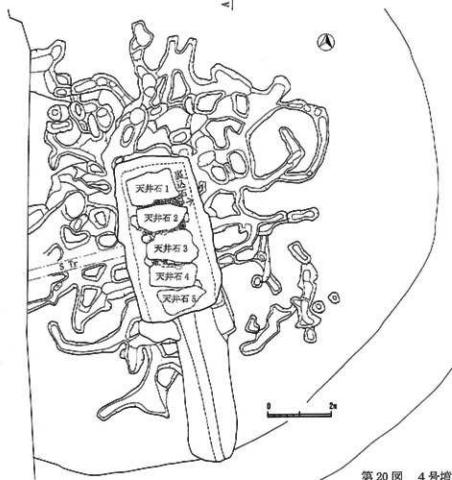
出土遺物は、土器類（土器器坏・高坏）、装身具（耳環、ガラス小玉）、什器（刀子）などがある。土器類（2～8）は墳丘南西よりまとまって出土、刀子（9）は墓道東上部、ガラス小玉は石室と盗掘坑の攪乱土、耳環は15が周溝、16・17が墓道、18は石室攪乱土、19は墓道西上部より出土した。刀子は両端を欠失し現存長20.7cm、刃闊で刃部長は17.8cm、幅は1.6～2.4cmで研ぎ減りが目立つ。棟は平棟平造りで厚さ0.5～0.7cm。柄は現存長3.1cm、上部は丸みをもって細くなり、幅2.1～1.2cm、厚さ2～4mmで刃部に近い断面形で、現存重量127g。耳環は遺存状態の差こそあれ、いずれも銅地銀貼で金鍍金を施す。外径は横が2.09～2.32cm、縦は1.20～1.30cm、断面は0.44～0.48×0.65～0.68cm、重量は19が6.8gと最も軽く、16が6.9g、18が7.6g、15が7.9gで17が9.5gと最も重い。ガラス小玉はいずれも紺色で径3.5～3.9mm、厚さ2～3mm、孔径が0.9～1.8mm、断面は扁平、丸みを帯びる。左右の厚みの異なるものなどまちまちである。



第18図 4号墳石室図(1)



第19図 4号墳石室圖(2)



第20図 4号墳石室天井石と旧地面の掘り込み



### 3. 5号墳

#### 位置・外部施設（第22～26図、図版13）

調査区の北西部、A8～10、B7～10、C8～10Grに所在する。南方約10.5mに4号墳、東方約3mに大塚古墳（1号墳）が隣接し、北方には古墳は認められなかった。西側は既に宅地化されていて、墳丘の西裾4分の1程は削平されていた。

現況では径20m程の地ぶくれが見られ、現墳頂部との比高は北が0.7m、南は3.5mと山脊式の形態を取る。周溝内側の立ち上がりでの径は約27.5m、周溝を含めると約30.3mである。現存の墳頂部と周溝底面の比高は北が1.5m、南が4.25mであった。周溝は幅2.5～3m、深さ45～55cm、埋積土は3層に分けられる。なお、SK-06が所在した周溝北東部やSK-18が所在する周溝東部は、他の部分とは幾分異なる堆積状況を示していた。

また、周溝南東部では底面直上より一括廃棄されたとと思われる土師器塚が30個体程まとまって出土した。周溝の底面直上の出土であり古墳築造に伴う何らかの儀礼に関連する行為と推察される。

墳丘の封土は最も遺存状態の良い部分で約1.1m、外側は周溝の内側2～3m付近で判然としなくなる。緩やかな斜面に立地することから、旧地表面をローム土主体の土で整地した後、ローム土主体の土と暗褐色土、黒褐色土主体の土を交互に積み上げている。封土除去後に旧地表面を精査したが、4号墳に見られたような掘り込み等は認められなかった。

また、南東部の旧地表面付近で炭化物の小片が所々に散見され、築造に伴う行為かと思われたが、位置的に限定されており疑問視していたところ、後世の掘り込みの存在が確認され、これに伴うものと判断した。

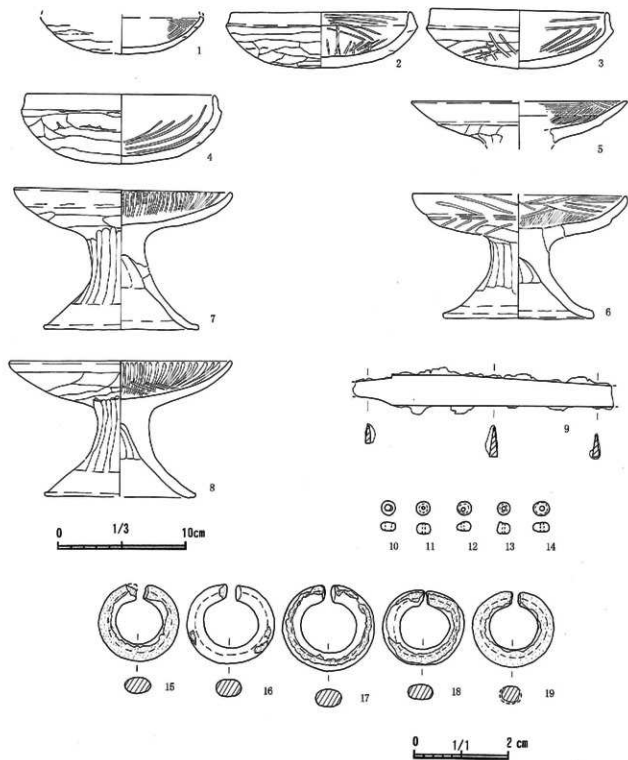
#### 埋葬主体部（第27・28図、図版13～16）

埋葬主体部は墳丘の中央より南に向けて開口する横穴式石室である。石室は旧地表面より掘り込まれた掘方内に築かれた半地下式である。

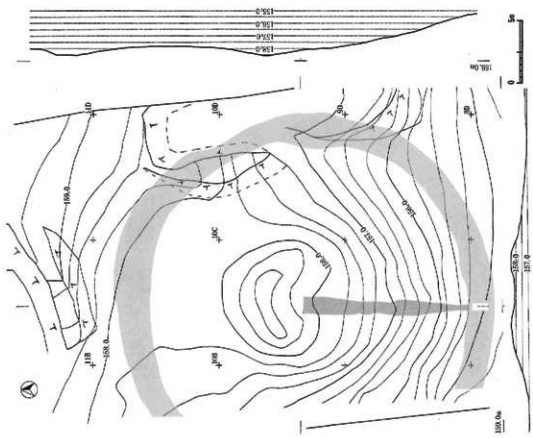
掘方は、長さ5.34m、幅は奥が2.7m、手前が1.9mの末広りの長方形。確認面からの深さは1～1.5mで斜面下方の南側が浅く、底面はローム層中にある。壁はほぼ直立し、側壁側の壁面には壁や裏込め材を納める為の挟り込みが随所に設けられていた。玄室・羨道とも一体の掘方内に築かれていた。底面には根石を据えた痕跡が残る。

石室は全長5.65m、玄室は長さ4.45m、幅は奥が1.3m、中央で1.4m、玄門側が0.97mで、手前がやや窄まる長方形で両袖式。中軸方位はN-3°-Eを示す。天井及び壁の上部は破壊され、石室内には石材や土砂、石膏が充満していた。なお、玄室の中央付近に天井石が1石遺存したが、左右（東西）の壁の高さが異なっており、原位置を離れていると判断された。一旦持ち上げた石が落下した為かこの部分の東側壁が危険な状態であり、天井石を除去して調査を進めた。

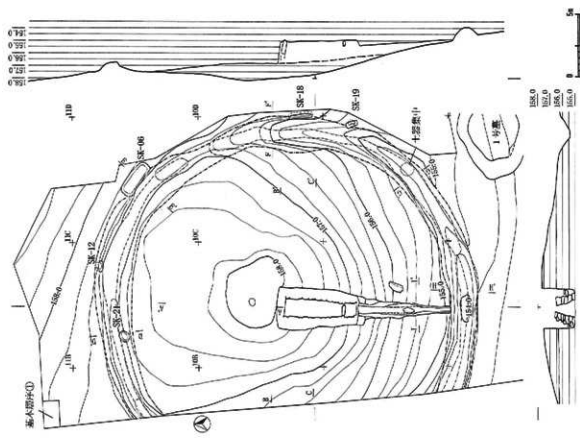
また、天井石は約1.2m×1.1mの不整形で、厚さ20～30cmの平たいものであった。奥壁も本来は一枚石だったと推察されるが、幅約1.55mで、高さが1.2mしか遺存せず、上部を割って持ち出されたものと推察される。残存部の上端中央にV字状の切り込みが見られることから、さらに分割して持ち出す予定を何らかの事情で断念したと考えられる。側壁は加工度の高い軟質の凝灰岩の割石（削石）を積み上げたもので、4号墳に比べ急な持ち送りである。おそらくは、天井石の長さに伴う制約によるものと推察される。壁材は硬度の違いか数種の加工痕が見られるものの、基本的には直方体を小口積みしており6面もしくは4～5面加工してあることから、加工後に積み上げたことが判る。裏込めは凝灰岩片と黄褐色土を主体とし、下位は掘方との間隙が狭い為石材はあまり使用していないが、持ち送りが進む中～上位は壁材を裏込めの石材で固定しながら積み上げてあった。しかし、調査時には細長の壁材が途中で折れているものが多く見受けられた。時



第21圖 4号墳出土遺物



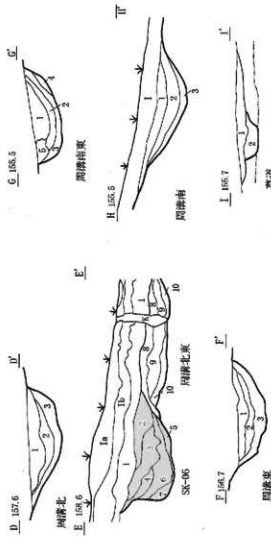
第22图 5号填筑区图



第23图 5号填筑区图

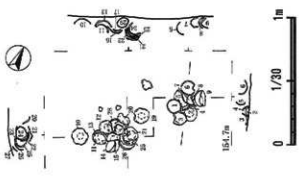


14-4'、8-6'、0-0' 備考  
 57. 黒褐色土(10782/7), 15%含石, 白色(10-6mm)少量含む  
 58. 黒褐色土(10783/2), 灰褐色土(10781/2)20%, 白色(10-3mm)少量含む  
 59. 黒褐色土(10784/2), 灰褐色土(10785/2)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 60. 黒褐色土(10785/2), 灰褐色土(10786/2)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 61. 黒褐色土(10787/7), 灰褐色土(10788/7)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 62. 黒褐色土(10789/2), 灰褐色土(10790/2)20%, 灰褐色土(10791/7)15%含む  
 63. 灰白色粘質土(10792/2), 黒褐色土(10793/2)9%, 灰褐色土(10794/2)15%含む  
 64. 灰白色粘質土(10797/2), 黒褐色土(10798/2)9%, 灰褐色土(10799/2)15%含む  
 65. 黒褐色土(10805/9), 灰褐色土(10806/9)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 66. 黒褐色土(10808/9), 灰褐色土(10809/9)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 67. 黒褐色土(10810/9), 灰褐色土(10811/9)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 68. 明褐色土(10786/6), 白-黄土, 黒褐色土(10787/6)15%, 灰褐色土(10788/6)15%含む  
 69. 明褐色土(10789/6), 白-黄土, 黒褐色土(10790/6)15%, 灰褐色土(10791/6)15%含む  
 70. 黒褐色土(10785/5), 白-黄土, 黒褐色土(10786/5)15%, 灰褐色土(10787/5)15%含む



第25図 5号墳岡津土層図

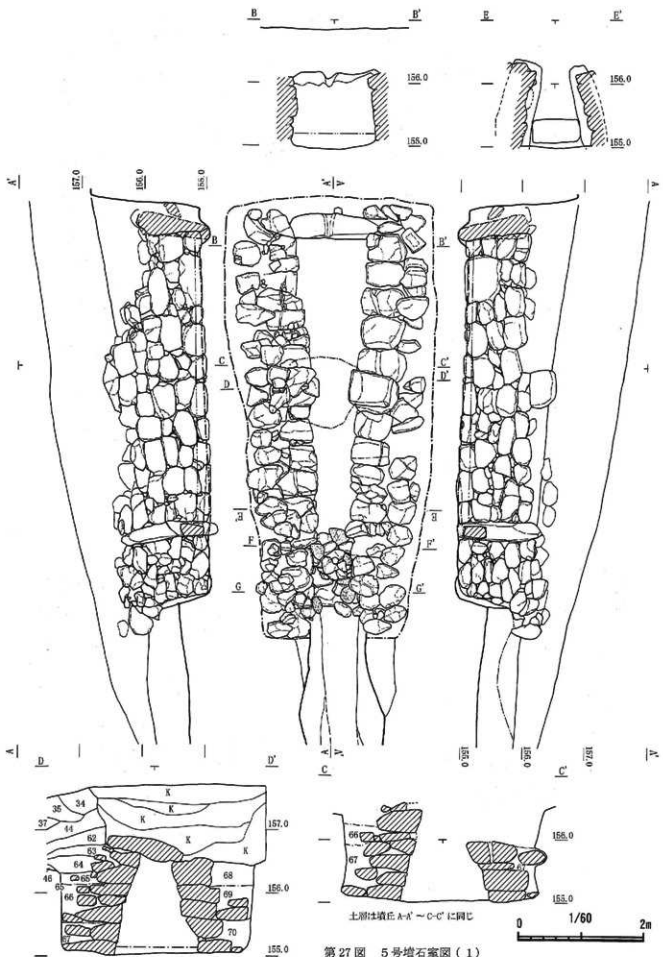
14-4'、8-6'、0-0' 備考  
 57. 黒褐色土(10782/7), 15%含石, 白色(10-6mm)少量含む  
 58. 黒褐色土(10783/2), 灰褐色土(10781/2)20%, 白色(10-3mm)少量含む  
 59. 黒褐色土(10784/2), 灰褐色土(10785/2)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 60. 黒褐色土(10785/2), 灰褐色土(10786/2)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 61. 黒褐色土(10787/7), 灰褐色土(10788/7)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 62. 黒褐色土(10789/2), 灰褐色土(10790/2)20%, 灰褐色土(10791/7)15%含む  
 63. 灰白色粘質土(10792/2), 黒褐色土(10793/2)9%, 灰褐色土(10794/2)15%含む  
 64. 灰白色粘質土(10797/2), 黒褐色土(10798/2)9%, 灰褐色土(10799/2)15%含む  
 65. 黒褐色土(10805/9), 灰褐色土(10806/9)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 66. 黒褐色土(10808/9), 灰褐色土(10809/9)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 67. 黒褐色土(10810/9), 灰褐色土(10811/9)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 68. 明褐色土(10786/6), 白-黄土, 黒褐色土(10787/6)15%, 灰褐色土(10788/6)15%含む  
 69. 明褐色土(10789/6), 白-黄土, 黒褐色土(10790/6)15%, 灰褐色土(10791/6)15%含む  
 70. 黒褐色土(10785/5), 白-黄土, 黒褐色土(10786/5)15%, 灰褐色土(10787/5)15%含む



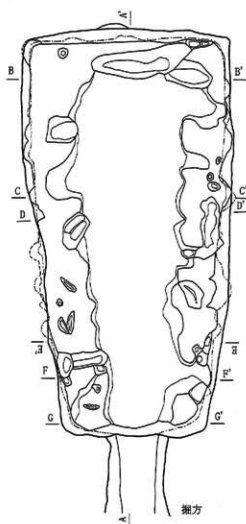
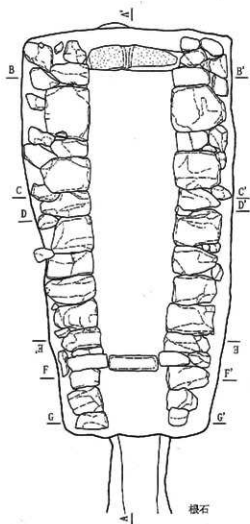
第26図 5号墳岡津南東部土層出土状態

4. 明褐色土(10782/7), 15%含石, 白色(10-6mm)少量含む  
 5. 白-黄土, 黒褐色土(10783/2)15%, 灰褐色土(10784/2)20%, 灰褐色土(10785/2)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 6. 灰褐色土(10787/7), 灰褐色土(10788/7)15%, 灰褐色土(10789/2)20%, 灰褐色土(10790/2)20%, 灰褐色土(10791/7)15%含む  
 7. 明褐色土(10786/6), 白-黄土, 黒褐色土(10787/6)15%含む, 灰褐色土(10788/6)15%含む  
 8. 明褐色土(10789/6), 白-黄土, 黒褐色土(10790/6)15%, 灰褐色土(10791/6)15%含む  
 9. 黒褐色土(10785/5), 白-黄土, 黒褐色土(10786/5)15%, 灰褐色土(10787/5)15%含む  
 2-7はSK-06出土, 8はSK-05出土  
 1. 黒褐色土(10782/7), 15%含石, 白色(10-6mm)少量含む  
 2. 黒褐色土(10783/2), 灰褐色土(10781/2)20%, 白色(10-3mm)少量含む  
 3. 黒褐色土(10784/2), 灰褐色土(10785/2)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 4. 黒褐色土(10785/2), 灰褐色土(10786/2)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 5. 黒褐色土(10787/7), 灰褐色土(10788/7)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 6. 黒褐色土(10789/2), 灰褐色土(10790/2)20%, 灰褐色土(10791/7)15%含む  
 7. 明褐色土(10786/6), 白-黄土, 黒褐色土(10787/6)15%含む, 灰褐色土(10788/6)15%含む  
 8. 明褐色土(10789/6), 白-黄土, 黒褐色土(10790/6)15%, 灰褐色土(10791/6)15%含む  
 9. 黒褐色土(10785/5), 白-黄土, 黒褐色土(10786/5)15%, 灰褐色土(10787/5)15%含む

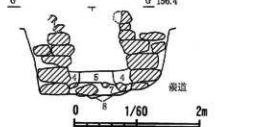
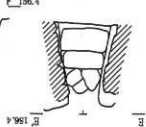
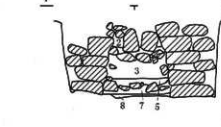
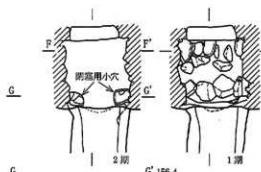
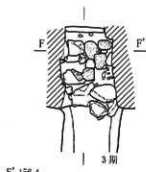
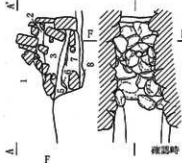
1. 黒褐色土(10782/7), 15%含石, 白色(10-6mm)少量含む  
 2. 黒褐色土(10783/2), 灰褐色土(10781/2)20%, 白色(10-3mm)少量含む  
 3. 黒褐色土(10784/2), 灰褐色土(10785/2)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 4. 黒褐色土(10785/2), 灰褐色土(10786/2)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 5. 黒褐色土(10787/7), 灰褐色土(10788/7)15%, 白色(10-3mm)少量含む  
 6. 黒褐色土(10789/2), 灰褐色土(10790/2)20%, 灰褐色土(10791/7)15%含む  
 7. 明褐色土(10786/6), 白-黄土, 黒褐色土(10787/6)15%含む, 灰褐色土(10788/6)15%含む  
 8. 明褐色土(10789/6), 白-黄土, 黒褐色土(10790/6)15%, 灰褐色土(10791/6)15%含む  
 9. 黒褐色土(10785/5), 白-黄土, 黒褐色土(10786/5)15%, 灰褐色土(10787/5)15%含む



第27图 5号墳石室图(1)



A. 1/56.0



石室

1. 橙褐色土(10YR3/3, LR・RF(1~2mm) 硬底含む)
2. 橙褐色土(10YR3/4)とロームの混合土, 凝灰岩R-LB(1~60mm)少量含む
3. 橙褐色土(10YR3/4)とロームの混合土, 凝灰岩R-LB(1~60mm)少量含む
4. 橙褐色土(10YR3/4), LB(1~2mm) 少量, SP・FP(1~10mm), 凝灰岩R-LB(1~30mm)20%含む
5. 橙褐色土(10YR3/3), 凝灰岩R-LB(1~50mm)1:1混合土
6. 灰白色粘質土(10YR8/2)
7. 凝灰岩R-LB(1~60mm)に暗褐色土(10YR3/3)25%含む
8. 凝灰岩R-LB(1~30mm)が主体

第28図 5号墳石室図(2)

間の経過によるものか、石材盗掘の影響に伴うものかは判然としないが、石材による裏込めではなく、黄褐色土（ローム土）の粘性によってかろうじて崩壊を免れていた。

床面（埋葬面）と判断したのは、掘方の底面より15cm程の厚さで認められた黄褐色土と凝灰岩片の混合土層である。他の土が混入しておらず比較的締まっていた。これより上に堆積していた土砂には壁材や大形の石材片が混入し、土砂も種々入り混じり、締りの弱いものであった。一般的な埋葬面としては4号墳のように礫を敷詰めるか、タイル状に加工した石材を並べたものかであるが本墳では1点の礫も認められず、タイル状の石材も全く認められなかった。

なお、石室内の下位の埋積土はフルイ掛け、水洗い等を行ったが遺物の出土は皆無であった。

玄門は長さ1.35～1.5m程の柱状の石材を立て、玄室と羨道の側壁で挟み込んであった。相方の間隔は下が80cm、上は40cmと側壁と同様に内傾していた。両者の間には幅80cm、高さ40cm、厚さ25cmの板状の石材が間仕切石（闕石）として据えられており、その上には幅65cm、高さ28cm、厚さ8cmの板状の石材が設置されていた。こちらは厚さなどから閉塞用の石材と推察される。また、上部には55cm程の空間があり本来はさらに2段程積まれていたと思われるが、追葬により取り外された後は玉石で閉塞されたものと考えられる。なお、羨道の調査時に底面直上に横たわる長さ1.2m、幅40cm、厚さ10cm程の長楕円形の石材を確認した。当初は厚さから天井石ではなく、閉塞材かと推察したが形状より推して楣石の可能性が高いと思われる。これにより推定される玄門の内法は幅40～80cm、高さ75cmの台形と考えられる。羨道は、長さ0.9m、幅1.03～1.07m、床面は墓道底面より約40cm低い。側壁は加工度の高い凝灰岩の割石（削石）積みで、玄室に比べやや小振りの石材を使用する。

さらに、墓道の東方に長さ1.3m、幅58cm、厚さ31～38cmの天井石と見られる石材が遺存した。大きさや位置から羨道部の天井石であったと推察される。

本墳は墳丘のほぼ中心に石室の奥壁を設けており、羨道から周溝に延びる墓道は幅0.5～1.35mで、長さ7.2mと細長いものであった。

#### 出土遺物（第29・30図、第5・6表）

遺物は、墓道、墳丘、周溝から古墳時代の土師器（坏・甕）を主体とし少量の須恵器壺片が出土した。なお、29図1は墓道より出土したが、古墳築造時のものでは無く追葬もしくは墓前祭など後世に持ち込まれたものと推察される。

また、周溝北東部の黄褐色土中より出土の土師器坏、東側の底面より出土の土師器壺などはそれぞれ、SK-06・18に伴うと考えられる為別項に記す。前述の周溝南東部より出土の一群は一括廃棄と考えられ、径10.5～13.3cm、器高3.3～6.7cmで、平底、丸底、深・浅など多少器形の相違は見られるものの、概ね粗製の土器でミガキなどの仕上げの度合は著しく低い。

#### 4. 1号墓（旧6号墳）

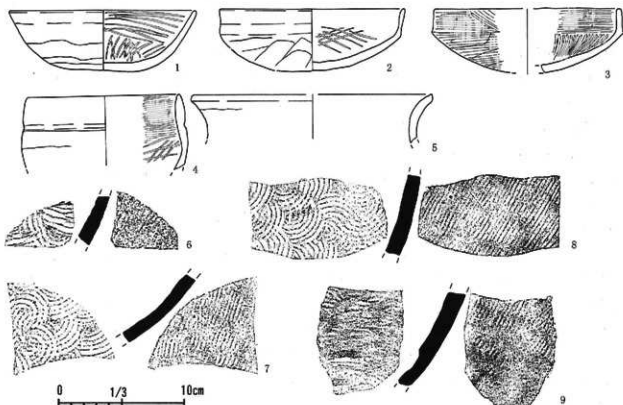
##### 位置・外部施設（第31図、図版17）

調査区の北東部、7C・DGrに所在する。北西約3.5mに5号墳、南西約10mに4号墳が所在し、南西約2mにSK-03、南約5.5mにSK-02が隣接する。

本跡は試掘調査時には小規模ながら6号墳として想定されていたが、調査の進捗に伴い古墳では無く奈良時代の遺構であることが判明し、1号墓と名称を変更した。

平面は、東西7m、南北5.6mの不整楕円形に廻る溝の西端に長方形の土坑が付随する遺構である。





第29図 5号墳出土遺物(1)墳丘・墓道

溝は幅55～85cm、深さ50～80cm、断面は逆台形、埋積土は3層に別けられ、自然埋没であった。この溝の埋積土中に炭化物が混じっており、北側の底面より長さ15cm、径10cm弱の炭化材が出土した。後述の如く西端の土坑内に炭化材が多数遺存していたことから両者は一体の遺構と判断した。

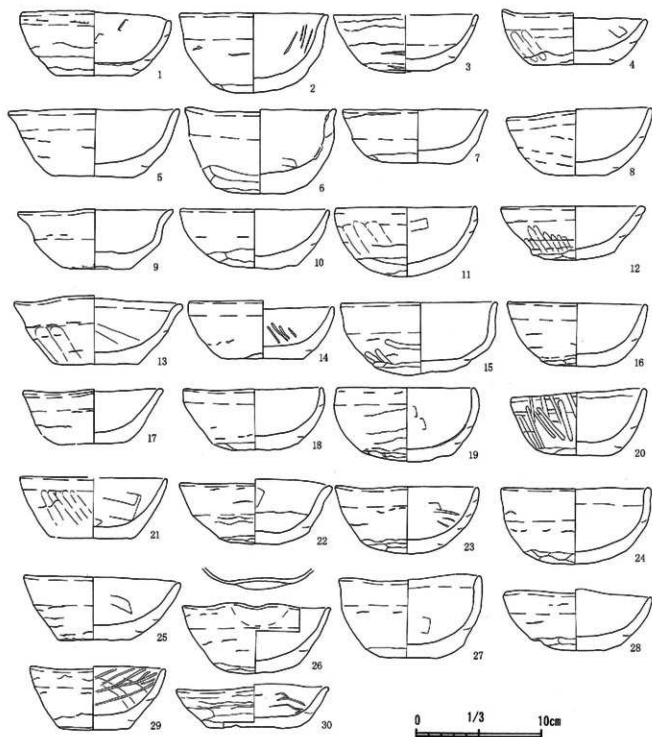
#### 付属施設(第31図、図版17)

当初、この土坑を確認し、SK-01として調査を進めたが、前述の通り溝と一体の遺構であろうとの判断に至った。

平面は南北2m、東西0.9mの長方形、深さは斜面地の為北が90cm、南で55cmであった。埋積土は3層に分けられ、下位の3層中には多くの炭化材が遺存し、壁面には火熱で赤化した部分が所々認められた。この為、火葬墓・火葬跡を想定して慎重に調査を進めたが、一片たりとも火葬骨は認められなかった。壁面に赤化部分が無ければ土葬して炭化材を周囲に置いたとも考えられるが、明らかに土坑(墳)内で火を使用しており疑問を残す。

#### 出土遺物(第31図、第7表)

遺物は、炭化材の他は土坑内より出土の土師器坏が1点(1)のみである。数片に割れて出土し、火熱によって内面の黒色処理が失われていた。



第30图 5号墳出土遺物(2)周溝南東部

第4表 4号墳出土土器観察表

〔 〕 推定銘 〔 〕 保存所

No.	類別		遺存状況	形状・手法等	胎土・施成・色調		出土位置・備考	
	器種	口径・高さ・底径			胎土	施成・色調		
1	土師器 杯	口径	—	30%	紐づくり、底面外周張り後ミガキ、内面ナデ後ミガキ	胎土	砂灰胎	群馬南東部埋土下層
		器高	—			施成	良	
2	土師器 杯	口径	14.3	80%	紐づくり、口辺部内外面ナデ、底面張り、内面ナデ後ミガキ	胎土	砂灰胎	埼玉県表土
		器高	5.4			施成	良	
3	土師器 杯	口径	14.4	90%	縁作り、口辺部内外面ナデ、底面外周張り後ミガキ、内面ナデ後ミガキ	胎土	砂砂灰胎	埼玉県表土
		器高	4.6			施成	良	
4	土師器 杯	口径	15.3	90%	紐づくり、口辺部内外面ナデ、底面外周張り、内面ナデ後ミガキ	胎土	砂灰胎	埼玉県表土
		器高	3.5			施成	良	
5	土師器 高杯	口径	(17.3)	—	片断	胎土	砂灰胎	埼玉県表土
		器高	—			施成	良	
6	土師器 高杯	口径	17.4	80%	口辺部と頸部内外面ナデ、外部外周張り及び腹合部張り、内面ナデ後ミガキで彩色処理、頸部内面ナデ	胎土	砂灰胎	埼玉県表土
		器高	11.3			施成	良	
7	土師器 高杯	口径	(17.1)	60%	口辺部と頸部内外面ナデ、外部外周張り及び腹合部張り、内面ナデ後ミガキで彩色処理、頸部内面ナデ	胎土	砂灰胎	埼玉県表土
		器高	(8.0)			施成	良	
8	土師器 高杯	口径	17.8	80%	口辺部と頸部内外面ナデ、外部外周張り及び腹合部張り、内面ナデ後ミガキで彩色処理、頸部内面ナデ	胎土	砂灰胎	埼玉県表土
		器高	10.8			施成	良	

第5表 5号墳出土土器観察表

〔 〕 推定銘 〔 〕 保存所

No.	類別		遺存状況	形状・手法等	胎土・施成・色調		出土位置・備考	
	器種	口径・高さ・底径			胎土	施成・色調		
1	土師器 杯	口径	16.1	70%	紐づくり、口辺部内外面ナデ、底面外周張り、内面ナデ後ミガキ	胎土	砂灰胎	高麗郡土
		器高	4.7			施成	良	
2	土師器 杯	口径	15.0	70%	紐づくり、口辺部内外面ナデ、底面外周張り後ミガキ、内面ナデ後ミガキ	胎土	砂灰胎	高麗郡土
		器高	4.9			施成	良	
3	土師器 杯	口径	(14.7)	40%	縁づくり、口辺部外周張り後ミガキ、底面外周張り後ミガキ、内面ナデ後ミガキで内面彩色処理	胎土	砂灰胎	埼玉県表土
		器高	(5.1)			施成	良	
4	土師器 鉢?	口径	(12.1)	—	片断	胎土	砂灰胎	埼玉県表土
		器高	—			施成	良	
5	土師器 甕	口径	(18.0)	—	片断	胎土	砂灰胎	埼玉県表土
		器高	—			施成	良	
6	灰土器 甕	口径	—	—	片断	胎土	白色粘土	埼玉県表土
		器高	—			施成	良	
7	灰土器 甕	口径	—	—	片断	胎土	白色粘土	埼玉県表土
		器高	—			施成	良	
8	灰土器 甕	口径	—	—	片断	胎土	白色粘土	埼玉県表土
		器高	—			施成	良	
9	灰土器 甕	口径	—	—	片断	胎土	白色粘土	埼玉県表土
		器高	—			施成	良	

第6表 5号墳周溝内出土土器観察表

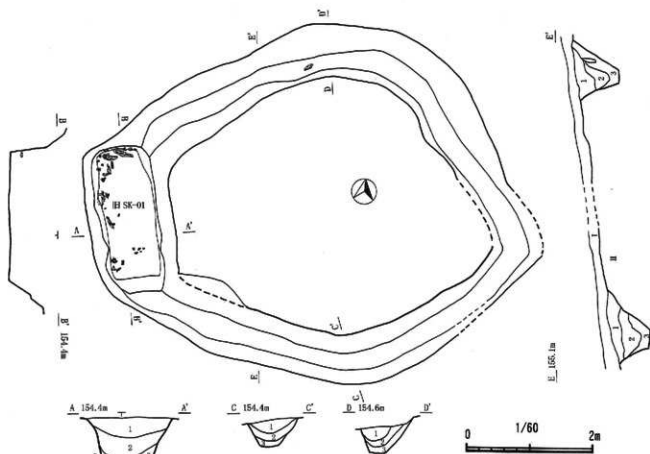
〔 〕 推定銘 〔 〕 保存所

No.	類別		遺存状況	形状・手法等	胎土・施成・色調		出土位置・備考	
	器種	口径・高さ・底径			胎土	施成・色調		
1	土師器 杯	口径	11.5	—	完形	胎土	砂灰胎	群馬南東部埋土下層
		器高	4.7			施成	良	
2	土師器 杯	口径	11.4	90%	縁づくり、口辺部内外面ナデ、外部外周張り後ミガキ、内面ナデ後ミガキ	胎土	砂灰胎	群馬南東部埋土下層
		器高	6.2			施成	良	
3	土師器 杯	口径	(11.4)	30%	縁づくり、口辺部内外面ナデ、外部外周張り後ミガキ、内面ナデ後ミガキ	胎土	砂灰胎	群馬南東部埋土下層
		器高	4.6			施成	良	
4	土師器 杯	口径	11.4	60%	縁づくり、口辺部内外面ナデ、外部外周張り後ミガキ、内面ナデ後ミガキ	胎土	砂灰胎	群馬南東部埋土下層
		器高	4.0			施成	良	
5	土師器 杯	口径	13.5	80%	縁づくり、口辺部内外面ナデ、外部外周張り後ミガキ、内面ナデ後ミガキ	胎土	砂灰胎	群馬南東部埋土下層
		器高	5.2			施成	良	

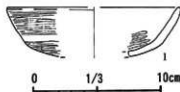
第6表 5号墳周溝内出土土器観察表

( ) 推定値 [ ] 推定値

No.	種類 器種	大きさ (cm)		埋蔵深度	形状・手帳等	胎土・焼成・色調			出土位置・備考
		口径	口径・高さ・底径			胎土	焼成	色調	
6	土師器 杯	口径 12.0 口径 6.8 底径 一	705	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 黒褐色・黄褐色	岡崎南東底面出土層
7	土師器 杯	口径 11.5 口径 4.2 底径 5.4	805	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 灰白色・褐色	岡崎南東底面出土層
8	土師器 杯	口径 11.5 口径 6.3 底径 5.2	906	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 灰白色	岡崎南東底面出土層
9	土師器 杯	口径 12.2 口径 5.8 底径 5.8	906	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 黒褐色・黄褐色	岡崎南東底面出土層
10	土師器 杯	口径 11.8 口径 4.7 底径 一	定形	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 黒褐色・黄褐色	岡崎南東底面出土層
11	土師器 杯	口径 11.4 口径 5.5 底径 一	定形	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 黒褐色・黄褐色	岡崎南東底面出土層
12	土師器 杯	口径 11.4 口径 4.3 底径 一	805	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 黒褐色・黄褐色	岡崎南東底面出土層
13	土師器 杯	口径 13.3 口径 4.9 底径 7.0	定形	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 黒褐色・黄褐色	岡崎南東底面出土層
14	土師器 杯	口径 11.4 口径 4.4 底径 6.6	定形	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 黄褐色	岡崎南東底面出土層
15	土師器 杯	口径 12.0 口径 5.7 底径 一	定形	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 黄褐色	岡崎南東底面出土層
16	土師器 杯	口径 11.0 口径 5.0 底径 3.2	定形	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 黄褐色	岡崎南東底面出土層
17	土師器 杯	口径 10.9 口径 5.3 底径 (5.0)	805	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 黒褐色	岡崎南東底面出土層
18	土師器 杯	口径 11.2 口径 4.9 底径 4.0	定形	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 灰白色・黒褐色	岡崎南東底面出土層
19	土師器 杯	口径 11.0 口径 5.9 底径 7.4	定形	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 灰白色・黒褐色	岡崎南東底面出土層
20	土師器 杯	口径 10.5 口径 5.0 底径 5.3	定形	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 灰白色	岡崎南東底面出土層
21	土師器 杯	口径 (11.0) 口径 4.7 底径 6.6	705	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 黒褐色	岡崎南東底面出土層
22	土師器 杯	口径 12.1 口径 4.8 底径 7.4	705	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 灰白色・黒褐色	岡崎南東底面出土層
23	土師器 杯	口径 11.2 口径 5.2 底径 6.7	906	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 灰白色・黒褐色	岡崎南東底面出土層
24	土師器 杯	口径 11.8 口径 6.0 底径 5.3	906	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 灰白色	岡崎南東底面出土層
25	土師器 杯	口径 12.4 口径 5.0 底径 5.8	805	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 黒褐色・黄褐色	岡崎南東底面出土層
26	土師器 杯	口径 11.8 口径 5.4 底径 6.9	805	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 黒褐色	岡崎南東底面出土層
27	土師器 杯	口径 11.4 口径 6.7 底径 4.8	805	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 黄褐色	岡崎南東底面出土層
28	土師器 杯	口径 11.6 口径 4.5 底径 7.4	805	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 黄褐色・黒褐色	岡崎南東底面出土層
29	土師器 杯	口径 10.9 口径 5.0 底径 5.8	805	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 黒褐色	岡崎南東底面出土層
30	土師器 杯	口径 12.0 口径 3.3 底径 7.6	906	紐づくり、口辺部内外面嵌ナズ、体部内外面ナズ、底部外面割り	胎土 焼成 色調	砂粒 良 良	赤褐色 良 良	内外 黄褐色・黒褐色	岡崎南東底面出土層



第31図 1号墓・出土遺物



A-A'

1. 黒褐色土(10YR2/1)に灰い黄褐色(10YR5/2)R-3小を中混、IP・炭化物・石片を微量含む
2. 黒褐色土(10YR2/1)に灰い黄褐色(10YR5/2)R-3小を中混含む
3. 暗褐色土(10YR3/2)、LE-LB小・中混、粘土質少量、炭化物・R-3小多数を含む

C-C'

1. 黒褐色土(10YR2/2)、灰黄褐色土(10Y5/2)R-3小を中混、LEを少量含む
  2. 黒褐色土(10YR2/2)、灰黄褐色土(10Y5/2)R-3小を中混含む
  3. 暗褐色土(10YR3/2)、LE-LB中を中混、IP・SFを微量含む
- 1~3層9強い

D-D'

1. 黒褐色土(10YR2/2)、灰黄褐色土(10Y5/2)R-3小を中混、LEを少量、IPを微量含む
  2. 黒褐色土(10YR2/2)、灰黄褐色土(10Y5/2)R-3小を中混、IP・SFを微量含む
  3. 灰黄褐色土(10YR4/2)、LE-LB中、R-3小を中混含む
- 1~3層9強い

E-E'

1. 黒褐色土(10YR2/2)、灰黄褐色土(10Y5/2)R-3小を中混、LEを少量、IP・SFを微量含む
2. 黒褐色土(10YR2/2)、灰黄褐色土(10Y5/2)R-3小を中混、IP・SF、炭化物を微量含む
3. 灰黄褐色土(10YR4/2)、LE-LB小を中混含む、層9強い

## 5. 墳穴

古墳の周溝内及びその周辺より埋葬施設と推察される土坑が計16基確認された。大部分は所謂「側壁込土坑」であるが、一部挟り込みが確認出来なかったものもあった。

### (1) SK-02

遺構(第32図、図版17) 調査区の中央部東端、6CGrに位置する。北約3mにSK-03、西約4.5mにSK-05、南約2mにSK-13・14、南西約3.5mにSK-10などが隣接する。

浅い為挟り込みは遺存しなかったが、底面の状態などから西に堅坑、東に横坑を設けていたと推察され、横坑部分の主軸方位はN-38°-Wを示す。遺存部分では平面が1.2×1.2mの不整形で、深さは30~50cm。

また、堅坑と推定される西寄りには東より10cm程高い。

埋積土は4層に分けられ、人為的埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

## (2) SK-03

遺構 (第32図、図版17) 調査区の中央部東端、7CGrに位置する。北東約2mに1号墓、南約3mにSK-02、西南西約3mにSK-05が隣接する。

竪坑は開口部が $1.87 \times 0.88$  mの不整楕円形、底面が $1.3 \times 0.4$  m、西に20 cm程張り出すが掘り過ぎの可能性はある。主軸方位はN-83°-Eを示す。深さ82～95 cm、壁はほぼ直立するが上部は外傾していた。底面はローム層中にあり、ほぼ平らであった。横坑は側壁下部を北に挟り込んでおり、 $1.4 \times 0.4$  mの楕円形で、高さ50 cm。底面は竪坑と平らになる。

埋積土は3層に分けられるが、全体に人為的埋没であった。

遺物の出土は無かった。

## (3) SK-05

遺構 (第32図、図版17) 調査区の中央やや北寄り、6B・CGrに所在する。4号墳の北約2mに位置し、東北東約3.5mにSK-03、東約4.5mにSK-02、南約2mにSK-11が隣接する。

竪坑は開口部が $1.85 \times 0.65 \sim 0.9$  mの不整長円形、底面は $1.55 \times 0.7$  mの長方形。主軸方位はN-26°-Eを示す。深さ0.8～1.0 mで壁はほぼ直立する。底面は鹿沼軽石層中にあり、平らであった。横坑は側壁下部を北西に挟り込んでおり、 $1.45 \times 0.3 \sim 0.4$  mの楕円形で、高さ46 cm。底面は竪坑とほぼ平らである。

埋積土は4層に分けられ、下位は人為的埋没であった。

遺物の出土は無かった。

## (4) SK-06

遺構 (第32図、図版17) 調査区の北東端、10CGrに所在する。5号墳周溝の北東外壁を切って設けられていた。西北西約5.5mにSK-12、西約10.5mにSK-21、南約12mにSK-18が隣接する。

平面は開口部が $3.07 \times 1.63$  mの楕円形、底面は $2.6 \times 1.1$  mでほぼ同形。主軸方位はN-62°-Wを示す。深さは0.75～0.8 mで壁はやや外傾する。底面はローム層中にあり、北西から南東に向かって緩やかに下降する。埋積土は6～7層に分けられ、下位は人為的埋没と考えられるが、当初より挟り込み土坑でなかった可能性が高い。

なお、本跡は5号墳の周溝が20 cm程埋った時期に掘られたと推察され、古墳の築造から大きく遅れるものではないと判断される。

また、本跡の確認前に古墳周溝の埋積土除去作業を行った際、埋積中に東西3 m、南北1.5 mの範囲でローム土を多量に含む土層の堆積が確認されその理由を計りかねていた。その後の調査の進捗に伴いこれらの土砂は本跡の掘削によって生じたものを周溝に埋めて祭壇状に整地したと判断された。周溝内の土砂を取り除いた際上記のローム土を多量に含む層中よりほぼ完形の土師器坏が1点出土している。

出土遺物 (第34図、図版21、第7表) 第34図1は本跡の南西約1.5 mの、周溝内に堆積するローム土が多量に含まれる土層中より出土。位置的に5号墳の遺物とするよりは、本跡に伴うものと判断した。第39図6は本跡の確認面付近で出土したが、後世の流入と考えられる。

#### (5) SK-07

遺構(第32図、図版18) 調査区の南東端、3C・DGrに所在する。3号墳の西約8.5mに位置し、北西約8mにSK-20が隣接するが、他には近隣に該期の遺構は認められなかった。

竪坑は開口部が1.95×1.25mの楕円形、底面は1.5×0.6mの長方形。主軸方位はN-61°-Eを示す。深さは0.95～1.15mで壁は下部が直立し上部は外傾する。底面はローム層中にあり、ほぼ平らであった。横坑は、側壁下部を北に挟り込み、1.8×0.4～0.55mの長方形で高さ0.25cm。底面は竪坑より約25cm高い位置にある。しかし、竪坑の下位は不純物が含まれないローム土で堅く埋め戻してあり、両者の使用面は平らであったと判断される。

埋積土は5層に分けられ、3～5層は人為的埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

#### (6) SK-08

遺構(第32図、図版18) 調査区の中央部東端、4・5CGrに所在する。4号墳の東約3.5mに位置し、南西部はSK-09と重複しこれを切られていた。

開口部は1.65×0.9mの長方形、底面は1.35×0.6mのほぼ同形。主軸方位はN-46°-Eを示す。深さは0.8～0.9mで壁はほぼ直立する。底面はローム層中にあり、概ね平らであった。現状では挟り込みは確認できないが、北西の側壁下端を挟り込んでいた可能性が高く、09との重複によってそれが破壊されたと推察される。

埋積土は4層に分けられ、下位の2～4層は人為的埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

#### (7) SK-09

遺構(第32図、図版18) 調査区の中央部東端、4・5CGrに所在する。4号墳の東約2mに位置し、南東がSK-08と重複しこれを切っていた。

竪坑は開口部が1.5×0.85mの不整長方形で南が丸みを帯びる。底面は1.2×0.65mでほぼ同形。主軸方位はN-10°-Wを示す。なお竪坑の底面はローム層中にあり、東側が8～13cm低くなっており、ここから横坑に変わると推察される。壁は南と西が外傾するが、北と東はほぼ直立する。横坑は前記の如く竪坑底面より一段下がり1.35×0.7mの丸みを持った長方形で高さ32cm。

埋積土は3層に分けられ、2・3層は人為的埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

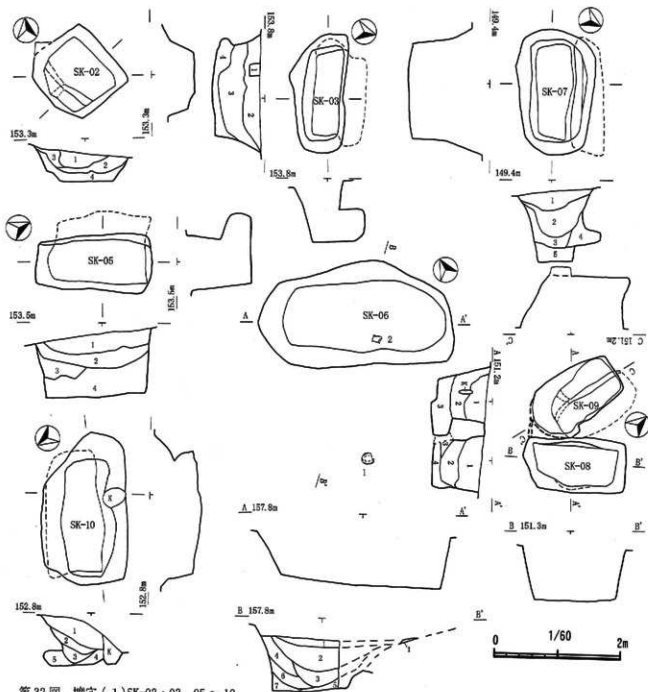
#### (8) SK-10

遺構(第32図、図版18) 調査区の中央部東端、6CGrに所在する。4号墳周溝の北東外壁に設けられていた。北約0.5mにSK-13、北東約1.5mにSK-14、北西約2mにSK-11などが隣接する。

周溝外壁に設けられていることから、開口部は上部が変形していた。開口部は長さ2.4m、幅1.38mの不整楕円形。横坑は1.9×0.95mの楕円形、高さ25cm。主軸方位はN-46°-Wを示す。

開口部から横坑に向けて18cm程下がる。埋積土は5層に分けられ、人為的埋没と考えられる。

本跡の確認前に周溝の埋積土除去作業を行っていたところ、周溝が25cm程埋ったところで、ローム土を



第32図 塚穴(1)SK-02・03、05〜10

塚穴

SK-02

1. 褐色土(10YR2/1), LRを少量, にがい黄褐色土(10YR6/3)R-S小を中量含む
2. 黒褐色土(10YR3/1), LR-S少, にがい黄褐色土(10YR6/3)を中量含む
3. 黒灰色土(10YR4/1), LRを少量, 黒褐色土(10YR3/1)を中量含む
4. にがい黄褐色土(10YR6/3), LR-LR中, 黒褐色土(10YR3/1)を中量含む  
1~4層り強い

SK-03

1. 暗褐色土(10YR3/4), LRを少量含む, 層り弱い
2. 褐色土(10YR3/1), 灰黄褐色土(10YR4/2), LR-LR中を中量含む
3. 灰黄褐色土(10YR5/2), LR-LR大を中量, 褐色土(10YR4/1)を少量含む
4. 灰黄褐色土(10YR5/2), LR-LR大を中量, 褐色土(10YR4/1)を少量含む

SK-05

1. 黒褐色土(10YR3/1), IP-SFを少量含む
2. 褐色土(10YR3/1), LR-IP-SFを少量含む
3. 褐色土(10YR4/1), LRを少量, IP-SFを少量含む
4. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR-LR中, 褐色土(10YR3/1)を少量含む

SK-06

1. 黒色土(10YR2/1), にがい黄褐色土(10YR6/3)を中量含む
2. 褐色土(10YR3/1), にがい黄褐色土(10YR6/3)を少量, IP-SFを少量含む
3. 黒色土(10YR2/1), にがい黄褐色土(10YR6/3)を中量, LR-IP-SFを少量含む
4. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR-LR小を中量, IP-SFを少量含む
5. にがい黄褐色土(10YR6/4)LR-LR主体, 黒褐色土(10YR3/1), IPを少量, SF-沿片を少量含む

6. 灰黄褐色土(10YR4/2), 褐色土(10YR3/1), LR-LR中を中量, IPを少量, SFを少量含む
7. 黄褐色土(10YR5/6), LR-LR大を主体, 褐色土(10YR3/1)を中量含む, 沿片の混入

SK-07

1. 黒褐色土(10YR3/1), 灰黄褐色土(10YR4/2)を中量, IPを少量含む
2. 褐色土(10YR3/1), 褐色土(10YR4/1)を中量, LR-IPを少量含む
3. 灰黄褐色土(10YR4/2), 黒褐色土(10YR3/1)を中量, LR-LR小を少量
4. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR-LR大, 褐色土(10YR4/1)を中量含む, 層り強い
5. 黄褐色土(10YR5/6), LR-LR大を主体, 褐色土(10YR3/1)を少量含む, 層り強い  
1~3層りあり

SK-08

1. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR-LR小を中量, 褐色土(10YR3/1)を少量, IPを少量含む
2. 褐色土(10YR3/1), 褐色土(10YR4/1)を中量, LR-IPを少量含む
3. 灰黄褐色土(10YR4/2), 黒褐色土(10YR3/1)を中量, LR-LR小を少量
4. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR-LR大, 褐色土(10YR4/1)を中量含む, 層り強い

SK-10

1. 黒褐色土(10YR3/1), LRを少量, IP-SFを少量含む
2. 褐色土(10YR3/1), LR-LR小を中量, IP-SFを少量含む
3. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR-LR小を中量, SFを少量含む
4. にがい黄褐色土(10YR6/3), LR-LR小, IP-SFを少量含む
5. 明黄褐色土(10YR6/4), LR-LR中を中量, 灰黄褐色土(10YR4/2)を少量含む



多く含む層が確認され、奈良時代の須恵器蓋と坏の破片が散在していた。竪穴住居跡の可能性を想定し調査を進めたが、カマド等の火処もなく、遺物は前記の須恵器の蓋と坏各1点（その破片のみが散在）と須恵器甕、瓦の細片のみであった。そこで周囲を精査して本跡の確認に至ったものである。前述のSK-06同様に掘削によって生じたローム土を周溝内に敷いて整地したと判断した。

出土遺物（第34図、図版21、第7表）第34図2・3の須恵器蓋と坏には同じ「×」のヘラ記号がみられ、セットで製作・焼成されたと推察される。また、出土状態から推して本来の形状のままではなく、意図的に破壊して散布した可能性が高い。

#### (9) SK-11

遺構（第33図、図版18） 調査区の中央部、6CGrに所在する。4号墳周溝の北部外壁に設けられていた。東約2mにSK-13、南東約2mにSK-10、北約2mにSK-05、北東約4mにSK-02が隣接する。

周溝内に所在する為開口部は変形していると思われる。現状の開口部は1.35～1.65×0.75mの不整長方形、底面は1.2×0.5mの不整長方形で、主軸方位はN-55°-Wを示す。底面は竪坑と横坑の境が明瞭でなく、横坑は1.05×0.5mの不整楕円形で、高さ40cm。深さは北が85cm、南の周溝底面からは35cm、南東側は緩やかに立ち上がっていた。

埋積土は4層に分けられたが1・2層は周溝の埋積土が落ち込んだ可能性が高い。

遺物の出土は無かった。

#### (10) SK-12

遺構（第33図、図版18） 調査区の北端中程、10BGrに所在する。5号墳周溝の北側外壁に設けられていた。東約5mにSK-06、西約5mにSK-21が隣接する。

周溝内に所在する為開口部は横口形で、長さ0.8m、高さ30cm程であった。横坑は0.7m×45cmの楕円形で、主軸方位はN-82°-Wを示す。底面の深さは北で85cm、南は周溝底面から18cmであったが、樹木の根の痕跡によって不瞭になっていた。

埋積土は1層で、人為的埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

#### (11) SK-13

遺構（第33図、図版18） 調査区の中央部東端、6CGrに所在する。4号墳の北東約1mに位置し、東約1mにSK-14、南西約0.5mにSK-10、西約2mにSK-11、北約2mにSK-02が隣接する。

竪坑は開口部が1.6×0.83mの不整長方形、底面は1.13×0.45mの長方形で、主軸方位はN-54°-Wを示す。深さ0.65～0.85mで、壁は西を除き外傾する。底面はローム層中にあり、横坑側に向けて下降する。横坑は側壁の下位を北西下方に向けて抉り込み、約1.4×0.55mの不整長方形で、高さは35cm。

埋積土は3層に分けられ、2・3層は人為的埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

#### (12) SK-14

遺構（第33図、図版19） 調査区の中央部東端に所在する。西はSK-15と重複しこれを切る。4号墳の

北東約 2.5 m に位置し、西約 1 m に SK-13、同約 4 m に SK-11、北約 2 m に SK-02、南西約 1.5 m に SK-10 などが隣接する。

竪坑は開口部が 1.2 × 0.67 m の不整楕円形、底面も 1.1 × 0.3 m のほぼ同形と推定され、主軸方位は N-72°-E を示す。深さは 28 ~ 40 cm と浅く、底面はローム層中にあり横坑側に向かって下降する。横坑は側壁下端を北下方に向かって抉り込み、1.3 × 0.4 m の楕円形で、高さは約 20 cm、底面は奥に向かって下降する。

埋積土は 3 層に分けられ、人為的埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

### (13) SK-18

遺構 (第 33 図、図版 19) 調査区の北部東端、9C・DGr に所在する。5 号墳の周溝東側の外壁に抉り込まれていた。南約 2.5 m に SK-19、北約 12 m に SK-06 が隣接する。

周溝の外壁に設けられていることから、開口部は横口となり、長さ 2.1 m、高さ 25 cm である。したがって竪坑の状態は明確にし難いが、後述の如く周溝がその役割を達したと推察される。横坑は東に向かって抉り込まれ、2.25 × 0.5 m の楕円形で、主軸方位は N-2°-E を示す。底面はほぼ平らで、東側の深さは周溝上面から 1.17 m、西側は周溝底面より 25 cm 程であった。

埋積土は 4 層に分けられ、人為的埋没と判断し得るが、堆積状態から推して構築時には周溝底面が露出した状態であったと考えられる。SK-06・10 などは周溝埋没途中に掘削土でその土を整地したと判断されるのに対し、本跡の場合は古墳の築造から比較的近い周溝の埋没が進まない時期か、若干埋没は進んだもののそれを除去して周溝底面を露出させたと考えられる。

出土遺物 (第 34 図、図版 21、第 7 表) 本跡北東約 50 cm のところよりほぼ完形の土師器甕が 1 点出土した。位置的に古墳の副葬品というよりは本跡への供え物の感が強い。この土器は周溝底面と見られるローム直上より出土しており、上記の想定を裏付ける資料となろう。胴張から長胴への移行期のものと見られ、最大径は胴部中央より下にある。胴部下位は火熱によって赤化しもろくなった部分も見られ、日常生活で使用されたものと考えられる。

### (14) SK-19

遺構 (第 33 図、図版 19) 調査区の北部東端、8CGr に所在する。5 号墳の周溝東側の外壁に抉り込まれていた。北約 2.5 m に SK-18 が隣接する。

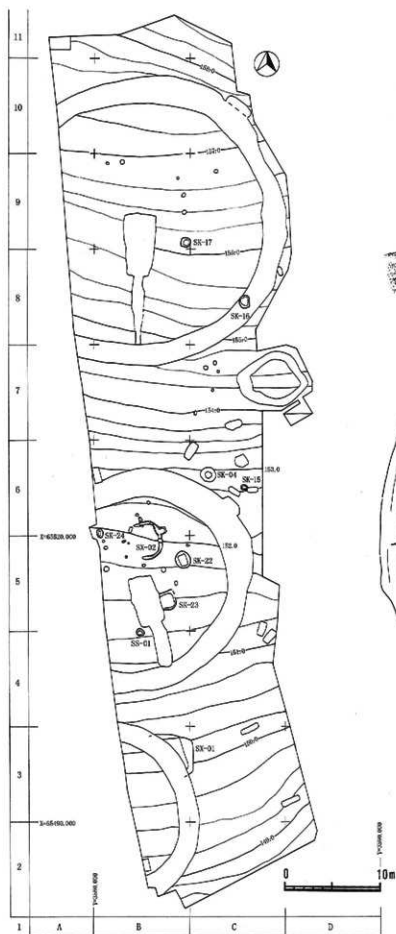
竪坑と横坑の区画が明瞭で無いもの、東側壁の下部が東に向かって抉り込まれており、同種の遺構と判断した。開口部は、1 × 0.53 ~ 0.65 m の不整楕円形、底面は 0.75 × 0.45 m のほぼ同形で、主軸方位は N-17°-W を示す。底面は樹木の根跡との重複によって一部不明瞭となっていたが、南から北に向かって下降するとともに、北東下方に向かって抉り込まれていた。深さは北の周溝上面から 70 cm、南は約 25 cm であった。

埋積土は 3 層に分けられ、人為的埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

### (15) SK-20

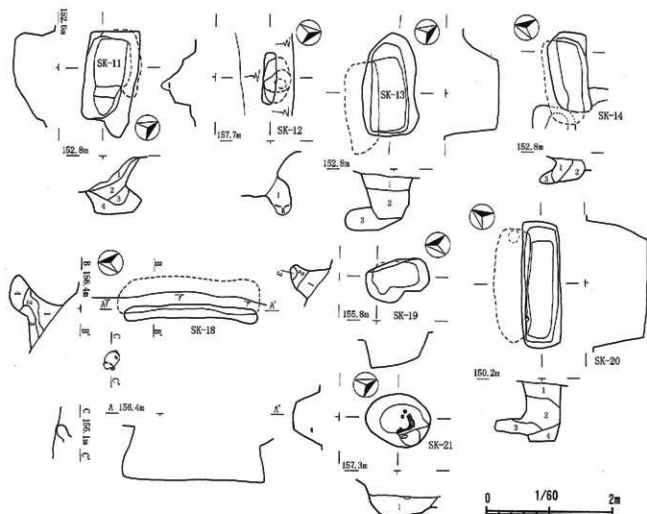
遺構 (第 33 図、図版 19) 調査区の南部東寄り、3・4CGr に所在する。4 号墳の南東約 7.5 m、3 号墳の北東約 6.5 m に位置し、東南東約 8 m に SK-07 がある。



第35圖 遺構配置圖(2)古墳時代以前



第34圖 塚穴出土遺物



第33図 塚穴(2)SK-11～14、18～21

SK-11

1. 黒褐色土(0YR2/2), LR-IP-SFを少量含む
2. 灰黄褐色土(10YR4/1), 黒褐色土(10YR4/1)を中量, LRを少量含む
3. 赤い黄褐色土(10YR5/3), 黒褐色土(10YR4/1)を少量含む
4. 明黄褐色土(10YR6/6), LR少量, 灰黄褐色土(10YR4/2)を中量, IPを少量含む

SK-12

1. 黒褐色土(0YR2/2), LR-LR少量を含む

SK-13

1. 黒褐色土(0YR2/2), LR-LRを少量, LRを少量, IPに赤い黄褐色土(10YR5/3)を少量含む
2. 赤い黄褐色土(10YR5/3), LR-LRを多量, 黒褐色土(10YR2/2)を少量含む
3. 明黄褐色土(10YR6/6), LR-LRを中量, 赤褐色土(10YR5/3)を中量含む

SK-14

1. 黒褐色土(0YR2/1), LRを少量含む
2. LR-LRを主体, 黒褐色土(0YR2/2)を多量に含む
3. 灰黄褐色土(10YR6/2), LR-LRを中量, 黒褐色土(10YR2/2)を少量含む, 腐り難い

SK-18

1. 灰黄褐色土(10YR4/2), LR-LRを多量, 黒褐色土(0YR2/1)を少量含む
2. 明黄褐色土(10YR6/6), LR-LRを主体, 灰黄褐色土(10YR5/2)を中量含む
3. 赤い黄褐色土(10YR5/3), 灰黄褐色土(10YR5/2)を中量, LR-LRを少量含む
4. 黒褐色土(10YR4/1), LRを少量含む

SK-19

1. 黄褐色土(10YR4/6), LR-LRを多量に含む
2. 赤い黄褐色土(10YR4/2), LR-LRを中量, 黒褐色土(0YR2/1)を少量含む
3. 明黄褐色土(10YR6/6), 赤い黄褐色土(10YR5/3)を中量含む

SK-20

1. 黒褐色土(0YR2/2), LR-LRを中量, IP-SFを微量含む
2. 黒褐色土(0YR2/2), LR-LRを中量, IP-SFを微量含む
3. 黒褐色土(0YR2/2), 2に比しLR-LR少ない
4. 赤い黄褐色土(10YR5/3), LRを少量, SFを微量含む

SK-21

1. 黒褐色土(0YR2/1), 赤い黄褐色土(10YR5/3)を少量含む, IP-SFを微量, 上位に腐化したR-Bを多量含む

竪坑は開口部が2×0.6mの長方形、底面は1.53×0.4mのほぼ同形で、長軸方位はN-63°-Eを示す。深さは85～95cmで、壁はほぼ直立する。底面はローム層中にあり、一旦同種の土で横坑の高さまで埋戻して埋葬したと推察され、非常に堅く締まっていた。竪坑が深く狭い為、横坑の掘削に利用した空間を埋戻した可能性が考えられる。横坑は1.8×0.57mの楕円形で、高さ23cm、底面は竪坑より約10cm高く、ほぼ平らであった。

埋積土は4層に分けられ、人為的埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

## (16) SK-21

遺構(第33図、図版19) 調査区の北端中央部に所在する。本跡は5号墳周溝の北側内壁に接して設けられていた。遺構の形状や所在する位置などから他の遺構と同一に扱うことは憚られるが、次項の1群とは時代が異なる為本項に含めた。

平面は1.05×0.8mのほぼ円形、底面は0.7×0.45mでほぼ同形、長軸方位はN-31°-Eを示す。深さは25～50cmで、壁は外傾して立ち上げる。底面はローム層中にあり、ほぼ平らであった。

埋積土は1層で、埋積土中に炭化材が遺存していた。焼土や焼面が見られなかったことから、他から持ち込まれたと推察される。周溝の埋没途中に掘り込まれたもので、自然埋没と考えられる。

炭化物以外に出土遺物は無かった。また、前述の如く、他の遺構(穴)とは異なる性格の施設の可能性が高い。

## 6. その他の遺構

各古墳の墳丘下や周溝内及び空間地より、古墳に先行する時代の遺構が確認された。その内訳は土坑7基、集石遺構1基、性格不明遺構2基などである。なお、本項に掲げた遺構は確認層位や埋積土から縄文時代と考えられるが、唯一SX-01は断定し難いところもある。

### (1) SK-04

遺構(第36図、図版19) 調査区の中央部東寄り、6CGrに所在する。4号墳の北東約0.7mに位置するが、該期の遺構は東約3mにSK-15、北東約17mにSK-16、南西約7mにSX-02、南約8mにSK-22などがある。

開口部は1.6×1.5mのほぼ円形、底面は0.95×0.5～0.75mの不整形。深さは1～1.2mで、壁の下位は直立ぎみに立ち上がるが、上位は外傾する。南西壁の中程に径30cm程の小穴が見られたが、性格は不明。底面はローム層中にありほぼ平らであった。

埋積土は4層に分けられ、自然埋没であった。所謂「陥穴」と考えられる。

遺物の出土は無かった。

### (2) SK-15

遺構(第36図、図版19) 調査区の中央部東端、6CGrに所在する。西はSK-14と重複しこれに切られていた。4号墳の北東約2mに位置し、西約3mにSK-04が隣接する。

開口部は径約0.7mの円形、底面は0.5×0.3mの楕円形。深さは0.5mで、壁はほぼ直立し、底面はローム層中にあり、ほぼ平坦であった。

埋積土は4層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

### (3) SK-16

遺構(第36図、図版20) 調査区の中央部東端、8CGrに所在する。5号墳の周溝南東部に位置し、北西側は墳丘に接する。北西約7.5mにSK-17、南約17～18mにSK-04・15がある。

開口部は周溝に切られ変形するが、1.4×1.1mの不整形円形、底面は北西と北東に張り出し1.3×0.7

～1.3 mの不整形。深さは西が2.07 m、東は周溝底面から1.4 mで、壁の下部はややオーバーハングし、上部は緩やかに外傾する。なお、北西部と北東隅は前記の如く大きく張り出す。底面は鹿沼軽石層中にあり、ほぼ平らであった。北側の張り出しは鹿沼軽石層を壁としていることが関連するやもしれない。

埋積土は12層に分けられ、上部は自然埋没と見られるが下位は人為的埋没の可能性が高い。所謂「陥穴」と考えられる。

遺物の出土は無かった。

#### (4) SK-17

遺構(第36図、図版20) 調査区の北部中程、8BGrに所在する。5号墳の墳丘下に位置し、南東約7 mにSK-16が隣接する。

開口部は1.05 × 1 mの不整形円形、底面は径70 cmでほぼ円形。深さは60 cmで、壁は東側の下部が僅かにオーバーハングする他はやや外傾する程度である。底面はローム層中にあり、ほぼ平坦であった。

埋積土は4層に分けられ、自然埋没と考えられる。小型の袋状土坑と推定される。

遺物の出土は無かった。

#### (5) SK-22

遺構(第36図、図版20) 調査区の中央部、4BGrに所在する。4号墳の墳丘下に位置し、南約2.5 mにSK-23、西約1.5 mにSX-02、北約8 mにSK-04などが隣接する。

開口部は1.85 × 1.45 mの楕円形、底面は径1.2 × 0.85 mの長方形、長軸方位はN-11°-Wを示す。深さは1.5～1.55 mで、壁は下位がほぼ直立(一部オーバーハング)し、上位は外傾する。底面はローム層中にあり、ほぼ平らであった。

埋積土は10層に分けられ、自然埋没と考えられる。所謂「陥穴」と考えられる。

遺物の出土は無かった。

#### (6) SK-23

遺構(第36図、図版20) 調査区の中央部、4BGrに所在する。4号墳の墳丘下に位置し、西は石室の掘方に切られていた。北約2.5 mにSK-22、SX-02、北西約8.5 mにSK-24、南南西約3 mにSS-01が隣接する。前記の事情から本来の規模・形状は明確に難しいが、南北長1.92 m、現存東西長約1.7 m、円形もしくは楕円形と推定される。深さは15～30 cmで、壁は外傾する。底面はローム層中にありほぼ平らであった。

埋積土は2層に分けられ、自然埋没と考えられる。

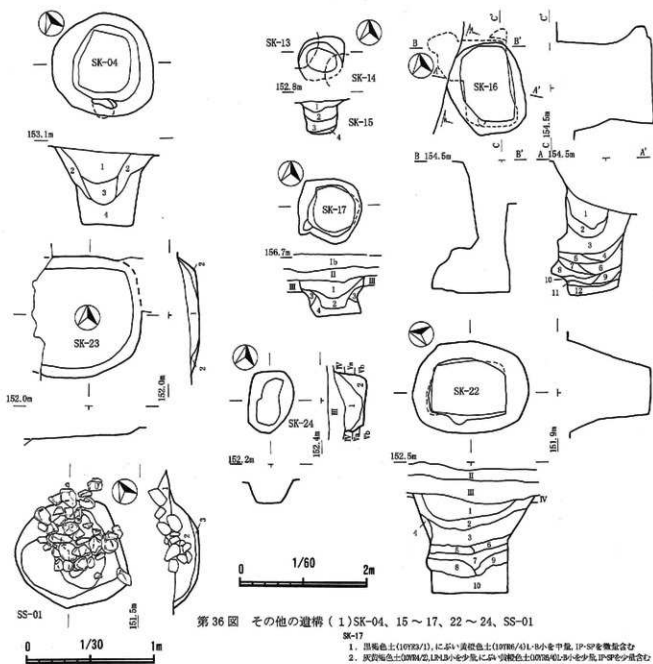
遺物の出土は無かった。

#### (7) SK-24

遺構(第36図、図版20) 調査区の中央部西端6BGrに所在する。4号墳の墳丘下に位置し、東約2.5 mにSX-02、南東約8.5 mにSK-23などが隣接する。

開口部は1 × 0.7 mの不整形楕円形、底面も径0.75 × 0.25～0.4 mの不整形楕円形であった。深さは30～50 cmで、壁はやや外傾し、底面はローム層中にあり、ほぼ平らであった。

埋積土は2層に分けられ、自然埋没と考えられる。遺物の出土は無かった。



第36図 その他の遺構(1)SK-04、15~17、22~24、SS-01

- SK-04**
1. 灰黄褐色土(10784/2), LR-LB大を中量, IP-SPを微量含む
  2. にぶい黄褐色土(10784/2), LR-LB中を中量, 黒色土(10782/3), 褐灰色土(10784/1)を少量含む
  3. にぶい黄褐色土(10784/2), LR-LB大を中量, 黒褐色土(10783/1), IP-SPを少量含む
  4. にぶい黄褐色土(10784/2), LR-LB小を中量含む
- SK-15**
1. 灰黄褐色土(10784/2), LR-LB小を少量, にぶい黄褐色土(10785/3)を中量含む
  2. にぶい黄褐色土(10785/3), 灰黄褐色土(10785/2)を中量, LR-IPを少量含む
  3. 灰黄褐色土(10784/2), 黒褐色土(10783/1)を中量, IP-SPを少量含む
  4. 明褐色土(10785/4), にぶい黄褐色土(10785/3)を中量含む
- SK-16**
- 1~4 繰り返し
- SK-17**
1. 黒褐色土(10783/1), LR-IP-SPを微量含む
  2. 灰黄褐色土(10784/2), LR-LB小を少量, にぶい黄褐色土(10785/3)を少量含む
  3. にぶい黄褐色土(10784/2), LR-LB大を中量, 黒褐色土(10783/1), IP-SPを少量含む
  4. にぶい黄褐色土(10784/2), LR-LB小を中量, IP-SPを少量含む
- SK-22**
1. 黒褐色土(10783/1), LR-IP-SPを少量含む
  2. 黒褐色土(10783/1), LR-IP-SPを少量含む, 繰り返しあり
  3. 黒褐色土(10782/3), LR-LB小を中量, IP-SPを少量含む
  4. にぶい黄褐色土(10785/4), 黒褐色土(10783/2)を中量含む
  5. 明黄褐色土(10785/4), LR-LB大を中量, 黒褐色土(10783/2)を中量含む
  6. 黒褐色土(10783/1), LR-LB小を中量, 灰黄褐色土(10784/2)を中量含む
  7. 黒褐色土(10783/1), LR-LB小を中量, 灰黄褐色土(10784/2)を中量, IP-SPを少量含む
  8. にぶい黄褐色土(10785/4), LR-LB大を中量, 黒褐色土(10783/2)を中量含む
  9. 明褐色土(10785/4), LR-LB大を中量, 黒褐色土(10783/1)を中量含む
  10. 明褐色土(10785/4), 黒褐色土(10783/2), にぶい黄褐色土(10785/4), 明黄褐色土(10785/4)を少量含む
- SK-23**
1. 黒褐色土(10783/1), IP-SPを少量含む
  2. 明褐色土(10785/2), IP-SPを少量含む
- SK-24**
1. 黒褐色土(10782/2), IP-SPを少量含む
  2. 明褐色土(10785/2), IP-SPを少量含む, 炭化物を微量含む
- SS-01**
1. 黒色土(10782/2), にぶい黄褐色土(10785/4)を中量, IP-SPを少量含む
  2. にぶい黄褐色土(10785/4), LR-LB中を中量, 黒褐色土(10782/3), IP-SPを少量含む
  3. 明黄褐色土(10785/4), LR-LB大を中量, 黒褐色土(10783/2)を少量, IP-SPを微量含む
  4. にぶい黄褐色土(10785/4), LR-LB大を中量, 灰黄褐色土(10785/2)を中量含む
  5. 灰黄褐色土(10785/2), 黒褐色土(10785/3)を中量含む
  6. にぶい黄褐色土(10785/4), 黒褐色土(10785/3)を中量含む
  7. 黒褐色土(10784/1), LR-LB小を中量, IPを中量含む
  8. 灰黄褐色土(10785/2), LR-LB大を中量, IPを中量含む
  9. 灰黄褐色土(10785/2), LR-LB大を中量, 黒褐色土(10783/1), IPを少量含む
  10. 灰黄褐色土(10784/2), 黒褐色土(10783/1)を多量, IPを少量含む
  11. 明黄褐色土(10786/4), IP-LB大を中量, 灰黄褐色土(10786/2)を中量含む
  12. 灰黄褐色土(10785/2), 黒褐色土(10783/1), IPを少量含む
- 1~3 繰り返し

- SK-04**
1. 灰黄褐色土(10784/2), LR-LB大を中量, IP-SPを微量含む
  2. にぶい黄褐色土(10784/2), LR-LB中を中量, 黒色土(10782/3), 褐灰色土(10784/1)を少量含む
  3. にぶい黄褐色土(10784/2), LR-LB大を中量, 黒褐色土(10783/1), IP-SPを少量含む
  4. にぶい黄褐色土(10784/2), LR-LB小を中量含む
- SK-15**
1. 灰黄褐色土(10784/2), LR-LB小を少量, にぶい黄褐色土(10785/3)を中量含む
  2. にぶい黄褐色土(10785/3), 灰黄褐色土(10785/2)を中量, LR-IPを少量含む
  3. 灰黄褐色土(10784/2), 黒褐色土(10783/1)を中量, IP-SPを少量含む
  4. 明褐色土(10785/4), にぶい黄褐色土(10785/3)を中量含む
- SK-16**
- 1~4 繰り返し
- SK-17**
1. 黒褐色土(10783/1), LR-IP-SPを微量含む
  2. 灰黄褐色土(10784/2), LR-LB小を少量, にぶい黄褐色土(10785/3)を少量含む
  3. にぶい黄褐色土(10784/2), LR-LB大を中量, 黒褐色土(10783/1), IP-SPを少量含む
  4. にぶい黄褐色土(10784/2), LR-LB小を中量, IP-SPを少量含む
- SK-22**
1. 黒褐色土(10783/1), LR-IP-SPを少量含む
  2. 黒褐色土(10783/1), LR-IP-SPを少量含む, 繰り返しあり
  3. 黒褐色土(10782/3), LR-LB小を中量, IP-SPを少量含む
  4. にぶい黄褐色土(10785/4), 黒褐色土(10783/2)を中量含む
  5. 明黄褐色土(10785/4), LR-LB大を中量, 黒褐色土(10783/2)を中量含む
  6. 黒褐色土(10783/1), LR-LB小を中量, 灰黄褐色土(10784/2)を中量含む
  7. 黒褐色土(10783/1), LR-LB小を中量, 灰黄褐色土(10784/2)を中量, IP-SPを少量含む
  8. にぶい黄褐色土(10785/4), LR-LB大を中量, 黒褐色土(10783/2)を中量含む
  9. 明褐色土(10785/4), LR-LB大を中量, 黒褐色土(10783/1)を中量含む
  10. 明褐色土(10785/4), 黒褐色土(10783/2), にぶい黄褐色土(10785/4), 明黄褐色土(10785/4)を少量含む
- SK-23**
1. 黒褐色土(10783/1), IP-SPを少量含む
  2. 明褐色土(10785/2), IP-SPを少量含む
- SK-24**
1. 黒褐色土(10782/2), IP-SPを少量含む
  2. 明褐色土(10785/2), IP-SPを少量含む, 炭化物を微量含む
- SS-01**
1. 黒色土(10782/2), LRを少量含む
  2. 黒褐色土(10783/1), LR, 灰褐色土(10785/4)Rを少量含む
  3. 黒褐色土(10782/2), 黄褐色土(10785/4)Rを少量含む, 炭化物を微量含む
- 2~3 繰り返し

#### (8) SS-01

遺構 (第 36 図、図版 20) 調査区の中央部西寄り 4BGr に所在する。4 号墳の墳丘下に位置し、上部は古墳の構築時及び盗掘に際して影響を受けたと見られる。北北西約 3 m に SK-23、北約 7 m に SX-02、北西約 10 m に SK-24 などが隣接する。

径約 0.8 × 1 m 程の範囲に、火熱を受けたと見られる径 6 ~ 16 cm の礫が集石されていた。集石の下には、径 80 × 90 cm のほぼ円形で、深さ 20 cm の掘り込みがあり、壁は外傾し、底面はほぼ平らであった。

埋積土は 3 層に分けられ、最下層には炭化物粒が認められた。礫は 1・2 層に含まれ、残存数は 62 個であった。

遺物の出土は無かった。

#### (9) SX-01

遺構 (第 37 図、図版 20) 調査区の中央部、3BGr に所在する。3 号墳の周溝北東部と重複しこれに切られていた。確認当初は、黒色土中に長さ 32 cm、径 24 × 13 cm 程の河原石が認められた為、石の周囲を精査し確認した。しかし、本跡の埋積土と 3 号墳の周溝は比較的近似しており、不明遺構として本項で報告するが、必ずしも縄文時代の遺構として断定したものではない。

平面形、規模は前記の如く西側は 3 号墳の周溝との重複で切られ判然としないが、東端での南北長約 2.8 m、現存東西長は北が 2.2 m、南が 0.5 m であった。平面は南北に長い楕円形もしくは不整形円形と推定される。深さは 20 ~ 25 cm で、壁はやや外傾し、底面はほぼ平らであった。柱穴や火処などの付随施設は認められなかった。本跡確認の契機となった河原石は底面上約 10 cm に位置し、その下にも掘り込みなどは確認できなかった。

埋積土は 3 層に分けられ、3 号周溝に近似するものの、本跡の方が IP の混入が顕著であった。

出土遺物 (第 38 図、図版 25、第 8 表) 遺物は前記の河原石の他に縄文時代前期黒浜式期の深鉢片 (第 38 図 4) が出土したが、本跡の時代を示すものとは断定し難い。

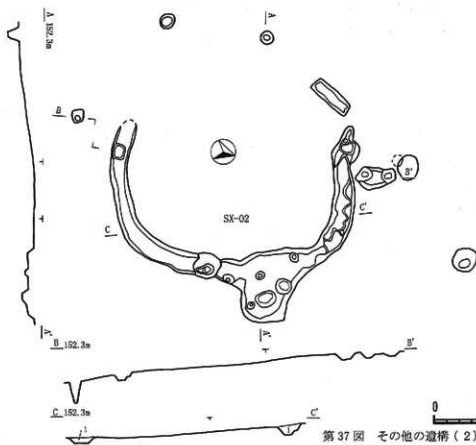
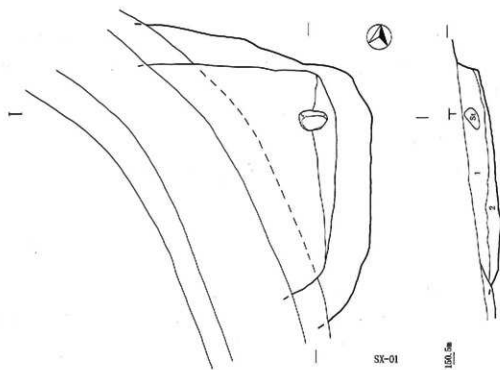
#### (10) SX-02

遺構 (第 37 図、図版 20) 調査区の中央部西寄り、5・6BGr に所在する。4 号墳の墳丘下に位置し、東約 1.5 m に SK-22、南約 3.5 m に SK-23、西約 2.5 m に SK-24、北東約 7.5 m に SK-04 などが隣接する。

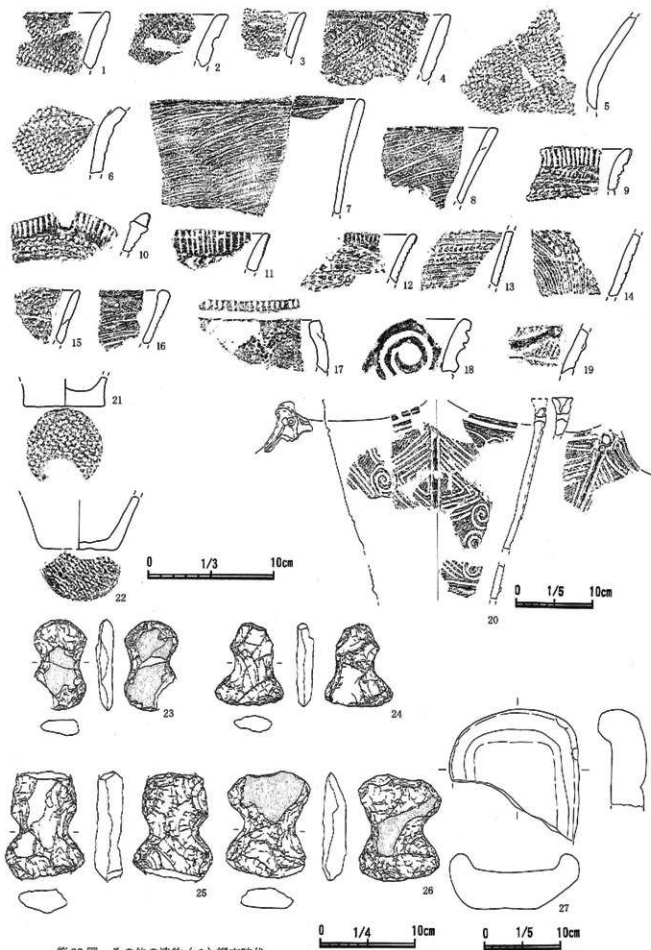
平面は、南北約 3.8 m、現存東西長約 2.6 m の隅丸円形に幅 30 ~ 35 cm、深さ 8 ~ 15 cm 程の溝が廻るもので、東に 0.7 × 0.7 m の張り出しがあり南西部は確認できなかった。付近に小穴などは見られるが、本跡に伴うものと判断し得る小穴や床面、火処などは認められなかった。

遺物の出土は無く、確認面や溝部分の埋積土から該期の遺構と判断したが、性格は不明といわざるを得ない。

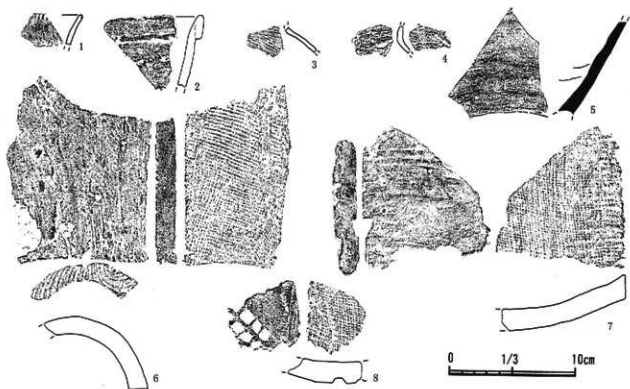




第37図 その他の遺構(2)SX-01・02



第38図 その他の遺物(1) 縄文時代



第39図 その他の遺物(2) 古墳時代以降

#### 7. その他の出土遺物(第38・39図、図版25、第8～10表)

調査区内の表土、古墳の周溝や封土中より縄文時代前期から奈良時代にわたる土器や石器が少量出土した。縄文土器は、前記の黒浜式、浮島式、興津式、中期の阿玉台式、加曾利E式、後期の堀之内式の土器、打製石斧、石皿などが出土した。これらは調査区全域にわたって散在したが、後期堀之内I式の大型の破片(第38図20)は斜面下方の3号墳の墳丘下より出土し、付近に関連する遺構が存在した可能性も否めない。

また、古式土師器(第39図1～4)片も僅かながら認められた。さらに、東海系と見られる須恵器壺(第39図5)や古瓦(同6～8)も出土している。殊に古瓦は調査区の東方約60mに上戸祭大塚瓦窯跡が確認されており、瓦窯跡との関連が目される。

第7表 墳穴・1号墓出土土物観察表

No.	種別 器種	大きさ (cm)		遺存度	形状・手続等	土質・焼成・色割		出土位置・備考
		口徑	高さ・底径			土質	焼成・色割	
1	土製器 片	口徑 15.0 口徑 8.6 底径 —	—	90%	縁作り、口辺部内外面磨ナゲ、内部ナゲ後ミガキ、底縁外面磨り後ミガキ	粘土 焼成 良 色割 内 黒色・外 灰褐色	—	墳地土
2	麻織器 蓋	口徑 15.8 脚高 5.3 底径 —	—	完形	コケロ製用、平は磨り、ツマミ周囲はナゲ	粘土 焼成 良 色割 内 灰褐色	—	墳地 外部外縁にヘラ記号
3	麻織器 片	口徑 13.8 脚高 4.4 底径 8.2	—	90%	コケロ製用、底縁外面磨り	粘土 焼成 良 色割 内 灰褐色	—	墳地 外部にヘラ記号
4	土製器 壺	口徑 (15.8) 脚高 28.4 底径 (7.6)	—	90%	縁作り、口辺部内外面磨ナゲ、体部外面磨り、内面ナゲ、底縁外面磨減	粘土 焼成 不十分 色割 内外 灰褐色	—	墳地 内外面にカーボン付着、体部下半部焼
1号墓 1	土製器 片	口徑 (13.8) 脚高 — 底径 —	—	90%	縁作り、口辺部内外面磨ナゲ後ミガキ、底縁外面磨り、内面ナゲ後ミガキで黒色焼成	粘土 焼成 良 色割 内 黒色・外 黒色・灰白色	—	B55-01 埋積土

第8表 その他の出土土器(縄文)観察表

No.	種別 器種	大きさ (cm)		遺存度	形状・手続等	土質・焼成・色割		出土位置・備考
		口徑	高さ・底径			土質	焼成・色割	
1	縄文土器 陶片	口徑 — 脚高 — 底径 —	—	断片	縄文	粘土 焼成 良 色割 内外 におい赤褐色	—	1号墓北東部包含層 埋積層1式
2	縄文土器 陶片	口徑 — 脚高 — 底径 —	—	断片	縄文	粘土 焼成 良 色割 内外 灰褐色	—	S2-3南東北東埋土 埋積層1式
3	縄文土器 陶片	口徑 — 脚高 — 底径 —	—	断片	縄文	粘土 焼成 良 色割 内 におい褐色・外 明褐色	—	S2-3溝庄包含層 埋積層1式
4	縄文土器 陶片	口徑 — 脚高 — 底径 —	—	断片	縄文	粘土 焼成 良 色割 内外 明褐色	—	S3-01-1 埋土下層 埋積層1式
5	縄文土器 陶片	口徑 — 脚高 — 底径 —	—	断片	羽状縄文	粘土 焼成 やや良 色割 内外 灰白色	—	S2-4船土封土 埋積層1式
6	縄文土器 陶片	口徑 — 脚高 — 底径 —	—	断片	縄文	粘土 焼成 良 色割 内外 におい灰褐色	—	S2-3墳丘東部包含層 埋積層1式
7	縄文土器 陶片	口徑 — 脚高 — 底径 —	—	断片	半截竹管による平行状紋文	粘土 焼成 良 色割 内 灰褐色・明褐色・外 褐色・焼灰色	—	S2-3墳丘南面土 埋積層1式
8	縄文土器 陶片	口徑 — 脚高 — 底径 —	—	断片	半截竹管による平行状紋文	粘土 焼成 良 色割 内 褐色・外 焼灰色	—	S2-3船土南西封土 埋積層1式
9	縄文土器 陶片	口徑 — 脚高 — 底径 —	—	断片	斜み目の敷状口辺に付引き文	粘土 焼成 良 色割 内外 褐色	—	S2-3溝庄北東埋土 埋積層1式
10	縄文土器 陶片	口徑 — 脚高 — 底径 —	—	断片	斜み目の敷状口辺に付引き文	粘土 焼成 良 色割 内外 褐色	—	S2-3溝庄北東埋土 埋積層1式
11	縄文土器 陶片	口徑 — 脚高 — 底径 —	—	断片	短枚状と半截竹管文	粘土 焼成 良 色割 内外 褐色	—	S2-3墳丘東部包含層 埋積層1式
12	縄文土器 陶片	口徑 — 脚高 — 底径 —	—	断片	斜み目と半截竹管文	粘土 焼成 良 色割 内外 褐色	—	S2-3溝庄北東埋土 埋積層1式
13	縄文土器 陶片	口徑 — 脚高 — 底径 —	—	断片	半截竹管による平行状紋と付引き文	粘土 焼成 良 色割 内外 におい褐色 外 灰褐色	—	S2-3南東埋土 埋積層1式
14	縄文土器 陶片	口徑 — 脚高 — 底径 —	—	断片	半截竹管付筒による平行状紋と付引き文	粘土 焼成 良 色割 内 褐色・外 灰褐色	—	S2-3南東埋土 埋積層1式
15	縄文土器 陶片	口徑 — 脚高 — 底径 —	—	断片	縄文	粘土 焼成 良 色割 内 白色赤褐色	—	S2-3船土包含層 埋積層1式
16	縄文土器 陶片	口徑 — 脚高 — 底径 —	—	断片	集合状線に縄文	粘土 焼成 やや良 色割 内 褐色・外 焼灰色	—	S2-3船土南東埋土 埋積層1式
17	縄文土器 陶片	口徑 — 脚高 — 底径 —	—	断片	半截竹管文	粘土 焼成 やや良 色割 内 灰白色・外 明褐色	—	S2-3船土包含層 埋積層1式
18	縄文土器 陶片	口徑 — 脚高 — 底径 —	—	断片	帯帯と比喩による模様の文	粘土 焼成 良 色割 内外 におい褐色	—	S2-3溝庄北東埋土 埋積層1式

第8表 その他の出土土器(縄文)観察表

( ) 鑑定目 [ ] 保存目

No.	種類	大きさ(cm)		保存度	形状・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
		口径	高さ・底径				
19	縄文土器 陶鉢	口径 — 胎高 — 底径 —	—	断片	縄文に施された 文に施された	胎土 砂粒質 焼成 良 色調 内 灰白色、外 黄褐色	S2-3墳丘包含層 中層部南向E式
20	縄文土器 陶鉢	口径 — 胎高 — 底径 —	—	大塚版片	版面部から垂下する胎高の周を流版文に上 り延び、全体に縄文を施文	胎土 砂粒質 焼成 良 色調 内 浅黄褐色、外 明黄褐色	S2-3墳丘包含層 横溝部之内1式
21	縄文土器 陶鉢	口径 — 胎高 — 底径 8.4	—	断片	底面外周縁目取	胎土 砂粒質 焼成 良 色調 内外 褐色	S2-3墳丘包含層 横溝
22	縄文土器 陶鉢	口径 — 胎高 — 底径 (5.8)	—	断片	底面外周縁目取	胎土 粗砂粒質 焼成 良 色調 内 灰白色、外 褐色	1号墓清土層土 器類

第9表 その他の出土遺物(石器)観察表

( ) 鑑定目 [ ] 保存目

No.	品名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	保存度	材質	出土位置	備考
23	打製石斧1	9.4	8.6	1.7	100	80%	砂岩	1号墓清土下一層	
24	打製石斧2	8.6	7.2	1.7	94	100%	砂岩	S2-3包含層	
25	打製石斧3	11.0	8.4	3.4	358	100%	砂岩	S2-4墓室封土一帯	
26	打製石斧4	[10.9]	8.3	2.8	324	80%	ホルンフェルス	S2-5清土封土一帯	
27	石錐	—	17.2	7.5	1769	80%	燧石	S2-4包含層	

第10表 その他の出土遺物(土師器・須恵器・瓦)観察表

( ) 鑑定目 [ ] 保存目

No.	種類	大きさ(cm)		保存度	形状・手法等	胎土・焼成・色調	出土位置・備考
		口径	高さ・底径				
1	土師器 甕	口径 — 胎高 — 底径 —	—	断片	口辺部内外面ナゲ、口唇に刻み目	胎土 砂粒質 焼成 良 色調 内 灰白色、外 褐色	南東土土
2	土師器 甕	口径 — 胎高 — 底径 —	—	断片	内外面ナゲ、折り返し口辺	胎土 砂粒質 焼成 良 色調 内外 黄褐色、外 褐色	S2-5墳丘南東封土
3	土師器 甕	口径 — 胎高 — 底径 —	—	断片	輪郭み、体部外縁ハケ目、内面ナゲ	胎土 砂粒質 焼成 良 色調 内外 黄褐色	S2-3南東土土
4	土師器 甕	口径 — 胎高 — 底径 —	—	断片	口辺部外縁ナゲ後ミガキ、体部内外面磨 り	胎土 砂粒質 焼成 良 色調 内外 灰白色	墳丘北西封土
5	須恵器 甕	口径 — 胎高 — 底径 —	—	断片	コノロ形状、体部外底の下位縁の削り	胎土 砂粒質 焼成 良 色調 内外 灰白色	調査区東土一帯
6	瓦 方瓦	口径 — 胎高 — 底径 —	—	断片	上面に着目、凸面はナゲ、小口面に糸切痕、 縁部には1面磨り	胎土 砂粒質 焼成 良 色調 面凸 褐色、裏面褐色	SK-06 墳土上層
7	瓦 女瓦	口径 — 胎高 — 底径 —	—	断片	上面に着目、凸面はナゲ、縁部には1面磨 り	胎土 砂粒質 焼成 良 色調 凸面黄褐色、凹面灰白色	S2-3瓦方土土
8	瓦 女瓦	口径 — 胎高 — 底径 —	—	断片	上面に着目、凸面に格子目手き	胎土 砂粒質 焼成 良 色調 凸面灰白色、凹面黄褐色	S2-4墳丘土土

### III 総括

#### 1. 土地利用の変遷

今次調査は本報告書の書名の如く、古墳群にその主眼を置いたものであるが、調査の過程で得られた知見を基に、当地の土地利用の変遷を以下に記す。遺跡名の後( )の数字は第3図、第1表と共通する。

**縄文時代** 今次調査区では、土坑6基、集石遺構1、性格不明遺構2基を調査し、前期～後期にわたる土器の他、打製石斧や石皿などの石器が出土した。土坑のうちSK-04・16・22は規模・形状から所謂「陥穴」と呼ばれるもので、斜面上方の16から04・22とほぼ直線に並び、それぞれの間隔は17mと7.5mであったことから16と04の間にさらに1基の存在を想定して精査したが確認されなかった。これらは、遺物の出土は無いが形状などから縄文時代早期の所産と推察される。また、当地は遺物の出土量や確認した遺構の状況から定住の地では無く、生産活動の場として利用されていたと考えられる。

なお、近隣の縄文時代の遺跡を見ると、東方約400mに松ヶ丘遺跡(20)、同約1.4kmに田向遺跡(23)、西方約1kmに北の前遺跡(21)、北西方約1.2kmに北原遺跡(16)、上戸祭中島遺跡(17)、北東約0.8kmに百穴裏遺跡(14)などの存在が知られるものの、調査例に乏しくその実態は明確でない。

**古墳時代** 該期の集落跡は西方約400mの前田遺跡(22)、同500mの北の前遺跡(21)、北西方約1.2kmの北原遺跡(16)、上戸祭中島遺跡(17)、北方約0.8kmの百穴裏遺跡などがある。このうち、大規模な調査が行われた前田遺跡では161軒(文献10)、北の前遺跡では3次にわたる調査で110軒(文献16・27)の古墳時代後期～平安時代の住居跡が調査された。その結果、本格的に集落が形成されるのは北の前遺跡が6世紀末葉、前田遺跡は7世紀中葉以降とされる。両遺跡は推定面積の2分の1程が調査されており、残りの部分で上記の状況が大きく変わることはないと思われる。とするならば、本古墳群の2～5号墳が6世紀中葉～後半代と考えられることから古墳を築造した人々の集落をどこに求めるべきか今後の課題といえよう。

また、宇都宮丘陵の古墳に目を向けると第1章第2項に記した如く多数の古墳群が所在し、その多くは古墳時代後期～終末期にかけて築造されたことが知られる。墳形は前方後円墳と円墳があり、円墳が大多数を占める。しかし、その中で本古墳群の大塚古墳は、全長62mと推定される前方後円墳の御蔵山古墳(31)を除けば円墳ながら他の前方後円墳の規模を上まわり特異な存在である。なお、周辺の古墳群ではその群の盟主的な存在の古墳は概ね埴輪の樹立が見られるのに対し、大塚古墳にはそれが見られない。

また、単独の大型円墳と認識されたり、墳丘の築成法や石室の形態を加味し、7世紀代の築造と見るむきもある(文献15・24)。これまでは、本古墳群内の他の古墳が調査されておらず違和感を覚えなかったが、周辺の古墳がいずれも6世紀代の築造と推定されるのに、その中心の最高所に占地する大塚古墳がこれらより数十年遅れて築かれたと見るのは疑問に思われる(注)。

古墳の周溝内及びその周辺より墳穴と考えられる土坑を16基確認した。遺物が出土したものは極僅かであり時期は限定し難いが、その多くは所謂「側壁抉込土坑」であり、古墳の築造後～奈良時代にかけての所産と見られる。

**奈良時代** この時代の遺構としては、1号墓とSK-10が上げられる。1号墓については前章で記した如く「墓」とするには今一つ決め手を欠く。しかし、逆にこれは何かと問われても答える術が無いのが現状であり不明遺構とすべきかもしれない。類例の増加を期待して今後の課題とした。次に、周溝内埋葬の墳穴であるSK-10は、周溝の埋没途中に抉り込まれたもので、その前面より打欠いて散布したと見られる状態で須惠

器の蓋と坏が出土している。本跡はこれらの土器から8世紀代の所産と判断され、散見される同種の遺構の中には該期のものが存在する可能性が高いが、遺物を伴わずそれを抽出することは出来なかった。

さらに、調査区内からは遺構に伴わないものの古代瓦が数片(SK-10の前面からも細片)出土している。おそらく、調査区の東方約60mの上戸祭大塚瓦窯跡(19)の製品と考えられる。この窯の製品は下野薬師寺に供給されたもので、前記の前田遺跡からも多数出土したことから、この窯の操業に関わった人々の集落と考えられている(文献10)。

**中・近世** 今次調査区内では遺構・遺物とも確認されなかった。しかし、調査区の東方約30mに所在する2号墳ではかわらけや渡来銭が出土しており、かわらけが墳頂部付近にまとまって出土したことから、この古墳を信仰の対象としていた可能性を指摘する。北方約800mに所在する県指定史跡の横穴墓「長岡百穴古墳」(13)では玄室の奥壁に仏像が彫られ信仰の対象とされていたものがある(文献2)。他の古墳群でも転用は多く見られる。しかし逆に、破壊して石材を取り出す例も多く見受けられる。その代表例として壬生町の桃花原古墳が上げられる。直径約63mの三段築成の円墳で、周溝を含めた直径は90mを超えると推定される。この古墳の石室は凝灰岩の巨石を使用していたが、後世の人々がこれを破壊して石材を取り出し、石塔類に加工したことが発掘調査によって明らかとなった。事実石室内には半製品の石塔類が多数残されていた(文献20)。筆者がかつて担当した、上三川町西赤堀塚古墳においても後部に構築された石室の上部が破壊されていた。側壁は河原石小口積みであるが、奥壁は凝灰岩で天井石も凝灰岩と推察され、天井石は全て無く、奥壁も上部は持ち出されていた。さらに奥壁下部も割って取り出そうとして中央に切り込みが入れられてあった(文献8)。類似の痕跡が5号墳の奥壁にも残されており、この古墳も石材盗掘の為に大規模に破壊されたと考えられる。その時期を知り得る遺物などは遺存せず明確にし難いが、中世末～近世の行為と推考する。

## 2. 古墳群・古墳について

**古墳群** 今次調査区は、大塚古墳群B区として3～5号墳について報告するものである。A区は、平成20年に東方約30mの地点で個人住宅の建設に伴って実施された、大塚古墳の南裾部と2号墳の調査である。

なお、大塚古墳は径53.4m、高さ6.2mと県内でも指折りの大型円墳であることから昭和32年に県指定史跡となった。昭和40年に盗掘騒ぎがあり緊急調査が行われた。この成果は昭和51年刊行の『栃木県史』(文献1)に収録されている。その中に「周辺に15基程の小円墳が散在している」との記載があり、このうち8基は現在「大ジノ古墳群」(18)として登録される一群を指すと考えられる。残り7基のうち現在把握できているのは2～5号墳の4基である。大ジノ古墳群は現在も雑木林の中に当時と同じ状態で残るが、大塚古墳群は周辺の開発が進み大塚古墳を除きすべて失われてしまった。

昭和58年刊の『宇都宮の遺跡』(文献3)では「大塚古墳」は単独で、「大ジノ古墳群」は8基の円墳からなる古墳群として記載、平成9年刊行の『宇都宮市遺跡地図』(文献14)もこれを踏襲する。しかし、昭和58年刊の『針ヶ谷新田古墳群』には「表6宇都宮市における主な後期古墳群」として「4. 大塚古墳群、総数12、～20m6、20～30m5、30m～1、円墳数基消滅」とある。さらに同書「表9宇都宮市における主な横式石室」には「11. 大塚古墳」の次に「12. 大ジノ6号墳、中略、開口大塚古墳群中」と記す(文献4)。当時は開口していたものも存在したようであるが、現在は8基の存在は確認できるものの、石室を見られるものは無い。県史の刊行から、7年後のことであり、この間に4基程消滅したものと思われる。

また、古墳群の立地を見ると(第2図)大塚古墳群は丘陵の南縁に占地し、最高所に大塚古墳があり、2

～5号墳は南斜面に連なる。大ジノ古墳群は大塚古墳の後（北）方のやや奥まった丘陵頂部からその南側傾斜地に所在する。本古墳群が6世紀代と考えられるのに対し、大ジノ古墳群には切石積の石室があったとされ、後出の古墳群と見ることが出来よう。大塚古墳のような大型円墳を擁する古墳群が僅か5基で構成されていたとは考え難く、立地から見て大ジノ古墳群も一体の古墳群と考えたい。

古墳 3基の古墳を調査したが、斜面上方の5号墳が径27.5m、中位の4号墳が19m、下位の3号墳が推定径18mと下がるに従い規模が小さくなる。ちなみに、過去に調査された2号墳は径12.9mとさらに小型であった。

いずれも斜面を巧みに利用した山寄式の形態を取り、墳頂部との比高が南と北で大きく異なる。

また、埋葬主体部は旧地表面より深く掘り込んだ掘方内に築かれた横穴式石室で、旧地表面上には天井石が露出する程度であった。このような構築方法から、封土の厚さも墳頂部で1m程と省力化され、周溝も幅2～3m、深さ0.4～1mと狭くて浅い簡素なものであった。石室が失われていた3号墳も前述の通り近隣住民の話から同様のものであったと考えられる。石室は玄室、羨道とも一体の掘方内に築かれていて、両者の床面の高低差は少ないが、墓道床面よりは大きく下がる。

石室はいずれも砂質凝灰岩を使用し、玄室奥壁は1枚石の鏡石を据え、側壁は加工度の高い割石（削石）を積み上げる。5号墳は全て凝灰岩であったが、4号墳は河原石が少量使用されていた。天井石は、4号墳が羨道1、玄室4の計5石が完存、玄門に楣石を設けない。5号墳は、玄室に原位置を離れたものが1石残存したのみで、羨道の天井石と見られるものが墓道脇、楣石と見られるものが墓道内に遺存していた。これらから推定すると、羨道1、玄室5石の計6石と考えられる。ちなみに、大塚古墳は、長さ5.17mの玄室が3枚の巨石で覆われているという。石室の規模は、5号墳が全長5.7m、玄室が長さ4.4m、幅0.97～1.4m、羨道が長さ0.6m、幅0.75m、4号墳は全長4.3m、玄室が長さ3.7m、幅0.95～1.25m、羨道が長さ0.9m、幅1.07mである。平面形はともに両袖型で、玄門に柱状の石材を用い、その間に板状に加工した間仕切石（闕石）を据える。5号墳はその上に楣石を載せていたと考えられるが、4号墳は無かった。また、5号墳の門柱石は上部まで通して用いられていたが、4号墳は短く下半部のみで、上半部は壁材をせり出して積みこれに替えていた。なお、4号墳は玄室の奥壁と接する付近の側壁をしぼり、胴張形を意識していると思われるが、5号墳はほぼ直角に接している。

側壁の石材は6面全体もしくは4～5面に加工が施されていることから、加工後に積み上げたことが判る。石材は硬度の違いによるものか、数種の加工痕跡が見られた。また、石材の積み方を見ると、4号墳の西壁根石のように大型の石材を用いる場合は平面を内側に向け掘方との隙間は裏込め材で固定する。また、直方体の石材を横置きにする場合と小口積みするものがある。掘方の壁との間隔が近い場合には長い石材を小口積みすることは不可能であり横長に積み、持ち送りによって壁材と掘方の壁の間隔が出来ると用材を小口積みにしてその末端に裏込め材を載せて固定していた。さらに、裏込め材が長すぎる場合は、掘方の壁面を挟り込んで納めてあった。側壁の持ち送りが強い5号墳では側壁の中・上位にこの積み方を多く見られたが、調査時には壁材が中程で割れていて裏込めが用を成さない状態であった。また、割石積みの場合、乱石積みという表現を目にするが、4・5号墳では水平に走る目地が複数認められることから、一定の高さに揃えつつ積み上げた通目積みをしており乱石積みにはあたらないと考えられる。

埋葬面は、4号墳は径4～15cm程の礫を敷詰めてあったが、5号墳は掘方の底面上に15cm程の厚さで凝灰岩片混じりの黄褐色が見られたものの、礫敷やタイル状の敷石は一石も認められなかった。敷石が破壊されたのであろうか。



羨道は前記のように短いもので、主に閉塞に利用されていた。5号墳は玄門の間仕切石の上にそれよりやや小振りの板状の石を積み上げて閉塞し、その外側に河原石と凝灰岩のブロックを積み上げて閉塞材を抑えていた。なお、5号墳では羨門付近に多数の人頭大の河原石が散在していたが、壁に河原石を使用していなかったことからこれらはすべて閉塞材であったと推定される。4号墳では羨門からその奥に河原石を積み上げて閉塞してあったが、追葬などによってその上部だけが開けられていた。その後はこの外側に長さ1.5m、径0.5mの大振りな凝灰岩を据えて、その両脇と上に河原石を積み上げてあったが、この上部も開けられていた。

今回の調査では遺構の遺存状態の割に副葬品の出土量が少なく、4号墳よりガラス小玉5点、耳環5点、刀子1点であった。しかし、墳丘下や周溝内より土師器がまとめて出土した。3号墳では墳丘東裾の封土下層より坏が80点以上、4号墳は墳丘南西部より高坏4点、坏3点、5号墳で周溝南東の底面より坏が30点まとめて出土した。このうち、4号墳については通常の墓前祭的行為の所産と思われるが、3・5号墳の場合は古墳の築造に関する儀礼に伴うものと考えられる。特に3号墳の場合は80個以上と多量であり、それが周溝や前庭部に廃（投）棄されたのでは無く封土下に埋め込まれていたという点では市内でも希少な事例であろう。5号墳周溝の30個は1人1個で30人程が関わったのかと単純に推定するが、3号墳の場合は80人以上の人が参加して集まったのか、1人2個で計40人、1人3個で27人程であったのか興味深い。なお、4号墳出土のものは一般に集落跡から出土するような通常の仕上げで使い減り感のあるものであったが、3・5号墳のものはやや粗製のものである。他の古墳でも前庭部などからまとめて出土する坏類に同様の傾向が見られ、現在の紙コップ、往時のかわらけ的な存在と考えられる。

以上から、今回の3基では5号墳が古く、その後4号墳が築造されるが、3号墳は封土中の土器から4号墳より前に築造の可能性をもつ。6世紀後半の中頃～後葉の築造と考えられ、大塚古墳はこれらに先行するが2号墳はこれらに近い時期と推定される。

### 3. 1号墓及び墳穴群について

**1号墓** 径5.6×7mの不整形に廻る溝の西端に0.9×2mの長方形の土坑が付随する遺構で、西側の土坑（墳）を埋葬部と推定した。この土坑は内部に多数の炭化材が遺存するとともに、壁面には火熱による赤化が見られ、内部で火が使用されたと判断される。また、溝部の埋積土に炭化物粒が混じり、溝の北側の底面に炭化材の遺存が認められたことから、両者は一体の遺構と考えた。なお、溝の区画内には何らの遺構も確認できなかった。土坑内からは炭化材以外に出土したのは土師器坏が1点（約2分の1）のみである。しかし、火葬墓・火葬場とした場合は若干なりとも白色化した火葬骨片が遺存すると思われるが本跡ではそれが皆無であった。

その点が本跡の名称を用いることに幾分の躊躇を感じるころである。

**墳穴群** 後期古墳群の調査を行うと、古墳の周溝内やその周辺より各種の土坑（墳）が確認される。副葬品と判断される遺物が伴う場合も希にあるが、大多数は遺構のみであり、形状や分布状態から古墳時代～奈良時代にわたる埋葬施設と考えられている。

今次調査区では計16基の土坑が確認されたが、SK-21は周溝外壁では無く墳丘裾に掘り込まれている点や形状から異なる性格の可能性をもつ。残り15基のうち、SK-10・11は4号墳、SK-06・12・18・19は5号墳の周溝外壁に直接あるいは接して掘り込まれた「周溝内埋葬」である。3号墳の残存部には認められなかったが、A区の2号墳では周溝北壁に1基設けられていた。古墳の被葬者と密接な関係にあった者の奥津城と

考えられる。他の9基は古墳と古墳の空間地に設けられたものであるが、これらも近接する古墳の被葬もしくは造営した集団と濃密な関係にあった者と推察される。

その形状を見ると、SK-06、1号墓(旧SK-01)のように挟り込みを持たないもの(I)と、挟り込みのあるもの(II)に分類され、後者が大部分を占める。また、後者はSK-02・14のように深さ40～50cmと非常に浅いものや、SK-05・07・20のように深さ1～1.2mと深く確り掘り込まれたものもある。さらに、(A) 堅坑の底面が深くこれより浅い位置に横坑を設けたもの(SK-07・20)、(B) 堅坑と横坑の底面が同じ高さのもの(SK-03・04・08)、(C) 堅坑より横坑の底面が深いもの(SK-02・04・09～14・18・19)に大別される。周溝内のものうち、SK-10～12・18は横口の開口部より横坑の底面が深いため(C)に含めた。

市内の調査事例を見ると、多数調査されているものの、やはり副葬品を伴うものは少ないようであるが、管見に触れたものを以下に記す。(遺構の名称は各報告書順ずる。)

1. 東谷・中島地区遺跡群 琴平塚古墳群では14基の古墳と土塚墓6基が調査され、5号墳墓壇2より耳環1点、6号墳墓壇2と8号墳墓壇1の縁辺より須恵器坏や高坏が出土(文献19)。
2. 聖山公園遺跡 將軍塚古墳では周溝内の土坑1内より白玉1点、土坑8の付近より土師器坏2、短頸壺1点、白玉1点出土。聖山公園6号墳土坑1より刀子1、鏝1、轆1、直刀2振が出土(文献5・7)。
3. 本村古墳群(平成18年度、3・5・6号墳調査) 10数基の土坑が調査され、3号墳周溝内のSK-17より耳環1点、5号墳周溝内のSK-12の横坑部より土師器坏が1点出土(文献21)。
4. 西刑部町、根本西台古墳群 3次にわたる調査で古墳23基、土塚墓40基以上を調査。5号墳周溝内のSZ-08よりガラス小玉が5点出土(文献22・23・25)。

単独の場合に比べ周溝内の施設に副葬品が多いように見られる。なお、南に隣接する上三川町多功南原遺跡の側壁挟込土坑SK-727では人骨が出土し、その出土状態から再葬の可能性が指摘される(文献18)。このことから、琴平古墳群の報告者は5号墳墓壇2より出土の耳環が本来2個1対であるべきところが1点のみであり、多功南原遺跡の例を加味し、再葬の可能性を指摘する。本村古墳群の場合も横坑内から1点だけの出土と同様の見方ができよう。また、南西に隣接する壬生町新郭古墳群では古墳の周溝のみならず先行する堅穴住居跡内に設けられ、SK-202からは刀子1、鉄鏃1、土師器坏2点などが出土している。この調査では複数の土坑の埋積土についてリン・カルシウム分析を行ったが、積極的に墓壇とみなす結果は得られなかったようである(文献17)。

確かに一括して墳穴と呼んではいるが、遺骸を納める横坑部分の規模を比較すると約0.25㎡～1.4㎡と様々で0.6～1.2㎡のものが多い。中・近世の横坑屈葬の土葬墓で棺に納められないものでは0.6×0.9mの0.54㎡位のものが多いが、横坑に納める場合はもう少し余裕が必要となろう。とすれば多くは一応の条件は満たしていることになるが、現段階では単純埋葬、再葬の双方の存在を考えたい。

今回の調査事例で特筆すべきものとして、周溝内に設けられたSK-06・10・18がある。SK-06は挟り込み土坑では無く、1.63×3.07mの楕円形で深さ0.8mの大型の土坑で、5号墳の周溝北東部の外壁を切って設けられていた。周溝の調査時に、埋積中よりローム土主体の層が確認され、いかなる事情によるものか判断に苦慮した。調査の進捗に伴いSK-06が確認され、その掘削残土を周溝内に敷詰めた事が判明した。この土坑内より遺物の出土はなかったが、周溝内のローム土中より完形の土師器坏が1点出土した。ローム土上面では無く、層中であつた点は疑問が残るが、古墳に伴うものではなく、本跡に伴うものと考えられる。

次に、SK-10は4号墳の周溝の北東外壁に設けられたもので、06号と同様に埋積土中にローム土主体の

層があり、そこから須臾器蓋、坏の破片が散乱状態で出土した。須臾器は蓋、坏各1点づつの破片が散在したものであることが判明した。これもSK-10の前面にあたり、本跡の遺物と判断した。

最後にSK-18は、5号墳の周溝東側底面よりほぼ方形の土師器甕が出土し付近を精査して確認された。前記の二者は周溝に埋積土が存在する状態でローム土の整地が行われていたが本跡は周溝底面に土器を供えてあった。横坑もそこから東下方に向けて抉り込まれており、古墳の完成後あまり時間を経ずに設けられたと判断された。出土遺物から、SK-06・18は6世紀後葉、SK-10は8世紀前葉と考えられる。従って、遺物の出土しなかった他の土坑についても同様の時間幅をもって構築されたと推察される。

本書の上梓にあたり、調査に対してご理解を賜りました事業主のオフィス永瀬有限公司 代表取締役永瀬昌弘氏をはじめ、調査・報告書作成についてご助力とご指導を賜りました関係各位及び機関に感謝申し上げますとともに、当地にねむる古代人の霊の安らかなることを念じ揮毫する。

※注 本書の説明後市橋一郎博士より、大塚古墳及び3～5号墳の年代観についてご教示を賜った。現地の視察の結果、5号墳は6世紀後半の中葉、4・3はこれより後続、大塚古墳はこれらに先行すると見るのが妥当であろうとのご意見を賜った。

## 参考・引用文献

1. 1976 『樹木県史』資料編・考古一 栃木県
2. 1979 『宇都宮市史』第1巻 宇都宮市
3. 1983 『宇都宮の遺跡』宇都宮市埋蔵文化財報告第10集 宇都宮市教育委員会
4. 梁木 誠他 1983 『針ヶ谷新田古墳群』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第11集 宇都宮市教育委員会
5. 梁木 誠他 1985 『聖山公園遺跡Ⅲ』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第18集 宇都宮市教育委員会
6. 塚 善夫他 1986 『瓦塚古墳群・日旗遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第19集 宇都宮市教育委員会
7. 梁木 誠他 1986 『聖山公園遺跡Ⅳ』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第21集 宇都宮市教育委員会
8. 大川 清他 1987 『百奈原孤塚古墳』国日本学芸史研究所
9. 伴山英樹 1990 『研究ノート 地下式土塚の一様相』『栃木県考古学会誌』第12巻 栃木県考古学会
10. 梁木 誠他 1991 『前田遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第29集 宇都宮市教育委員会
11. 伴山英樹 1992 『古代東国における墳墓の展開とその背景』『研究紀要』1 榑樹木系文化振興事業団埋蔵文化財センター
12. 梁木 誠・今平利幸 1995 『久那愛宕塚古墳 谷口山古墳 朝霧山古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第37集 宇都宮市教育委員会
13. 安藤英保・藤原勉 1995 『方形周溝と側室快込土坑の観察』『第5回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における奈良・平安時代の墓制 - 墓制をめぐる諸問題 - <第IV分冊 問題点の整理- 地誌討論に向けて >』東日本埋蔵文化財研究会栃木大会準備委員会
14. 1997 『宇都宮市遺跡地図』宇都宮市教育委員会
15. 大橋幸夫 1997 『下野の横穴石室と前方後円墳』『第2回東北・関東前方後円墳研究大会 シンポジウム横穴石室と前方後円墳 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
16. 今平利幸 1998 『北の前遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第252集 栃木県教育委員会、製とちぎ生誕学習文化財団
17. 内山敏行他 1998 『新塚古墳群・新塚遺跡・下り遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第214集 栃木県教育委員会、榑樹木系文化振興事業団
18. 山口耕一他 1999 『多功南原遺跡Ⅰ～Ⅲ』栃木県埋蔵文化財調査報告第222集 栃木県教育委員会、榑樹木系文化振興事業団
19. 中村亨史 2004 『真谷・中島地区遺跡群 琴平塚古墳群 西河部西原遺跡Ⅰ・2・6地区 4』栃木県埋蔵文化財調査報告第283集 栃木県教育委員会、製とちぎ生誕学習文化財団
20. 君島利行 2006 『桃花原古墳』壬戌町教育委員会
21. 三輪孝幸他 2007 『本村古墳群・本村遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第58集 宇都宮市教育委員会
22. 水野順敏他 2008 『みずほの台遺跡群』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第68集 宇都宮市教育委員会
23. 水野順敏他 2008 『みずほの台遺跡群Ⅱ』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第69集 宇都宮市教育委員会
24. 市橋一郎 2008 『榑樹木系における墳穴式石室の研究』『専修総合科学研究』第16号
25. 水野順敏他 2009 『みずほの台遺跡群Ⅲ』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第73集 宇都宮市教育委員会
26. 大塚雅幸・今平利幸 2011 『八幡山古墳群1号墳・大塚古墳群』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第77集 宇都宮市教育委員会
27. 水野順敏 2013 『北の前遺跡(B区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第82集 宇都宮市教育委員会



A. 調査区全景（北空中より）



B. 調査区全景（真上空中より）



B. 4号墳全景 (南空中より)



D. 1号墓全景 (西空中より)



A. 3号墳全景 (東空中より)



C. 5号墳全景 (南空中より)



A. 調査前遠景 (南東より)



B. 調査前全景 (北東より)



C. 調査区遠景 (南東より)



D. 調査区近景 (南より)

図版 4



A. 3号墳調査前全景（東より）



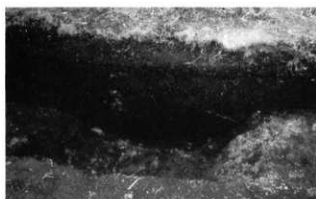
B. 同前全景（北東より）



C. 同前周溝南（北東より）



D. 同前周溝北（東より）



E. 同前北周溝西土層（東より）



F. 同前周溝東土層（南より）



G. 同前周溝内土器（北より）



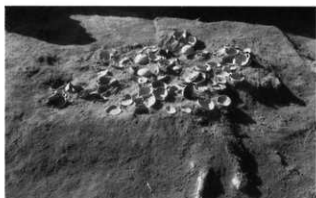
H. 同前近接（南より）



A. 3号墳封土東西土層（南より）



B. 同前墳丘東封土中の土器群（東より）



C. 同前（東より）



D. 同前（北より）



E. 同前土器群下層土層（東より）



F. 同前旧地表面（東より）



G. 同前縄文時代 確認面（西より）



H. 同前墳丘下出土遺物（北より）



図版6



A. 4号墳調査前全景（南東より）



B. 同前全景（南より）



C. 同前周溝北土層（東より）



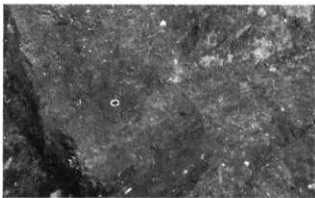
D. 同前周溝東土層（南より）



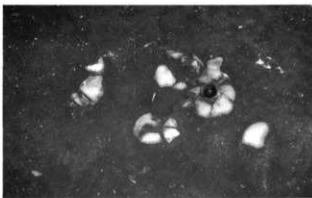
E. 同前周溝北東土層（北西より）



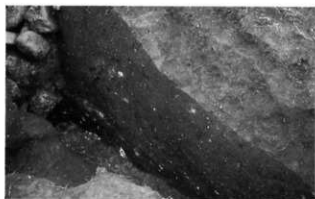
F. 同前周溝南土層（東より）



G. 同前周溝南 耳環出土状態（南より）



H. 同前南側土器出土状態



A. 4号墳墓道南北土層（南西より）



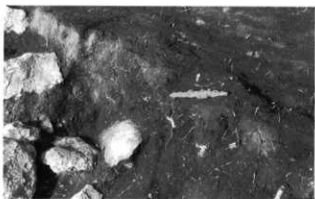
B. 同前石室外側の閉塞状況（南より）



C. 同前内側の閉塞状況（南より）



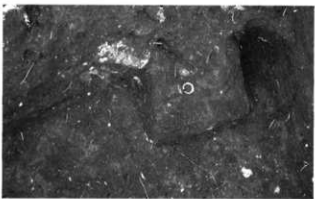
D. 同前（西より）



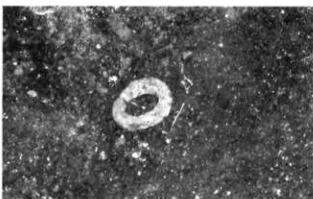
E. 同前羨門東脇の刀子出土状態（南より）



F. 同前（南西より）



G. 同前墓道の耳環出土状態（南より）



H. 同前墓道西上部の耳環出土状態

図版 8



A. 4号墳石室近景（南東より）



B. 同前石室北半部（南より）



C. 同前西壁（南東より）



D. 同前東壁（南西より）



E. 同前石室南半部（北より）



F. 同前（北東より）



G. 同前（北より）



H. 同前天井石（北下方より）



D. 同前天井石 (南下方より)



H. 同前天井石 (北下方より)



C. 同前奥壁 (南より)



G. 同前南半部 (北下方より)



B. 同前石室北半部 (南より)



F. 同前奥壁 (南より)



A. 4号墳石室兼門 (南より)



E. 同前天井・奥壁 (南下方より)



A. 4号墳墳丘東西封土土層（南より）



B. 同前中央部土層（南東より）



C. 同前封土南北土層（南西より）



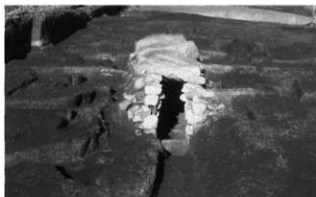
D. 同前封土東西土層（南東より）



E. 同前封土南北土層北半部（東より）



F. 同前石室天井石と旧地表面の掘込（北より）



G. 同前封土除去後の石室（南より）



H. 同前（東より）



A. 4号墳石室羨道東壁（西より）



B. 同前石室羨道西壁（東より）



C. 同前玄門（南より）



D. 同前玄門 横断面（南より）



E. 同前石室根石（南より）



F. 同前玄室横断面（南西より）



G. 同前石室根石（北より）



H. 同前玄室 横断面（南より）



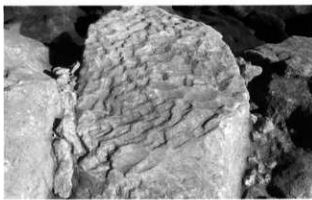
A. 4号墳石室掘方（南より）



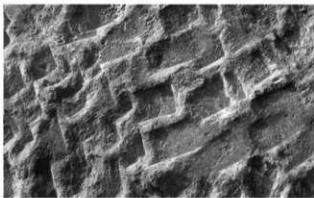
B. 同前（北より）



C. 同前東壁北半の扶込み（西より）



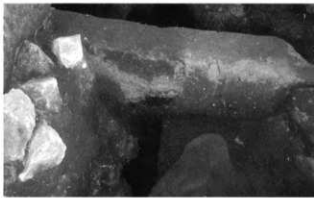
D. 同前石室天井石上部の加工痕（西より）



E. 同前天井石の加工痕（東より）



F. 同前近接（東より）



G. 同前石室上部の裏込め（東より）



H. 同前（南より）



A. 5号墳調査前全景（南より）



B. 同前全景（南より）



C. 同前周溝南側土層（西より）



D. 同前周溝北側土層（東より）



E. 同前周溝南東部土器出土状態(1)（東より）



F. 同前周溝南東部土器出土状態(2)（南東より）



G. 同前石室南側の河原石出土状態（南より）



H. 同前石室確認状況（南より）

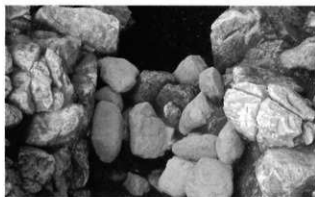




A. 5号墳石室全景（南より）



B. 同前（北より）



C. 同前閉塞（南より）



D. 同前玄門部（北より）



E. 同前石室（北東より）



F. 同前玄門部（北より）



G. 同前羨道東壁（西より）



H. 同前羨道西壁（東より）



A. 5号墳羨道追葬時床面（南より）



B. 同前羨道追葬時床面（南面）



C. 同前羨道部掘方底面（南より）



D. 同前玄門部断面（南より）



E. 同前奥壁（南より）



F. 同前玄室 横断面（南より）



G. 同前墳丘封土東側土層（南より）



H. 同前墳丘封土北側土層（東より）



A. 5号墳石室根石（南より）



B. 同前石室根石（北より）



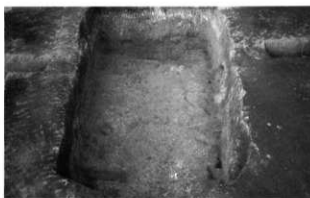
C. 同前石室奥壁（南より）



D. 同前二次加工痕（南より）



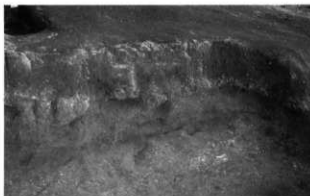
E. 同前石室奥壁縦断面（西より）



F. 同前石室掘方（南より）



G. 同前石室掘方（北より）



H. 同前東壁の抉込み（北西より）



A. 1号墓全景（南より）



B. 同前西側の土壇完掘（南より）



C. 同前土壇北端の炭化物（南東より）



D. 4号墳北東の土壇群（南西より）



E. SK-02 完掘（南より）



F. SK-03 完掘（南より）



G. SK-05 完掘（東より）



H. SK-06 完掘（南西より）



A. SK-06 手前のローム土中土器出土状態 (東より)



B. SK-07 完掘 (南より)



C. SK-08・09 完掘 (南東より)



D. SK-10 完掘 (南より)



E. 同前手前の土器出土状態 (南より)



F. SK-11 完掘 (南より)



G. SK-12 完掘 (南より)



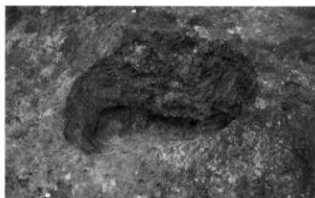
H. SK-13 完掘 (南西より)



A. SK-14 完掘 (南より)



B. SK-18 完掘 (西より)



C. SK-19 完掘 (南西より)



D. SK-20 完掘 (南より)



E. SK-21 完掘 (南東より)



F. 4号墳丘下の遺構 (南東より)



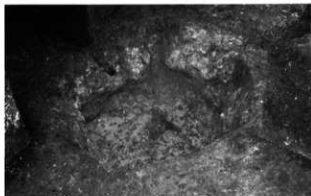
G. SK-04 完掘 (南東より)



H. SK-15 完掘 (南より)



A. SK-16 完掘 (南西より)



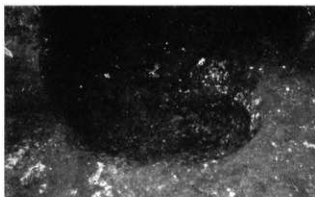
B. SK-17 完掘 (南より)



C. SK-22 完掘 (西より)



D. SK-23 完掘 (東より)



E. SK-24 完掘 (東より)



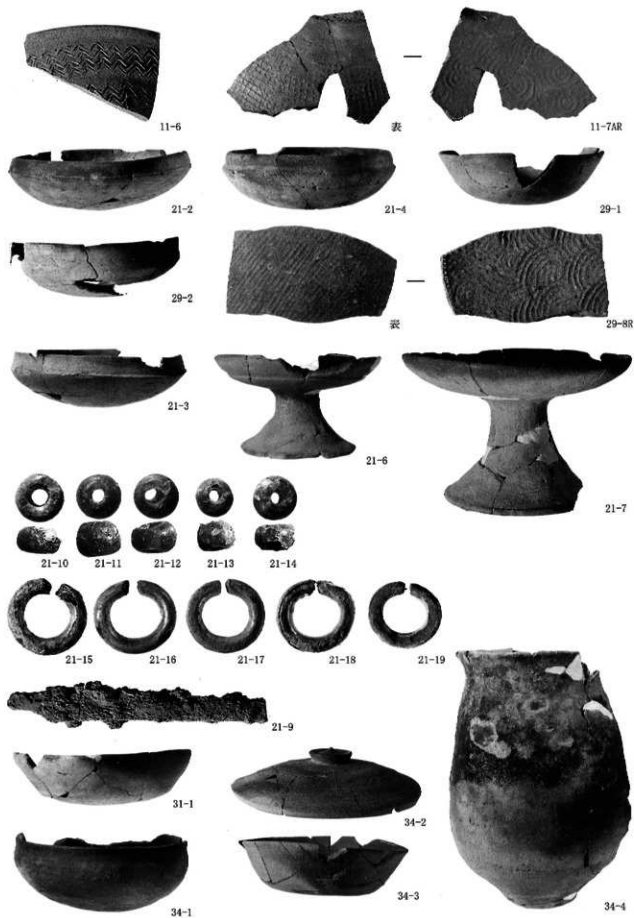
F. SS-1 完掘 (南より)



G. SX-01 完掘 (東より)



H. SX-02 完掘 (西より)



3~5号墳、1号墓、SK-06・10・18 出土遺物





12-1

12-2

12-3

12-5



12-4

12-6

12-8

12-9



12-12

12-14

12-15

12-11



12-16

12-13

12-17

12-18



12-19

12-20

12-21

12-22

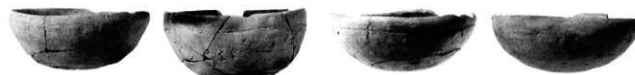


12-23

12-24

12-25

12-26



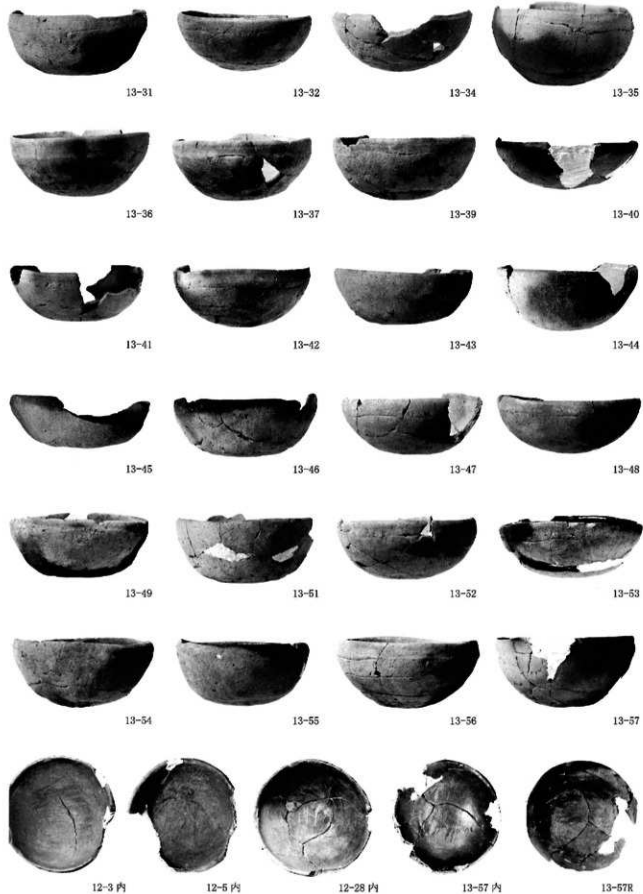
12-27

12-28

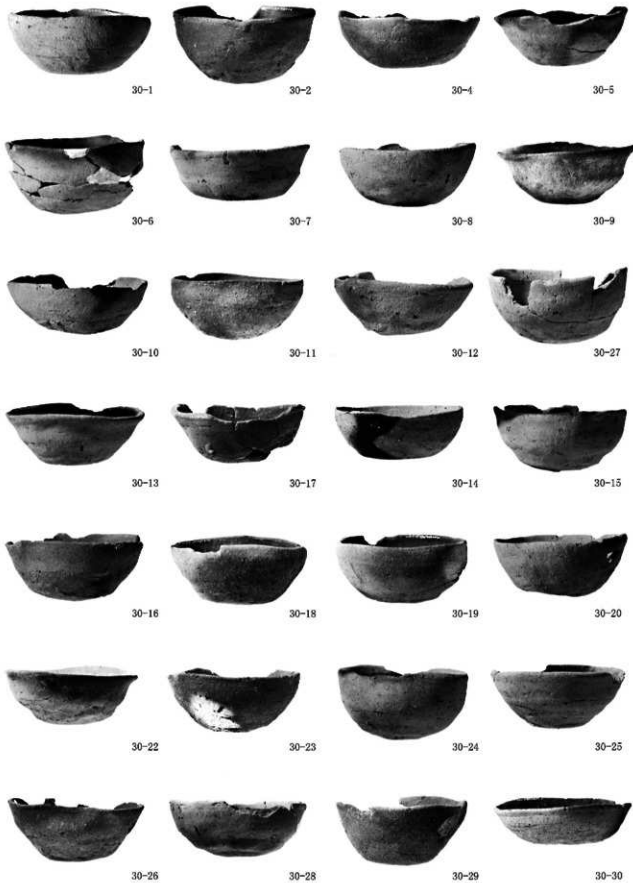
12-29

12-30

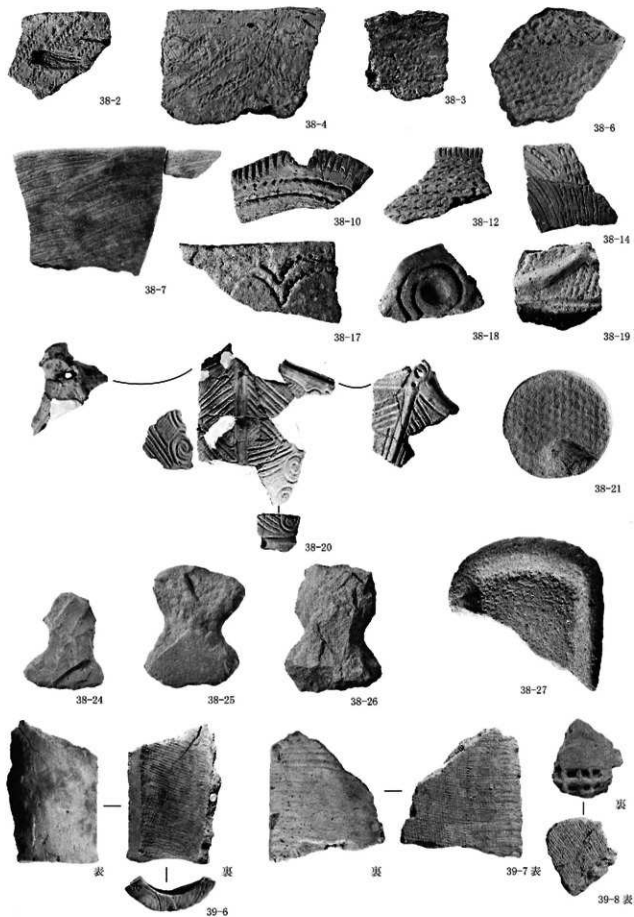
3号墳土器集中区出土土器(1)



3号墳土器集中区出土土器(2)



5号墳周溝南東部出土土器



その他の出土遺物（縄文土器、石器、瓦）

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおつかこふんぐん ひいく							
書 名	大塚古墳群 (B区)							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第87集							
編 著 者 名	石川和弘・水野順敏・柏嶋広伸・新井 潔							
編 集 機 関	株式会社 日本歴史研究所							
所 在 地	〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂 3112 TEL 0287-93-0711							
発 行 機 関	宇都宮市教育委員会							
所 在 地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭 1-1-5 TEL 028-632-2764							
発 行 年 月 日	西暦 2014(平成 26)年 7月 31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	° / ′	° / ′	調査期間	m <sup>2</sup>	調査原因
おおつかこふんぐん 大塚古墳群 (B区)	おおつかこふんぐん ひいく 大塚	宇都宮市上戸祭町 あぶらつか	9201 2359	36° 35′ 25″	139° 52′ 24″	20130910 ? 20140125	約 1,900 m <sup>2</sup>	民間宅地開発に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特 記 事 項	
大塚古墳群	古墳群 散布地	・古墳時代 ・奈良時代 ・縄文時代	・円墳 3基 ・竪穴 16基 ・墓跡、竪穴 各1基 ・土坑 7基 ・不明遺構 2基 ・集石遺構 1基		・土師器、須恵器、耳環 ガラス小玉、刀子 ・土師器、須恵器 ・縄文土器(前期～後期)、石器(打製石斧・石皿)			
要 約	・3基の円墳のうち2基に石室が遺存し、1基は天井石まで残存していた。副葬品は少ないものの、3号墳は封土中より約80個体、5号墳は周溝内より30個体の土師器坏がまわって出土した。							

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第87集

大塚古墳群 (B区)

発行年月日 2014(平成26)年7月31日  
 編 集 株式会社 日本歴史研究所  
 〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂 3112  
 TEL 0287-93-0711  
 発 行 宇都宮市教育委員会文化課  
 〒320-8540 栃木県宇都宮市旭 1-1-5  
 TEL 028-632-2764  
 印 刷 下野印刷 株式会社  
 〒320-0061 栃木県宇都宮市宝木町 1-28-11  
 TEL 028-622-6953